

雷鳴に恐怖せざるなし。

風益々加はり雨愈はげし、午後一時半頃風力最強く、偃松の枝とミヤマハンノキの幹とに結び付けしテントも風の爲に掀翻せられて殆んど用を爲さず、胸部に方數寸の乾けるどころあるのみ五體悉く雨に濡ふ。

雷鳴或は近く或は遠く或は強大或は弱少、雨も猛烈なるときは瀧の如く靜なるときは春雨のしとやかなるが如し、其の變幻測られず、時に斷雲の間より日光の漏れて雨に映するときは、玲瓏たる玉簾をかけたるが如く、閃々として千條萬條の銀箭の如し、其の壯美の感は下界に於て全く見る能はざるところなり。

午後三時に至つて猶ほ晝食を爲すこと能はず飢寒交々至る、即ち人夫を督して雨中に白樺の樹皮と偃松の枯枝とを集めしめ漸く火を焚きて食事を了り、僅かに凍餒を免かる。

午后四時雨再び猛烈、人夫は露宿準備の不十分なるにより下山を求む、此時刻より急ぎ下山せば番所の小舎に達するは難事にあらざれども、強雨中の下山決して容易の業と云ふべからず、さりとて爰に止まり夜に入りて雨猶ほ止まずんば頗る寒心すべきものあり、一時は決斷に迷ひたれども余は遂に爰に止まり一夜を雨中に明かさんと決意せり、時に白雲漠々たる絶頂の邊にあたり

て遙かに異響あり、耳をそばだつれば、

萬歳……………萬歳……………萬歳……………

此強雨中如何に剛氣なりども、人は絶頂に登ることなかるべし、

此怪しき叫聲、果して何者の叫びぞや、

嗚呼俗物今靈域を犯すを見て、雨師風伯猛威を逞うし吾人の前進を妨げ、今は一步も進む能はざるを見て、凱歌を奏せしにあらざるか。

夕刻に至るも雨容易に止まずされど雷鳴及び風力大に衰へたり、余等は一刻も早く雨の止まんとを祈れり、夜に入りて此雨猶ほ止まずんば或は凍死の厄に遇はざるべからず。

#### 一四 摩利支天の慘

所は乗鞍摩利支天火口壁の一角、白衣の先達を導者とせし一行十餘名の登山團、折りから吹きすさぶ暴風を避けて岩蔭に蹲れり、午後に至りて風雨一層はげしく五時頃に至りては寒氣肌に迫り、風雨は何時止むべしとも見えざりければ、一行中五名の者はかく風雨を防ぐ能はざるところに永居せば唯凍死を待つの外に道なし、僅かに十町許の彼方に石室あり、風雨如何に猛烈なるも



必死の勇を鼓して出でなんには、目的を達せざる事なかるべしと唱へ、將さに出發せんとせしに先達は夕刻に至らば此の雨必ず止まん、風雨止みて後行くべしとしきりに止めぬ、然れども五名の一行は容易に従はず、よりに先達は吾今法の力によりて此の雨を收めんと岩の一角に立ち、念珠打振り九字を切り天を仰むで大喝すれども、法の力や足らざりけん修業や未熟なりけん何の驗も見えずして風愈々加はり雨益々烈し、前に石室行を唱へし五名の者は、日没前に風を犯し雨を衝いて石室に達せん、若し天運拙くして中途に斃るゝも座して凍死を待つゝの愚に勝れり、萬一石室に達するを得ば安んじて一夜を明かすことを得べし、携帶の行糧亦兩三日を支ふることを得ん其の間に風雨收まらんと、行者の言に従はず風雨を犯して石室に向ふ、此一行は互に相助け漸くにして無事石室に達するを得たり、後に残りし六名は行者の言に任せ一向風雨の收まらん事を待てども其甲斐なく天候何時恢復すべしとも見えざりけり、遂に夜に入る、此に於て一行止むなく關を犯して石室に向ふ、しかも一直線に石室に向はんとして假松中を直進せり、嗚呼山に馴れざる彼等は、吾人登山者が山頂の鐵條網と呼びて最も恐るゝ假松中に入れり、快晴の日山に馴れたる者も假松中に入るときは進退の自由を失ふを常とす、まして風雨の夜飢寒に迫れる一行いかで萬一にも生命を全うすべきことを得んや、一進一退意の如くならず、一行六名假松の彼方此方に

算を亂して凍死（翌朝一名蘇生）せり、今も乗鞍の絶頂に、

凍死者 小牧篤彦君外四名追悼之標、

なる悲しき紀念を殘せり、

指折り數ふれば、實に之れ今より七年前の出來事なり、しかも同夜余は一行二十三名と白馬に登り、白馬尻の石室にて此の暴風雨に苦しめられたり、されど幸にして一名の死傷者をも出ださざりしも、七年の後又此山に於て暴風雨の厄に遇ふ、因縁淺からずと云ふべし。

さるにても、止めよ風、霽れよ雨、

不完全なるテントの下滿身雨に濡れて、ひたすら天候の恢復を待つのみ。

### 一五、紀念の銀笛

風雨の難に遇ふて、はしなくも前記七年前の慘事を想起せり、今又一篇悲惨の章を綴らん。

明治卅九年八月十一日、山岳會員テー氏の一行、鶴ヶ池のほとりより頂上を撮影せんとて、三脚を据え、しきりにビントグラスを窺ふとき、白衣の行者二名鈴音高く響かせて息せき走り來り、卿等は某美術學校の生徒にあらずや、今登路の途中屏風岩の下方に白き物を見たり、遙かに望め



ば、残んの雪の夫れかとも見ゆれど、残雪あるべきところにあらず、いぶかしければ崖下に至り、手にとり見れば白き一個の布呂敷包なり、益怪み開き見るには短刀、櫛、圖案手帳、外二三品あり、此圖案手帳にて思ひ合はす事こそあれ、昨夏八月某美術學校生徒惣代として、八月十一日、同校生徒二名此山に登りて遂に行衛不明となれり搜索を頼むとの書狀、山麓乘鞍神社々務所に來りし事あり、其の當時には遂に不明なりしが、滿一ヶ年後の今月今日、其遺物を得たるは何か深き因縁なるべし、二名の學生は遂に此附近にて凍死せしものならんぞ、深き感慨に堪えざるもの、如し、猶は其の行者は一行の人々に向ひ、しきりに絶頂の小舎に宿せん事を勸む、されど一行中には二名の病者あり、特に天候不穩の兆あり、且つ凍死者を出せる一週期、實に忌はしき事のみなれば頂上に登らず、下方の石室にて一夜を明かさんものと、石室に至る途中、岩の間に挿める一個の銀笛を見出せり、人の落すべきところならねば、必ず途に迷ふて凍死せし學生の遺物ならんと、之れを得たる一行は、云ひ知らぬ悲しさを覺えしとかや、

今指折り數ふるに、歳は六歳を隔つれど、月も違はず日も違はず、實に八月十一日の今月今日、時も確に此の夕暮、雨さへ風さへ吹きしきり寒氣堪え難き頃、此の附近の偃松の中に行き倒れ不歸の白骨となる、其の魂魄今も中有に迷ふらん

彼の二名の學生等は、風雨を冒して、此の偃松中を右往左往にさまよひしならん、此所彼所と石室を搜りしならん、滿身雨に濡れては寒氣堪ふべくもあらず、飢餓に迫りては心は矢竹にはやるとも其の甲斐やなからん、五體意の如くならず進退谷まりては助けをも叫びしならん、力の限り聲の限り、力盡き聲かれては、此銀笛は吹かざりしか、吹きしきりし笛の音の、分秒に細り行く其の音や如何なりしぞ。

今も岩角に鳴る風の音、銀笛の音のそれとも聞ゆ、二名の學生を凍死せしめし此の風雨、一刻も早く收まらずんば、乗鞍山上又一の慘話を殘さん。

### 一六、雲表の一夜、

恐ろしかりし雷電風雨も勢力次第に衰へ、不安なりし一日は全く暮れぬ、山麓にあたりて遙かに遠雷の轟々を聞くのみ、脚下の雨雲に電光の反照するを俯瞰するのみ、夜に入りては風全く收まり雨亦歇む、白濛々たる濃霧屢四邊を鎖す、山の如く積れたる枯枝は盛に燃え、火炎あたりを照らして白晝の如し、夜の更くるに従ひ四隣寂たり、又溪流の潺緩を聞かず虫聲の唧々を聞かず、實に太古の靜寂に返り、自己の呼吸に靜かに聲あるを聞くのみ。



午後十時假松の枝を敷き、毛布に身を包みて焚火の邊りに眠る。

前夜は大野川に宿り、粗朧と雖も食ふに肉あり、前々夜は淺間温泉西石川に宿し、寢るに絹襦袢ありき、今夜乗鞍の灌木帯中、野獸にだもしかざる生活をなす、境遇の變轉實に驚くべし、此日暴風雨中にあること九時間、心身の疲勞甚だしく、堅き假松の枝も意とせず、直に華胥に遊ぶ。翌午前二時半、一味の高寒紫府より來り短夢忽ち破る、乃ち起きて盛に火を焚き、天の明くるを待つ、前宵山を鎖せし雲霧跡なく晴れて、瓏々たる明月頭上に近し、骨に徹する寒氣ながら冬の如し。

### 一、一ノ池火口、

渺々漫々下界は之れ一面の雲の海、混沌として天地未だ分れざる太古の如し、空には一片の雲翳なく、暗褐色を爲せる山頂は將さに頭上に崩れんとす、其の一角既に朝暉に映じて珊瑚の色あり。

北方山脚に近く燒岳の噴烟、轟々として天を指す、我れに仙術あらば直に此雲梯を攀ぢて天に達せん、遙かに穂高、常念、槍ヶ岳、笠ヶ岳、立山何れも幾重の雲を突破して、大羸中の列島状

を爲せり。

午前六時テントを撤して頂上に向ふ、直に大殘雪を踏み、窪の小舎下方の石室附近より左方に登る、吾より先に白衣の人の頂上に向ふあり、距離遠くして言語通せず、其の何人なるかを知る能はず、前夜窪の小舎に宿せしなるべし、殘雪の附近より以上は草木稀少、山骨露出磊塊たる火山岩の堆積せる間、別に途と稱すべきものなし、唯頂上を目懸けて進めり、一ノ池火口壁の一角に達すれば、眼前一步の崖下窈然として一ノ池噴火口あり、皓々たる殘雪四壁を封じ、中央一の明鏡をなす、碧空を涵して連漚なく恰も油の如し、恐らく之れ山精の凝固せるもの、彼の水にはあらざるべし、猶ほ爛砂焦石の間に路を求め頂上に向ふ。

### 一八、絶頂、

八月十二日午前八時二十分、

余は今乗鞍一萬尺の絶巔に立てり、吾れより一步先に登攀せし白衣の乗鞍行者は、我が一行の爲めに、小祠前に蹲まりて前途の平安を祈れり、同行せし金澤一中生篠原雄氏と人夫とは、雄大な自然の大景に酔ふて喪心せるが如く、無言のまゝ岩角に立てり、



南方漠々たが白雲の彼方、屹然たる御嶽は指呼の間にあり、呼べば將さに對へんとす、木曾方面（東方）より望める御嶽は、山頂南北に蜿蜒し山容頗る複雑なごとも、今こゝより望めば完全なる圓錐形をなし、恰かも富岳を眺むるがごとし、其の山脚東は木曾の溪谷へ、西は飛驒の高原へ引ける有様、實に曲線美の極致と云ふべし、或者は富士山の形能美を説きて、

「理學上富士山の優絶なる所以は、其の麓底の平面より峰區に至るまで、同一距離の縦座標を以て山を幾個に横切し、一對の縦座標の和を其の差を以て除するに常に不變數の商を得、宛として對數曲線の定則を表はすにあり」

と云へり、北方より見たる御嶽亦此説を用ふべし、實に其の規律の整齊、至妙、余は「天工盡于此」の一句を叫べり。

西方飛驒の高原は、白雲の一團沈澱して高山の市街は伏瞰するに由なし、其の白雲の彼方巨鯨の如きは加賀の白山、白山、乗鞍及び富士の三山、殆んど一直線に立てり。

北方は脚下に摩利支天の火口壁あり、

山麓に近く黝黒なる圓頂の聳ゆるは、之れ燒岳の峰頭、二條の黒烟轟として天を指し、左なるは太く右なるは細し、其の末左になびきて灰雲の層をなし、判然として天界と下界とを分てり、

笠ヶ岳、立山、槍、常念、穂高の群峰一々指點すべし。

東方は白雲の波濤、荒れに荒れて、富岳其の他二三の峰頭を望みしのみ。

實に乗鞍山嶺の展望は、雄且つ偉なりと云ふべし。

花を養ふ者は一朝の樂みに三百六十四日の苦を忘れ、山に登る者は山嶺に於ける瞬時の展望に、登攀の苦艱を償ふて餘りあり。

### 一九、乗鞍の仙、

余等一行の爲めに、前途の平安を祈禱せし白衣の行者は、飛驒國大野郡丹生川の産板殿正太郎と呼ぶもの、乗鞍の仙人として山岳會員等の熟知せる人物なり、彼は乗鞍を好愛崇敬すること厚く、年十七歳にして始めて此山に登り、登路を開き、四方に説きて奥の院の室堂を作り、毎夏七月より九月に至る間室堂に止まり常に登山者の便宜を計る、登山者の路に迷へる者を導き、飢餓に迫れる者を助けし事幾何なるを知らず、一度乗鞍に登れる者は皆よく彼を知れり、彼れは乗鞍開山の爲め一身を犠牲に供し、名利の念を捨て、一意高山生活を營む、性剛毅其の自信の念の強き驚くべきものあり、其の云ふところ奇矯に失し、其の爲すところ常識を以て判断すべから



ず、余が御嶽の絶頂を撮影せんとするや浮雲ありて其の頂を蔽ふ、彼れは直に法術を以て之れを霧散せしめんと、岩角に立ちて祈禱する様の如き、深く自ら信せる者の如し、所謂古の行者仙人と稱する者は皆如斯類ならん。

彼れが苦心して建設せし奥の院の室堂は、風雨の爲め殆んど破壊せり、一ノ池火口壁の内部に完全なる小舎を作りたしとの希望を有せり、彼れその希望の如く小舎を作りて夏季若し爰に止まらば、登山者は非常なる便宜を得べし、

前日午後頂上に於て萬歳を三呼せし者は、飛驒方面より登山せし十餘名の一行雨を衝て頂上に達し、奥の院の小舎に宿せし由、彼の言によりて知ることを得たり、化け者の生體見たり枯尾花、怪しき叫聲遂に悪魔の叫びにてはあらざらん。

## 二〇、絶頂の落雷、

絶頂にある參謀本部の三角點を見るに、落雷の爲め微塵に破碎し、電撃の猛烈なるを想見せしむ、行者の言によれば、昨夏八月十六日、山岳會員オー氏飛驒平湯温泉の主人を案内とし登山せし時、四ヶ岳附近より雨と霧とを冒して山頂に達せり、山頂に近づきし頃より雷鳴しきりなりし

も、兎も角頂上を極めん者と多少の危険を意とせずして首尾よく絶巔に至り、案内者の祠前に降りて參拜せる間、オー氏は三角點の柱に據れり、此時轟然として三角點に落雷せしかば、同氏は感電して人事不省に陥れり、案内者も其の響と共に一たび倒れぬ、オー氏を願れば岩上に倒れ、紫黒色の怪雲あたりをこめ、慘憺たる光景なりしも、自身に異状なかりしを以て直にオー氏を抱き起し、背を打ち腹を押へ其名を呼びしに漸く蘇生せしかば室堂に移し、急ぎ下山し翌日人夫數名を伴ひ來り氏を平湯まで運びぬ、氏は身體數個所に負傷したれども、生命に別狀なく止まること一週間にして歸郷せりと

三角點の附近數ヶ所に徑一米突位の凹所あり皆落雷の跡なり、以て高山の尖頭に落雷の多さを知らべし。

## 二一、乗鞍火山の構成、

頂上に止まること二時間、歸途灌木帯以上に於ける、高山植物布分状態を精査し、本火山構造の大體を探り、再び大野川に下る。

此紀行を撰筆するに當り、聊か本火山の構成を説かんとす。



乗鞍火山の地貌を察するに、大體は烏帽子火山、鶴ヶ池火山、摩利支天火山、一ノ池火山の一大集團にして、高天原火山、十石火山は、實に其の附屬と見ることを得べし。

烏帽子火山は最北に位し、乗鞍火山群中最古の活動を爲せる者なり、外輪山は北方に向へる馬蹄形をなし略完全なり、北方は中央火口丘、四ヶ岳の噴出によりて破壊せられたり、中央火口丘と烏帽子外輪山との間にある火口原は、之れを乗鞍北平と呼ぶ。

烏帽子岳とは、此外輪山の最高點に名づけたる者なり、飛驒方面山麓より見るときは、烏帽子に似たる形状をなすにより此名あり。

鶴ヶ池火山は、烏帽子火山の南側に噴出せるものなれども、其の南方は摩利支天火山の噴出によりて破壊せられ、西方は猿岳火口丘の噴出によりて破壊せられたれば、舊火口壁は今東方の一部残存せるのみ、猿岳火口丘の頂上には、龜ヶ池と稱する火口湖あり、鶴ヶ池は鶴ヶ池外輪山と猿岳との間に生ぜし、爆裂火口の内部に瀦水せしものなり。

摩利支天火山は、鶴ヶ池火山の南側に噴出せる者、舊火口趾は東西に長さ楕圓形をなし、西北方の一部のみ猿岳火口丘の爲め破壊せられたれども、他は殆んど完全なり。

一ノ池火山は乗鞍の本岳と稱すべきもの、其の外輪山の最高點は海拔實に三千二十六米突、劔

ヶ峯と呼ばれる、群峯を抜きて雲表に聳えたり、乗鞍火山中最新の活動を爲せる者、略圓形の火口を有し底部に一ノ池の瀦水あり。

### 二二、乗鞍岳之植物、

乗鞍火山群は、地域廣大なると、高距三千米突に達するを以て、各植物帯よく現はれ、絶頂は殆んど地衣帯に入れり、而して本火山群は、北方より漸次南方に向て活動せしを以て、摩利支天以北に於て所産植物の種類に富み、却て最高峯たる劔ヶ峯は、最も近く活動せしを以て所産植物の分布は單純なりと云ふ事を得べし。

今各植物帯分布の状態を察するに、アールの小根以下は山麓帯にして、キミカゲサウ、ヤナギラ、ン、オニユリ等本帯所屬の植物多く、アールの小根を登り盡せば全く喬木帯の地域とす、ツガモミ等針葉樹の種類多く、樹下ネマガリザ、の密生する間には蘭科植物多し、

小大野川の水源に達し喬木帯を脱して灌木帯に入る、附近一面の偃松、ミヤマハンノキ、タケカシバ、ガンカウラン、ツガザクラ、イハカバミ、シヤクナゲ等の灌木類密生し、花を着けたるあり實を結べるあり。



灌木帯の領域は最も狭く、

海拔約二千六百米大残雪附近は純然たる草本帯とす、所産植物の種類は、決して多しと云ふべからず、其の單純なるは屢々火山活動の爲めに、熱灰焼砂を被覆せしによるにあらざるか、タウヤクリンダウ、オコマグサ、キバナノシヤクナゲ、キバナノコマノツメ、ウサギギク、イハキ、ヤウ等多し、特に石南科の小品ヂムカデの多數なりしは、各地の高山に於て未だ曾て見ざるところとす、

絶頂附近にありては、草本類も其の跡を絶ち、唯僅かに地衣類の岩面を蔽ふのみ。

之れを要するに、植物採集地としての乗鞍は、日本アルプス中第二流或は第三流の高山と云はざるべからず。

### 一三三、乗鞍岳の登路、

(1)大野川口、信州松本より西方五里にして島々に達すべし、島々は南安曇郡安曇村に屬す、此間馬車人車を通ず、島々に於て登山の準備を爲さざるべからず、島々より半里にして稻核あり、郵便電信局及一二の旅舎あり、此地より進むこと一里強、梓川の支流奈川を渡る、こゝを俗に奈川

渡と呼ぶ、奈川渡より猶奈川河岸の險路を進むこと約二十町、左折して大野川(梓川支流)に沿ふて進むこと十五町にして大野川に達す、大野川には旅舎あれども不完全なり、大野川より乗鞍絶頂まで五里と稱す、大野川より二時間にしてアトラの小根に達することを得べし、アトラの小根より喬木帯に入り、登ること約三時間にして灌木帯に出づべし、途中喬木帯には笹多くして、登攀困難なれども險路と稱すべきなし。

灌木帯に出づれば絶頂まで二時間弱を費すに過ぎず、然れども前登山者の足跡明ならず、登降共に案内者なくんば不可なり、奥の院の小舎は破壊せるを以て、摩利支天と主峰との中間なる鞍部にある石室に宿るべし。

植物採集及火山の構成等を研究せんとする者は、石室より平湯登山路を北に進むを可とす、石室より西行五色池を左方に見北に轉じて、摩利支天の山側を迂回し、鶴ヶ池火口の西壁に出で、其火口原不動平に下り、右折して猿岳火口丘の南及東の山麓を圍り、鶴ヶ池の西岸を過り、更に同火口壁の東部に登り、稍平坦なる山背を北行せば、進むこと五六町にして烏帽子岳外輪山の南端に達す、四ヶ岳中央火口丘は此前方に聳え、山側は外輪山と向斜して標式的火口原を爲す、(乗鞍北平)平湯路は此火口原に入り、中央火口丘の南麓に轉し、火口瀬に沿ふて下るなり。







## 高山の植物

### 一、高山の標徴

萬年の雪と高嶺の花とは、實に高山の標徴たる事は何人も異論なかるべし、若し彼の高山より體々たる、萬年の雪を融解し去らば、其の景象は頗る平凡化すべし、千紫萬紅、綸爛たる御花畑の百花凋萎せば、其の眺望は頗る殺風景たるを免かれざるべし、高山絶巔に於ける壯麗なる日出の光景も、偉觀なる雲海の眺望も、脚下に萬年の雪なく眼前に鮮麗なる百花の開くなくんば、其の壯麗其の偉觀、大半其の價値を失ふべし、

### 二、植物分布

高山に産する特殊植物を記述する前に、植物分布に就て聊か説明せざるべからず。世界の陸地を蔽へる植物は其の數實に夥しく、英國の植物學者「ベンザム」及び「フッカー」二氏が千八百八十三年に大成せし、植物自然科屬大全に擧げたるものは、顯花植物のみにて十萬



二百二十種あり、其の後各地に於て發見記載せられたる植物、及隠花植物を加ふる時は、其の數實に莫大なるべし、此等の植物は、世界の各地に、一樣に分布する者にあらず、皆特殊のフロラを形作り、彼の有名なる地理學者アレキサンデル、ファン、フンボルト氏は、南北亞米利加及太平洋の各地を旅行し、各地の風景に特殊の色彩あるは、全く其の地に産する、固有植物による事を發見せり、之れ後來植物分布學の基礎を爲せり、其の後グリスバハ氏は、氣候と地質の關係より全世界の植物を、二十四の區系に分てり、デ、カンドル氏及エンゲレル氏は、歴史的植物分布を研究せり、生態的植物分布の大家にはワルミング氏あり、生理的植物分布の大家にはシムペル氏あり、此等は皆世界各地の植物分布に就きて研究せしものなり、而して各地特殊植物の分布に就きて、至大の影響を及ぼす原因は、氣候の差異なり、特に其の要素たる温度に關係せり。

### 三、水平及垂直植物分布

温度の多少によりて、世界の氣候帯は、熱帯、温帯、寒帯、等の五帯に分れたれば、植物も之れに従つて、熱帯植物、温帯植物、寒帯植物の差異あり、斯く南北緯度を異にするに従つて、植物分布に差異あるにより、植物學上、如斯を水平的植物分布と稱す、而して又空氣の温度は地面に

接せる最下方は最も温暖にして、次第に空際に上るに従つて、寒冷なるは恰も平地にありて、熱帯より兩極に近づくに従つて、温度の低減すると異なることなし、緯度一度に於ける、公定温度の差は平均一度なり、而して高さに於ては、百米突を上る毎に温度は平均 $0.6$ 度だけ低下する割合なり、如斯有様なるによりて、平地の植物が低緯度の地より兩極に進むに従つて、差異あるが如く、山地にありては山麓より頂上に登るに従つて、植物の分布に相違あり、故に之れを垂直的植物分布と呼ぶ。

植物の垂直的分布に就きては、今より既に二百餘年前、佛人トルチブホー氏が小亞細亞なるアララット山に登りて研究せしところなり。

千八百四十九年に、英人ウィリアム、フッカー氏がヒマラヤ山中六千米突の高峰に登りて、ヒマラヤ日記と稱する有名なる著書を爲せり。

### 四、山地植物分布

本洲中部の高山に就きて、垂直的植物分布の有様を見るに、素より其の山の大小、位置、方面、其の他種々の状態によりて、多少の差異あるを免かれずと雖も、海拔約千米突迄は、山麓帯と稱



し、其の分布せる植物平地の者と大差なしと雖も、千米突乃至二千米突内外の地にありては、植物分布の状態、山麓帯と全く異なり、鬱蒼たる喬木帯をなせり、二千米突乃至二千五百米突内外の地に至れば次第に植物矮小となり、幾多の灌木密生せるを以て、灌木帯と呼べり、二千五百米突乃至三千米突の地にありては、所謂高山御花畑の發達せるところにして、灌木も其の數を減じ、一面に鮮麗なる花を着けたる、矮性草本の密布せるを見る、之れ高山草本帯なり、三千米突以上の山嶺にありては、分布せる植物は唯地衣あるのみ、故に地衣帯の稱あり、乃ち、山地植物の分布は

- 一、山 麓 帯 海拔 千米突以下
- 二、喬 木 帯 同 千米突乃至二千米突
- 三、灌 木 帯 同 二千米突乃至二千五百米突
- 四、草 本 帯 同 二千五百米突乃至三千米突
- 五、地 衣 帯 同 三千米突以上

此等の高さは大體に於て略一致し、時に頗る精確なる事あり故に植物分布の有様を見て、其の高度を知ると難からず、今其の一例を以て之れを證せん、信州有明山は、在來の地圖によれ

ば皆八千尺以上の標高を誌せり、然るに登山の結果、山頂と雖も未だ喬木帯の地域を脱せず、由て、拙著「やま」にて有明山は植物分布上より見るときは、到底八千尺の高度有せざることを記述せり、後日參謀本部の實測によりて、實に七千四百尺の高さを有するに過ぎざることを知り、而して爰に擧げたる各帯の高度は、日本アルプス地方を標準とせる者にて、漸々北方に進むに従つて低下すること勿論なり、實例に就て之れを云へば、鳥海山にありては吹浦口、鳥ノ海附近にて、既に草本帯の植物を見る、標高千六百米突に過ぎず、又岩手山にありては千七百米突にて、草本帯に達し、岩木山に於ては千二百米突にて同帯を見る、如斯、草本帯の位置北方に進むに従ひて低下し、北海道千島に至りては、平地海岸に於て既に草本帯の植物を見る、而して其の植物の種類も殆んど同様なるを見る、本洲中部高山の植物中に

- シコタンサウ(色丹草) シコタンハコベ
- チシマアマナ チシマキ、ヤウ
- チシマゼキセウ エゾゼキセウ
- リシリシノブ ウルツブサウ
- エゾノチ、コグサ エゾムカシヨモギ



等呼ばるゝ者あり、此等は皆發見地の地名を冠せる者なり。札幌農科大學教授遠藤博士の調査せる、占守島植物目錄によれば、總數三百二十餘種、内幾多の海岸性植物を含みたれども約百種は、皆内地高山に産する者なり、是に由て之れを觀れば、高山の植物は、寒帯の植物と同様の者なることを知るべし、故に、熱帯及温帯の高山は、寒帯植物の島嶼の如しと云へるシュレーテル氏の言の眞なるを見るべし。

### 五、山地植物の由來、

何故に高山に産する植物が寒帯植物と同様なるか、今其の由來を根源に溯つて探究するに、彼の地質時代なる、新世代第四紀の始め洪積世（二萬五千年前と稱す）に於て北半球は非常に寒冷、歐洲北米等の大部分は氷を以て蔽はれたれば、氷河の時代と呼ばれたり、去れば現今温暖なる地方までも、一般に寒帯植物分布したり、然るに此の寒冷なる時代は漸々去りて、次第に温暖となるや、此等の寒帯植物は平地にありては漸次北方に退却し、山地にありては漸々上方に移りて、今や頂上附近なる寒冷なるところに止まれるなり、之れ今日の如く高山頂に寒帯植物を見る所以なり。

### 六、高山植物とは何ぞや、

以上述べたるところによりて、高山の植物が、如何なる者なるかを理解すべし、然れども猶ほ次に一問あり、即ち。

高山植物とは何ぞや

之れなり、高山植物を冠する書籍等も數多あり、其の内容を精査すれば、喬木帯或は山麓帯の植物をも包括せるものあり、然れども喬木帯附近に産するものは、決して高山植物の特性を具せず、低地の者と殆んど區別なし、されば特に高山植物と呼ぶべきにあらず、世人動もすればトガクシショウマ、シラネアフィ等の珍種は、野草或は山草の名を以て呼ぶは、何となく物足らざる感あり、仍て徒らに高山植物の名を冠する者多し、喬木帯附近の者まで、之れを高山植物と呼ぶときは、高山植物の數は實に莫大の者となるべし。

歐洲アルプスの高山植物を記述せる二三の書を見るに、シュレーテル氏の著書には二百七十七種皆草本帯の者のみを挙げたり、ホフマン氏の圖譜には二百十三種、ウエベル氏の圖譜は四百種を載す、歐洲アルプスにありても其の數如斯、又某書の高山植物の定義を見れば、



## 高山に産する植物の總稱なり

とあり随分不完全なる定義と云はざるべからず、前に述べたる如く、本州中部に於て一萬尺内外の高山にある者も、千島附近にありては平地に産するを以て、産地の標高のみを以て標準と爲すこと能はず。

右の如くなるを以て、「山地草本帯に特産する植物を高山植物」と呼ぶを以て適當なりと信ず、日本森林植物帯分布より云ふときは、假松帯以上の植物を高山植物と云ふべきなり、特に特産と云ふは、假令高山草本帯にありても、ウメバチサウ、アキノキリンサウ、タンボ、の如く平原にある者は、之れを除くを適當と信すればなり、即ち、

高山植物とは、假松帯以上の地に特産する植物を云ふ

とすべきなり、故に日本に産する高山植物は顯花植物のみにては二百數十種を有するに過ぎざるべし。

## 七、日本高山植物の種類、

假松帯以上の地に産する高山植物中、主要なる者を左に掲げん（隠花植物を除く）

## 一、菊科

- 1、タカネハ、コ、2、エゾノチ、コグサ、3、ウサギヤク、4、ハ、コヨモギ、5、サマニヨモギ、6、ミヤマオトコヨモギ、7、タカネヨモギ、8、イハエンチン、9、エゾムカシヨモギ、10、ミヤマカウヅリナ、11、ミヤマウスユキサウ、12、ウスユキサウ、13、ミヤマヒコタイ、14、ヤハズタウヒレン、15、ヤハズヒゴタイ、16、タカネカウリンクワ、17、ミヤマタンボ、18、タカネウスユキサウ、19、ミヤマアヅマギク

## 二、桔梗科

- 20、ヒメシヤジン 21、ミヤマシヤジン 22、ホソバノミヤマシヤジン 23、チシマキ、ヤウ 24、イハキキヤウ

## 三、敗醬科

- 25、マルバノキンレイクワ 26、タカネヲミナヘシ 27、ハクサンオミナヘシ

## 四、忍冬科

- 28、リンネサウ 29、クロバナヘウタンボク

## 五、茜草科



30、キバナノカハラマツバ

六、車前科

31、ハクサンオホバコ

七、狸藻科

32、カウシンサウ 33、ムシトリスミレ

八、玄参科

34、ウルツブサウ 35、ユキワリシホガマ 36、ミヤマシホガマ 37、ヨツバシホガマ 38、エゾヨツ  
バシホガマ 39、セリバシホガマ 40、ヒメクワガタ 41、ミヤマトラノヲ 42、ミヤマクワガタ

九、唇形科

43、タテヤマウツボグサ 44、イブキジャカウサウ

十、紫草科

45、イハムラサキ 46、ミヤマムラサキ

十一、龍膽科

47、イハイテフ 48、タウヤクリンダウ 49、ヲノヘリンダウ 50、チシマリンダウ 51、オヤマリン

ダウ 52、ミヤマリンダウ 53、タテヤマリンダウ 54、シマイケアケボノサウ 55、チシマセンブリ

十二、櫻草科

56、ナンキンコザクラ 57、チシマコザクラ 58、エゾコザクラ 59、ミチノクコザクラ 60、エンド  
ウザクラ 61、ユキワリサウ 62、ユキワリコザクラ 63、ヒメコザクラ 64、オホサクラサウ 65、ヒ  
ナザクラ 66、コイハザクラ 67、ツマトリサウ

十三、岩梅科

68、イハウメ 69、イハカマミ 70、コイハカマミ 71、ヒメイハカマミ

十四、石南科

72、ウラシマツ、ジ 73、イハヒゲ 74、チムカデ 75、イハナン 76、アカモノ 77、シラタマノキ 78、  
イソツ、ジ 79、イハナンテン 80、ミネズワウ 81、アヲノツガザクラ 82、ツガザクラ 83、コメバ  
ツガザクラ 84、キバナノシヤクナゲ 85、エゾツ、ジ 86、アクシバ 87、イハツ、ジ 88、コケモ、  
十五、山茱萸科  
89、コゼンタチバナ

十六、繖形科



七、柳葉菜科

90、エゾニウ 91、イブキゼリ 92、ハクサンサイコ 93、ミヤマセントウサウ 94、シラネニンジン 95、ヤマウキキヤウ 96、イハテトウキ 97、ハクサンボウフウ 98、イブキボウフウ

六、董々菜科

99、ミヤマタニタデ 100、ミヤマアカバナ 101、イハアカバナ 102、チシマアカバナ 103、コアカバナ 104、エゾアカバナ 105、リシリアカバナ 106、シロウマアカバナ

五、金絲桃科

107、キバナノコマノツメ 108、ウスバスミレ 109、タカネキスミレ 110、オホバキスミレ

四、岩高蘭科

111、ヤマオトギリ 112、ミヤマオトギリ 113、タカネオトギリ 114、フジオトギリ

三、龍牛兒科

115、ガンカウラン

二、荳科

116、シロウマフウロ(アカヌマフウロ) 117、チシマフウロ 118、グンナイフウロ 119、ハクサンフウロ

一、薔薇科

120、ムラサキモメンヅル 121、タイツリワウギ(バウクワウウギ) 122、リシリワウギ 123、シロウマフウロ 124、イハワウギ 125、タカネワウギ 126、オヤマノエンドウ

127、ハゴロモグサ 128、ミヤマヤマブキシヨウマ 129、チシマヤマブキシヨウマ 130、エゾヤマブキシヨウマ 131、チヨウノスケサウ 132、ノウゴウイチゴ 133、チングルマ 134、イハキンバイ 135、チシマキンバイ 136、キンロバイ 137、ウラジロキンバイ 138、タカネバラ 139、コガネイチゴ 140、ベニバナイチゴ 141、エゾトウチサウ 142、チシマワレモカウ 143、カライトサウ 144、ナンブトウチサウ 145、シロバナトウチサウ 146、タチヤマキンバイ 147、ミヤマナ、カマド 148、タカネナ、カマド

一、虎耳草科

149、アラシグサ 150、ヒメウメバチサウ 151、シコタンサウ 152、ヒメクモマダサ 153、ムカゴユキノシタ 154、フキユキノシタ 155、クモマダサ

一、景天科

156、ミヤママンテングサ 157、イハベンケイ

一、十字科



- 199、ナンブトラノヲ 200、ムカゴトラノヲ 201、ウラジロタデ 202、ジンエフスイバ
- 203、ミヤマハンノキ 204、シラカンバ
- 205、チシマヤナギ 206、ミヤマヤナギ 207、イハヤナギ
- 208、キバナノアツモリサウ 209、アリドウシラン 210、ハクサンチドリ 211、フノヘラン 212、ニヨホウチドリ 213、テガクチドリ 214、シロウマチドリ
- 215、クロユリ 216、キバナノアマナ 217、クルマユリ 218、チシマアマナ 219、リシリサウ 220、チャボゼキセウ 221、ヒメイハシヨウブ 222、コバイケイサウ
- 223、ミヤマ井 224、エゾホン井 225、ミクリゼキセウ 226、ミヤマス、メノヒエ 227、ミヤマクロボシ
- 228、ミヤマヌカボシサウ

- 158、イハタザホ 159、ハクサンハタザホ 160、ミヤマハタザホ 161、ヤマハタザホ 162、フジハタザホ 163、ミヤマタチツケバナ 164、ナンブナヅナ 165、クモナヅナ 166、タカネナヅナ 167、モイハナヅナ 168、ハクセンナヅナ 169、シロウマナヅナ 170、ミヤマナヅナ 171、ミヤマガラシ
- 172、コマクサ 173、チシマヒナゲシ
- 174、ヤマトリカブト 175、チシマトリカブト 176、カタオカサウ 177、ハクサンイチゲ 178、ツクモグサ 179、ミヤマオダマキ 180、ミヤマハンシヨウヅル 181、ミツバワウレン 182、ミヤマキンバウゲ
- 183、チシマキンバウゲ 184、ミヤマカラマツ 185、モミチカラマツ 186、シナノキンバイ
- 187、タカネツメクサ 188、ミヤマツメクサ 189、ボンバツメクサ 190、テフカイフスマ 191、カトウハコベ 192、タカネミ、ナグサ 193、オホバナノミ、ナグサ 194、ミヤマミ、ナグサ 195、フノヘナゲシ
- 196、イハツメクサ 197、シコタンハコベ 198、シラオヒハコベ
- 199、ナシ
- 200、ナシ
- 201、ナシ
- 202、ナシ
- 203、ナシ
- 204、ナシ
- 205、ナシ
- 206、ナシ
- 207、ナシ
- 208、ナシ
- 209、ナシ
- 210、ナシ
- 211、ナシ
- 212、ナシ
- 213、ナシ
- 214、ナシ
- 215、ナシ
- 216、ナシ
- 217、ナシ
- 218、ナシ
- 219、ナシ
- 220、ナシ
- 221、ナシ
- 222、ナシ
- 223、ナシ
- 224、ナシ
- 225、ナシ
- 226、ナシ
- 227、ナシ
- 228、ナシ



## Ⅵ、莎草科

229、ハクサングスゲ 230、コタスキラン 231、ミヤマクロスゲ 232、イトキンスゲ 233、ミヤマシラスゲ  
 234、タカネスゲ 235、タカネクロスゲ 246、ミネハリ井 247、シロウマスゲ 248、ミヤマスゲ

## Ⅶ、禾本科

239、タカネヌカホ 240、ミヤマヌカホ 241、ヤマアハ 242、ミヤマノガリヤス 243、ミヤマイチゴツナ  
 ギ 244、リシリカニツリ 245、ミヤマアハガヘリ 246、タカネカウボウ

## Ⅷ、松柏科

247、ハヒマツ 248、ハヒビヤクシン

## 八、高山植物の培養

歐洲諸國にありては、高山植物の培養は、頗る進歩せるものあり、種苗の發賣せらるゝあり、規模宏大なる高山園あり、培養に關する幾多の参考書等ありて、培養の方法も頗る巧妙を極む、之れに反して我國にありては、高山植物の培養を試みしは全く近來の事に屬す、勿論彼の本草家が高山に産する藥草類を培養せし等の事は、多少之れ有りしなるべしと雖も、園藝的に其

の培養を試みしは、明治二十八九年頃を以て始まりと云ふべし、其の初めは近時流行を來せし、西洋草花の趣味の俗惡にして、日本の風韻に乏しきより、可憐なる野草を栽培せしに初まり、漸次深山幽谿を探るに至り、高山草本帶の草花の優雅高尚なるを歎稱し、之れを下界に將來して培養せしなり、先鞭を着けしは法學士城敷馬氏同木下友三郎氏日光の五百城文哉氏等なり、次で加藤松平兩子爵等あり、此等の人々は各地の高山に登攀して、珍種異草を集めたり、培養法も次第に巧妙を極め、明治三十五年五月城氏及五百城氏會主となり、木下氏等の贊助の下に五日六日の両日團子坂黨風園に山草會を開らき、衆庶の縦覽に供せり、鉢數約百四十、種類百二十餘種、就中九十餘種に花を着けたり、觀覽者は素より多數ならざりしも、同好者に多大の影響を及ぼせし者の如く、各種の新聞紙等も幾多の寫生圖を加へて發表するに至れり、此會は爾來年々開會するに至れり、明治三十六年より七年に亘りて、前田曙山氏は得意の筆を揮て、園藝文庫十二卷を著し、野草趣味を鼓吹せり、氏は又丸岡九華氏等と野草會を組織し、三十七年七月十二日丸岡氏方に其の第一會を催され、二百種以上を陳列せしよし、但し同好者のみの會合にて、一般に縦覽せしめしにあらざり、第二回は同年十月五日に開會せり、同會の提書に「花は野草に限れるにあらねど、幽趣あるを主とす、人は貴賤を選むにあらねど、鄙俗ならぬを賓と



す」と云ふ一條ありされば出陳せる種類は、皆山野草のみにあらざるべし、卅七年十月雜誌園藝界は前田氏の主幹にて、春陽堂書肆より顯はれたり、之れ殆んど山野草栽培家の機關雜誌とも云ふべきものなり、當時の日本園藝雜誌の如きも、其の記事の大部分は山草野草等の培養採集談を以て、埋められし有様なりき、特に高山植物の記事の如きは到處に歓迎せられ、高山植物の培養家も都鄙各地に生じ、盆栽家と稱する者は、必ず二三の高山植物を持たざれば、恥とするが如き傾向を來たせり。

されば利に敏き商人は、原産地より輸入して販賣するに至れり、然れども多くは山地より花蕾ある者を採集し來り、開花せしめし者なれば日ならずして凋萎し活着する者少なし、斯くて世人をして、一層高山植物培養の至難を感せしめぬ、近來に至りては自ら産地に至りて、採集する事を得る人々の外は、其の培養の困難なるより一般に倦色あり、然れども、高山植物の培養は、全く絶望すべき者なりや否や、項を改めて詳説せんとす。

### 九、高山植物の園藝的價值

高山植物は一般に其の花色、形容、鮮麗優雅なる者多く、彼の西洋草花の如く、爛美塗るが如

く、艶麗燃ゆるが如き者なく、高雅なる日本人の嗜好に適し、最も日本の風韻に富めり、高山植物と日本趣味の一致は、吾人の常に唱導するところ、都鄙高山植物栽培の流行を來たせるは、其の源全くこゝに存す、而して、將來に於ても、全然世人より遺棄せらるゝが如きことなかるべし、高山崇靈の地に産する植物は、寒暑の激變により、多年風雨霜雪に苦められ、僅かに數寸の高さにして、既に幾十年の星霜を経枝は曲げずして自ら雅、幹は助けずして自然に幽趣あり、而して全體の形容亦自然の風致に富めるは、到底人工の及ばざるところなり、之れを彼の日本の盆栽の人爲を以て、其の自然を抑壓し、強ひて天真の風趣を作りし者とは、素より同日の談にあらず、高山植物の園藝的價值は全くこゝに存す。

同じくこれ、高山植物と稱する者にも、園藝品として見るときは、花の愛すべきものあり、葉の見るべきものあり、花と葉と共に稱すべきものあり、今心に浮べるまゝ、其の例を擧げん。

甲、花の愛すべきもの

- 一、タカネウスユキサウ 二、キングルマ 三、イハエンチン 四、ミヤマアヅマギク 五、イハキ、
- ヤウ六、チシマキ、ヤウ七、リンネサウ八、キバナノカハラマツバ九、ムントリスミレ十、ミ
- ヤマシホガマ十一、ユキワリシホガマ十二、ミヤマクワガタ十三、ヲノヘリンダウ十四、ミヤ



マリンドウ 十五、オホサクラサウ 十六、ナンキンコザクラ 十七、ミチノクコザクラ 十八、ヒナ  
 ザクラ 十九、コイハカミ 廿、ツガザクラ 廿一、アヲノツガザクラ 廿二、キバナノシヤクナゲ  
 廿三、ヒメアカバナ 廿四、イハアカバナ 廿五、タウヤクリンダウ 廿六、タカネスミレ 廿七、キ  
 バナノコマノツメ 廿八、オホバキスミレ 廿九、シロウマフウロ 三十、オヤマノエンドウ 卅一、  
 ミヤマダイコンサウ 卅二、イハキンバイ 卅三、タカネイバラ 卅四、ヒメウメバチサウ 卅五、ミ  
 ヤマハタザホ 卅六、フジハタザホ 卅七、ミヤマナヅナ 卅八、コマクサ 卅九、ヒメオダマキ 四  
 十、ミヤマハンセウヅル 四十一、シナノキンバイ 四十二、ハクサンイチゲ 四十三、ツクモグサ 四十四、ムカ  
 ゴトラノオ 四十五、チドリサウ 四十六、ニヨハウチドリ 四十七、ハクサンチドリ 四十八、チシマアマナ 四  
 十九、クロユリ 五十、コバイケイサウ 五十一、タカネナデシコ 五十二、イハブクロ 五十三、ミツバワウレン 五  
 十四、ウルツブサウ

乙、葉の見るべきもの

一、ヴスユキサウ 二、ヤハズヒゴタ 三、ミネズワウ 四、コメツ、ジ 五、ギムカデ 六、イハヒ  
 ゲ 七、ミヤマウ井キヤウ 八、ガンカウラン 九、ハゴロモグサ 十、ミヤママンネングサ 十一、イ  
 ハベンケイ 十二、ヒメカラマツ 十三、ウラジロタデ 十四、ジンエフスイ 十五、チンマヤナギ

丙、花と葉と共に見るべきもの

一、ミヤマウスユキサウ 二、タカネスミレ 三、ミヤマムラサキ 四、イハウメ 五、イハワウギ 六  
 チングルマ 七、チャウノスケサウ 八、クモマグサ 九、シコタンハコベ 十、イハツメクサ 十一、  
 コバノツメクサ 十二、ミヤマツメクサ 十三、ミヤマミ、ナグサ 十四、タカネミ、ナグサ 十五、  
 ユキワリザクラ 十六、ユキワリコザクラ 十七、シナノオトギリ 十八、イハオトギリ 十九、コメ  
 バツガザクラ 二十、ミヤマアケボノサウ 廿一、エゾノチ、コグサ

以上は唯僅かに一斑を示せしに過ぎず、又必ずしも甲に擧げたる者も葉の見るべき者なきにあら  
 ず、乙に擧げたる者の中にも花の稱すべきもの亦多し、要は其の著しさを擧げたるのみ、爰に又  
 園藝品として其の培養の難易をも考へざるべからず、如何に園藝的價値を有するも活着せざるも  
 の開花せざる者等は如何ともすべからず、然れどもこは吾人の培養法の拙劣なるか、経験の足ら  
 ざるかによる事にて、全く活着開花せざる者ありや否は疑問とすべき處、ロビンソン氏の著書



にも如何にしても活着せざる者ある由見えれば、多数の高山植物中には容易に下界の氣候風土に馴致すること能ざるものあるが如し。

又現時に於ける高山植物培養法は用土其他人々によりて方法を異にし、甲者の成功せる者も乙者之れを學びて必ずしも良果を得ず、乙者至難とするところの者も丙者は容易なる者とするものあり、従つて其の方法の確實なる者少なし、故に高山植物の培養法は吾邦にありては未だ研究中の問題たり。

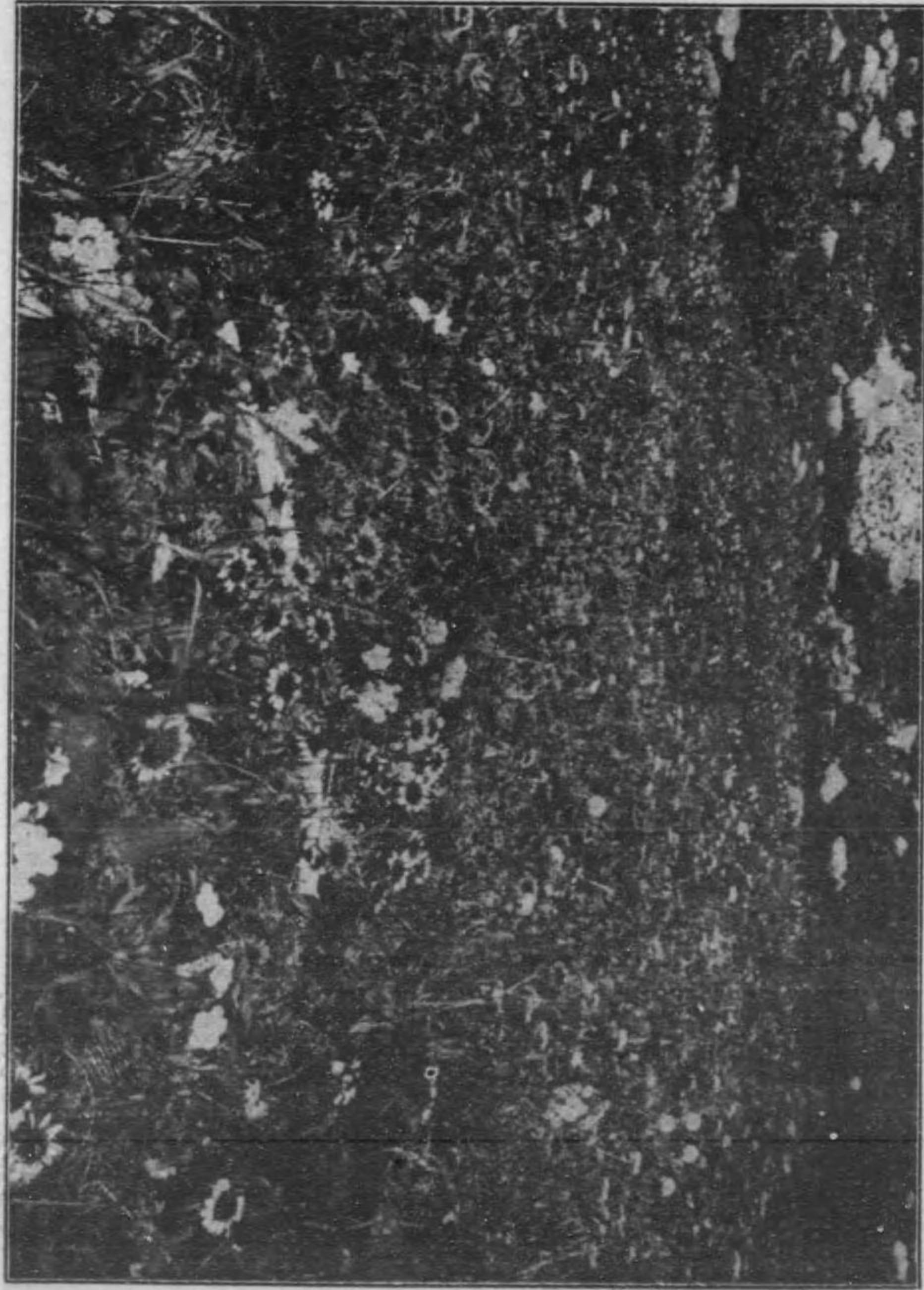
### 10、高山植物の馴致、

高山植物の培養の困難なるに失望せるもの多し、然れども絶對的に至難なりとは云ひ難し。

世人が花戸等より採集不完全なるもの、或は温室にて不自然の開花せしめしもの等を高價に購入し、其の培養に種々手を盡すも遂に枯死の厄運に遭遇するを以て、早計にも高山植物の到底下界の氣候風土に馴致し難しと速断するに至るは無理ならぬ事なれども、採集不完全移植時を失し不自然に開花せしものが活着せざるは實に高山植物のみならずなるなり。

花戸は利を以て目的とするもの、其の山地より採集し來るや、直に開花すべき花蕾あるものを

紫葉芽菜



(山馬白) 知花御

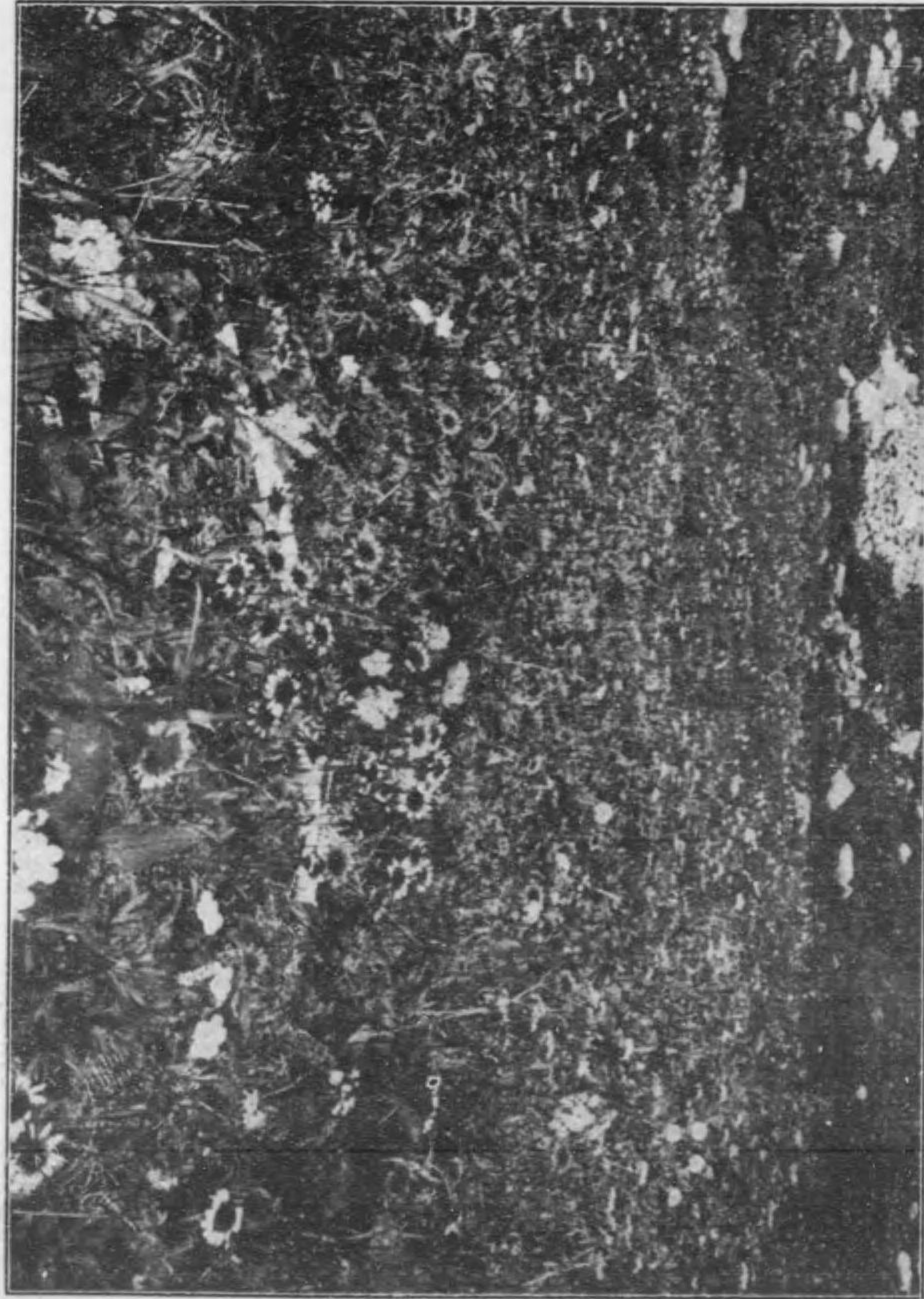


にも如何にしても活着せざる者ある由見えれば、多数の高山植物中には容易に下界の氣候風土に馴致すること能ざるものあるが如し。  
又現時に於ける高山植物培養法は用土其他人々によりて方法を異にし、甲者の成功せる者も乙者之れを學びて必ずしも良果を得ず、乙者至難とするところの者も丙者は容易なる者とするものあり、従つて其の方法の確實なる者少なし、故に高山植物の培養法は吾邦にありては未だ研究中の問題たり。

### 10、高山植物の馴致、

高山植物の培養の困難なるに失望せるもの多し、然れども絶對的に至難なりとは云ひ難し。  
世人が花戸等より採集不完全なるもの、或は温室にて不自然の開花せしめしもの等を高價に購入し、其の培養に種々手を盡すも遂に枯死の厄運に遭遇するを以て、早計にも高山植物の到底下界の氣候風土に馴致し難しと速断するに至るは無理ならぬ事なれども、採集不完全移植時を失し不自然に開花せしものが活着せざるは實に高山植物のみならずなるなり。  
花戸は利を以て目的とするもの、其の山地より採集し來るや、直に開花すべき花蕾あるものを

紫雲英



(山馬白) 知花御



求め、採集の勞を少くせんが爲めに出來得る限り根部を切除し、殆んど活力なき者を鉢に移し巧に土を押へ苔を着け恰も永年栽培せしが如き體裁を装ひ觀客を待つ、如斯ものは恰も花蕾ある切り花と異なることなし、世人が切花の早晩凋萎するを疑はずして獨り此鉢植の切花の凋萎を異とするは何ぞや。

又始めて高山植物の培養に志す人の中には、往々高山植物培養の困難なるを聞き、各種の培養を爲すは容易ならざるを以て、専門的に先づ蘭科莖類の如き美花を着くる少數の種類を栽培せんと試むる者あり、僅數の種類にして而して意の如くならざる斯くの如し、況んや、其の全體をやと絶望する人あるも、何ぞ知らん此れ等の種類は高山植物中培養至難の者なり、經驗に富める人々も至難とするところの者を無經驗にて培養す、意の如くならざるは素より當然の事なり、高山植物の培養は却てあらゆる種類を集め、之れを培養する間に云ふべからざる經驗を得、又多數中より活着せざる者を淘汰するの外途なきなり。

歐洲アルプスに産するシクラメン、アルメリア等が、一般普通の園藝品となれるは、幾多の忍耐と幾多の苦心とを要せしなるべし、本邦に産する高山植物も相當の苦心と忍耐とを以てせば、其の或種の者は低地の氣候と風土とに馴致せしむる事を得べし。



従来培養し來れる高山植物中、培養左程困難ならず、早晚下界の者と爲すことを得べしと信ずる、二三の種類に就きて其の状況を記さん。

一、ウラジロキンバイ

白色の軟毛を密布せる其の葉は確に高山植物の特性を發揮せる者、花は美なりと雖も花期短かく花梗長きに過ぐるを缺點とす、余の有する親株は八ヶ岳にて採集せしもの、既に八年間培養せる老株なり、實生によりて年々三四十株の新株を得、本種の如きは十分下界の氣候に馴致し得たりと信ず、本種は最も卑濕を忌む夏日も烈光の下に置き、常に排水に注意せば枯死すると少なし、播種の翌年開花す。

二、シコタンサウ

本種の培養も多濕と日蔭とを最も嫌忌す、排水に注意し烈光の下に置くべし、戸隠産のヒメタモマダグサは活着一層容易なり、然れども花は産地にありし時の如く多數開花せず、肥料は稀薄の者を屢々與ふべし。

三、タカチナデシコ

形容短少花形大にして頗る見るべきものあり、挿木と實生とによりてよく繁殖す、挿木或は

實生によれるものは、山地より採集せし者に比すれば強健なり、只花の色彩は原産地の者に比して劣れるは如何ともしがたし。

四、ミヤマクワガタ

本種も挿木實生共に成効す、播種するときはよく發芽す、發芽力の強盛なる他に比なし、能く開花すれども動もすれば莖葉の別なく菌類の寄生を受け易し、種子によりて更新し老株を長く培養せざるを可とす。

五、ハクサンフウロ (シロウマフウロ)

六、ダンナイフウロ

兩種ともよく種子を生じ發芽力も相當に強けれども、生長遅々として容易に開花せず、何れも自生品を採集すべし、活着せざることなし、排水に注意し肥料を施すときは、秋季紅葉し其の美花時に勝る。

七、ジンエフスイバ

蓼科の小品珍奇と云ふの外見所なければ、秋季の紅葉は鮮紅色を呈す、繁殖は播種による乾燥を忌むを忘るべからず。



八、クモマキンパウゲ

九、タカネキンパウゲ

クモマキンパウゲは、栽培比較的容易なる様思はるれども、タカネキンパウゲは余の経験によれば困難を感ず、クモマキンパウゲは實生を作り易し、何れも排水を可良にし、しかも乾燥せしむ可らず。

十、タウチサウ

十一、カライトサウ

タウチサウに二三の種類あり、何れも強健なれども花は面白からず、カライトサウは花頗る美なり、然れども開花すること少なく徒に莖葉のみ冗長となれり、開花せしむるには多少の工夫を要す。

十二、ノウゴウイチゴ

其の花は左程ならざれども、其の果實の美味は忘るべからず、栽培も容易、匍枝によりて盛に繁殖す、強健なれども開花すること尠し。

十三、ハクサンオミナヘシ

十四、マルバノキンレイクワ

兩者ともよく活着し開花す、花は原産地の者如く密ならず、排水良好なる土壌を選び、半蔭地に置くべし、全くの蔭地と烈光とを避くべし。

十五、シコタンハコベ

十六、ミヤマミ、ナグサ

十七、オホバノミ、ナグサ

十八、タカネミ、ナグサ

何れも石竹科に屬する小草、活着開花容易なり、實生、挿木何れもよく成效す、秋末莖葉枯死するも、掖芽或は頂芽のみにて繁殖す、掖芽は秋末肥大となりて枯死すること少し、何れもよく開花す、石竹科にてもツメクサ類の栽培は至難なる者の如し。

十九、コマクサ

罌粟科の小品、細裂せる葉に白粉を被り、花はケマンサウに似て淡紅紫色頗る美なり、活着容易なれども、小形の鉢にて開花せしめがたし、ロツクガーテンの頂上乾燥するところに、多量に砂を混じたる用土にて栽植すべし。



## 二、キバナノコマノツメ

黄花の莖々榮活困難ならず、然れども梅雨中より夏季に際し、菌類の寄生の爲め枯死すること多し、多雨の際は降雨に遇はしめざるを良しとす、播種して繁殖せしむることを得べし。

## 三、タカネスミレ

前種に酷似すれども、葉莖共に多肉質にして花濃黄なり、純砂に赤土を混じ、烈光の下に置くべし、

## 四、イハヒゲ

何れかと云はゞ活着困難なる者と云ふべし、産地にありては多数の花を着けたる者あれども、培養品は少数の花を着くるのみ、而して夏季に於て突然枯死することあり、原産地にありても頗る大株にて全く花を着けざる者多ければ、自生地之如く其の性質に好適せるところにありても必ずしも年々花を着くることなきが如し、突然枯死することあるは本種のみならず、ツガザクラ、ガシカウラン等によく見るところなり、余案するに如斯種類は何れも其の根繊細にして原産地の土を多量に附着せり、而して其の土壤は下界にある多数のバクテリアに對し免疫性ならざるが故に細菌の殖繁に遇ひ、枯死の厄運に遭遇するものならんと想像せらる。

## 五、コケモ、

淺間山地方にては甘露梅と稱するもの、矮少、石南科の一種灌木帯以上に普通なり、密生せる者を切り抜き來り大形なる平鉢に植ゆべし、活着容易又開花結實し美事なる盆栽を得べし。

## 六、タウヤクリンダウ

古來健胃劑として薬用に用ひられしもの到處高山に普通なり、活着開花すれども菌類の寄生の爲めに斃るゝこと多し。

## 七、ムカゴユキノシタ

珍奇なる種類其の産稀少なり、活着容易よく開花し葉腋に多数紅紫色の珠芽を生じ之れによりて繁殖す、原産地にありては濕氣多きところに産す、乾燥を忌むべし。

## 八、クロユリ

本種が御花畑に開花せる様を見るときは、何人も之れを盆養せんことを思はざるものなかるべし、然れども採集の翌年開花すること殆んどなく、次第に矮少となるのみ。

## 九、リンネサウ

忍冬科に屬し、蔓狀の莖を以てハヒマツの下に繁殖せり、故に盆養に際しても半日蔭をよしと



す、用土及置場にして適當なるときは意外に強健なり。

其、ハゴロモグサ

薔薇科に屬する者、花は殆んど見るに足らざれど其の産稀少なり、本邦にありては珍とすべきも歐洲アルプス及北部平原には普通に其産あり、種子にて繁殖す葉形稍見るべし、ノコギリサウの別名ハコロモサウと混同すべからず。

其、チシマキ、ヤウ

三、イハキ、ヤウ

兩種共開花至難と稱せらるゝもの、然れども秋季之れを採集するときは翌年大概開花すべきも、三年目以後は開花すること尠なし、乾燥せしむべからず。

其、オヤマノエンドウ

豆科に屬し、其の花紫色にして頗る美なり、播種すれば發芽すれども、發育せず栽培至難の種なり、單に活着せしむる事だに容易ならざるを以て、開花等は勿論望む事能はざるなり。

其、イハワウギ

其、シロウマワウギ

兩種とも亦豆科植物なれども活着開花し結實せし事なし、秋夏の交一旦落葉して秋季に至り翌年發生すべき芽の發芽するを以て、翌年は大抵枯死する事多し、如斯は高山植物に多く見るところ頗る苦心を要す。

其、フジハタザホ

可憐なる十字科植物、頗る強健種子はよく發芽し次年花を着く、春季融雪後直に開花す、花は純白高潔なり。

其、ミヤマオダマキ

産地にありては、莖葉短矮花形大にして頗る見るべしと雖も、余が實生にて培養せし者は高さ一尺四五寸、然れども花は自生地のものよりも、一層深碧紫色種子發芽力乏しからず。

其、ムカゴトラノヲ

蓼科の植物、イブキトラノヲに比すれば花穂小なるを以て見どとろ少なし、花穂の下方に多数の珠芽を生じ繁殖す、下界にて栽培するときは、花を着けずして花穂全部珠芽に變すること多し。

其、クルマユリ



高山草本帯に多しと雖も各地高原に其の産あり、其の花鮮麗頗る美なり、採集の時季を誤らざれば活着せざる事なし、採集の次年開花せざる事多し。

芫、チシマゼキセウ

余は各地の高山にて採集せしも、何れもよく活着す、然れども未だ開花せし事なきを以て、多少の研究を要す。

### 一一、雪と高山植物との關係

日本アルプス地方に登山する人々は、必ずや山稜の兩側に於て植物分布の状態に著しき差異あるを發見すべし、即ち信州方面にありては、寒帯性植物の種類に富み越中方面にありては、其の分布頗る單純なる事之れなり、素より概括的の言なれども何人も必ず首肯せらるゝならん、其の然る所以を想像するに全く雪と至大の關係ある者の如し。

信州方面に積雪多きは、登山に經驗ある人々は何人も之れを知れり、而して冬季雪は安全に冬眠せる植物を保護するが故に、積雪多き信州方面（降雪多き越中方面より信州方面の山側に積雪多きには相當の理由あり）は植物の種類に富むなり、斯く言ふときは、讀者必ず云はん前陳せ

る如く高山植物は、寒帯性植物なるが故に、何ぞ冬季の保護を要せんやと、之れ全く空論にして事實は反對なり、如上の理由より冬季高山植物を露地に放棄し置くときは、殆んど枯死せざるもの稀なり、之れ高山植物は寒氣に堪ふる力強きも、其の激變ある温度に對しては必ずしも然らざるなり、特に其の冬芽は僅の暖氣によく發芽す、故に冬季は出來得る限り、温度の激變を避けざるべからず、然らざれば數日の暖氣によつて發芽し、直に又温度の激變に遇ふときは生活作用を妨得せらるゝ事多し。

植物の生活は濕氣と至大の關係を有す、實際植物採集の際乾地は植物の群落單純にして、多濕の處程其の種類に富めるを見るべし、而して積雪多き處は多濕なるが故に此點より見るも、積雪多き地方に高山植物の種類多き敢て怪しむに足らず、夏季登山の際殘雪多き地方には、常に美事なる御花畑の出現を見るべし、而して殘雪附近にありて雪より數間を隔てたるところにては既に結實せるに、二三間の處は盛に開花し、二三尺を隔てたるところは花蕾猶ほ固く、雪の融解するに従つて發芽するを見るべし、此の現象は初めて高山に登りし人々の頗る奇となすところなり、又殘雪の多少年によりて一様ならず、融解の量も夏季の天候によりて異同あり、故に積雪の下にある植物は雪漸く解けて僅に發芽するや否や、直に新雪を以て被はるゝ事あるべし、又或者は年々



發芽すること能はずして、積雪少量なるか融雪多量なる年のみ發芽する事を得るのみの者あり。

### 一一、栽培至難なる高山植物

歐洲に於て多年高山植物の培養に經驗ある人々の著書を見るも、高山植物中の或種は下界に於て活着せざる事を記せり、本邦産高山植物中培養至難なる者は中々多し、即ち

- 1、イハウメ2、ユキワリシホガマ3、クモマグサ4、チヨウノスケサウ5、ツクモグサ6、
- ハクサンイチゲ7、蘭の各種8、オヤマノエンドウ9、櫻草類（オホサクラサウを除く）10、
- ミヤマナヅナ

以上の各種及之れに類似の植物は、活着開花共に困難なり、勿論秋季其の根部を採集し來るときは、翌年は必ず開花せしむると容易なりと雖も、三年目までには多く枯死すべし、幸に枯死せざるも早晚枯死の運命を免かるゝ能はざるなり。

### 一二、高山植物培養上考慮すべき件

高山植物培養上、吾人の經驗は栽培容易なる種類は如何なる者なるか、培養至難なる種類は如何

なる種類なるかを知るとを得たり、故に今日以後は現在至難なりと目せらるゝ種類は如何にせば之れを下界の氣候に馴致するを得るかを研究するにあり、栽培容易なる種類にありては、用土其他の注意に關しては他の盆栽と大差なき取扱ひにて少しも差支なく、用土或は給水法につきて特殊の方法を講ずるに及ばず。

爰に最も吾人の考慮を要する事實は、高山植物が外界適應性によりて其の形態を變ずる事之れなり。

彼の有名なるガストンボンニー氏が、平地に生育する植物二百三種を選び、之れを高さ三千メートルの山地に移植せるに、其中八十種は枯死したれども、殘餘の植物は皆其の狀態を變じ、高山植物の特別なる姿勢となれり、即ち其の根は深く地中に入りて、強烈なる高山頂の疾風に堪へ、莖は著しく短縮し葉も短少となれり、概して地下部は特殊の發達をなし、地上部は短矮となれりと云ふ、之れ植物の外界應化作用に由るものなり。

高山植物の高山にあることは、幾百千年の久しきに及べるなるべし、故に幾百千年の久しき間外界の狀態に應化し、現在の如き一種の特性を生せし者なり、故に葉肉厚くクタクラ層の頗る發達せる葉を有せる石南科の各種の如きも、下界に來りては其の葉大形柔軟となり、特に節間伸長



するを以て、盆栽として遠く自生地の者に及ばざるに至る、例へばコケモ、の如き最好適例なり。

乾燥に堪へんが爲め其の葉短縮小形鱗片状となれるイハヒゲ、ヤムカデ等の如きも、下界にて培養する間に節間伸長冗長となりて風韻に乏しきに至る、ユキワリサウ（櫻草科）ユキワリゴザクラの葉裏の粉状體、コマクサの葉の粉状體の如きも自生地の者に比すれば著しく少量となるは普通吾人の熟知せるところなり。

高山爛砂の間にありて、頗る多肉の葉を有する、ウルツブサウの如きは吸水盛んにして蒸發作用之れに伴はざるによるか、梅雨の節の如きは葉面龜裂するに至れる事往々之れあり。

其の他ウラジロキンバイの如きも、葉裏に於ける純白の毛茸漸く薄く葉身濶大となり葉柄も伸長して動もすれば自生地の者の如き風韻を缺くに至る、之れ等は皆下界に於ける四圍の狀態高山頂と著しく異なるにより下界の風土に適應する必要より如斯なる者なるが故に、高山植物培養者は常に高山植物をして下界に馴致せるを以て満足すること能はず、必ずや其の形態をして自生地の者と同一ならしめざるべからず、然れども如斯は可能なる事實なりや否や、大に考慮を費さざるべからず、而も或る種類にありては決して難事にあらざる事實あり、又尙ほ花の變化之れなり、

自生地に於て鮮麗なる花も培養者にありては、其の色稍褪色せるが如き者多し、如何にして之を防ぐべきか、これ等も大に研究すべき問題なり。



## 日本アルプス

### 一、雪の天國、

雪の荒野、雪の高原、其の彼方に聳立せる雪の連嶺、白雪の冠冕を戴ける巒峰、天地白盡、滿目皚々、光彩燦として眼を眩せんとす、野かゞやき、山かゞやく、嗚呼之れ實に雪の天國。

雪の天國、其の王座はこれ日本アルプスにあらずや。

高原地方に特有なる一片雲翳なき深碧の空に白色閃耀相映發せる崇嶽峻嶺、其の美、其の秀、其の麗、天地間何物の之れに比すべきものぞ。

今爰に日本アルプスの梗概を誌さんとす。

### 二、日本アルプス名稱の由來、

日本アルプスなる名稱は今や廣く人口に膾炙すと雖も、何人が初めて命名せしや不明なり。



白馬山 (白馬尻の小屋)



彼の屢々本邦の山岳地に入らせし、チエムバレイン氏等最初の命名者たりしが如し、然れども日本山岳會名譽會員ウオルター、ウエストン氏の記文、特に其の著書「日本アルプス」によりて最も世人の注意を惹くに至れり。

其の後本邦の高山を云ふ者、常に日本アルプスの名を呼べども、日本アルプスとは果して何處を指せるか、其の内容に至りては頗る茫漠たるものありき。

而して最初の命名者も、日本アルプスとは單に「日本の高山」と云ふが如き形容詞的名稱に使用せし者にて、其の意味たるや内容頗る淺薄貧弱なるものなり。

其の山相、其の地質、其の特色の歐洲アルプスと、相同相似の點を研究したる後命名せし者にはあらざるなり。

歐洲アルプスは地殼褶曲の結果、造山力の作用によりて生ぜし褶曲山脈にて、大部分水成岩よりなれり、然るに一般に日本アルプスと呼ぶる、飛驒山系の如きは斷層山脈にして、主として深成岩、新火山岩等より構成せられ其の山容特質甚だしく相違せり。

### 三、日本アルプスの領域、



日本アルプス命名の當初に於ては、唯單に日本の高山なる意味を有するのみにして、其の地域等も茫漠たりし者なりし事は前述の如し、而して今日吾人が日本アルプスと呼ぶ地域は何れなるか、一般に信飛信越境上に連互せる原田博士の所謂飛驒山脈を日本アルプスと呼べり。

余は日本アルプスなる意味の、唯單に「日本の高山」なる形容詞的名稱なりとせば、飛驒山脈のみを日本アルプスと呼ぶを不當と考へ、明治三十九年起稿拙著「やま」に、日本アルプスとは何ぞやなる題下に於て、飛驒山脈、木曾山系及赤石山脈をも總括して、南、北、日本アルプスと呼ぶべしと記せり、其の後一般に日本アルプス中に木曾、赤石、を加ふるに至れり、而して木曾山系を中部日本アルプスと呼ぶ事あれども、之れを飛驒山脈及赤石山脈に比するに、其の大小厚薄殆んど同日の談にあらず、飛驒山脈赤石山脈と對比して、中部日本アルプスなる名稱を木曾山系に與ふるはあまりに權衡を失せる感あり、依て余は之れを採らず。

#### 四、北日本アルプス、一、

本邦の山岳中に於て其の雄渾偉大比すべきものなきは、信越信飛境上に連互せる飛驒山脈なるべし、日本アルプスと云へば世人直に飛驒山脈を聯想する宜なりと云ふべし。

此の山脈の基礎は片麻岩及古生層より成れるも、地體の構造頗る複雑にして、深造岩たる花崗岩、石英斑岩、或は玢岩等各所に迸發し、特に新火山岩に至りては連嶺各所に凝結堆積して一萬尺に出入する高峰を形成せり、其の尖峰危岩巖々として聳え日本アルプスの威容嚴然たるものあり。

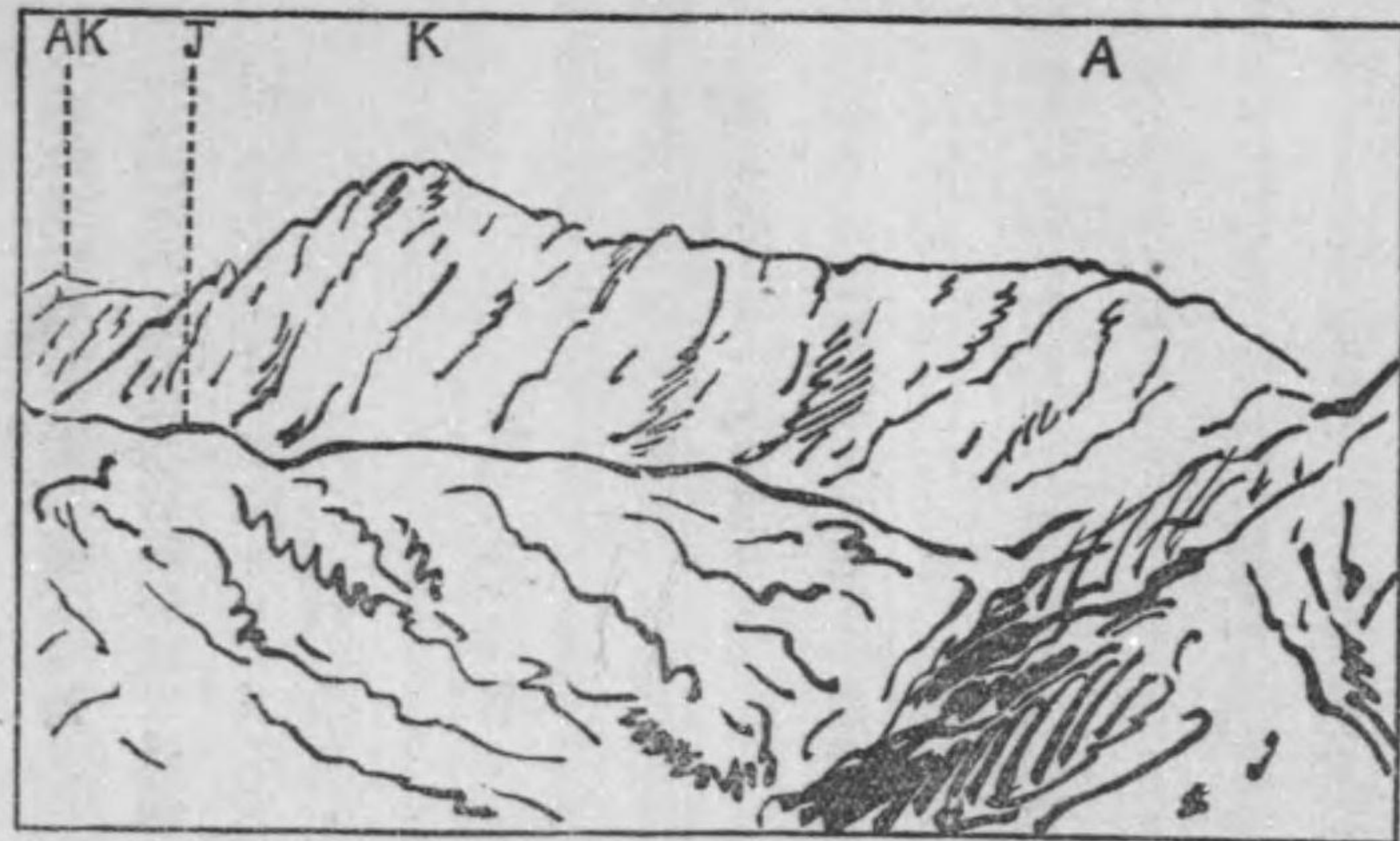
#### 五、北日本アルプス、二、

北日本アルプスの主脈は、美濃に起り信飛信越境上を北走して、其の先端越中越後の境に達し、日本海に没する一大山系たり。

其の初めは美濃に起ると雖も、信飛境上御嶽に達するまでは其の高度著しからず。

一、木曾御嶽(三〇六三米)は北日本アルプス南方の重鎮たり、海拔一萬百八尺の高度を有し、深厚なる喬木帶其の山腰を纏ひ實に森林の美を發揮せり、山頂には幾多の舊火口壁火口湖有り、複雑なる火山構造を有す、夏季御嶽講白衣道者の登山する者陸續として絶えず、其の數萬を以て數ふるに至る、登山路は信州方面にありては、王瀧口、黒澤口の二道あり、登路其の他設備頗る完全なり、飛驒方面にありては濁川温泉よりの一路あるのみ登降者少なし、御嶽の北方野麥峠は





信州より飛驒に通ずる唯一の通路たり、野麥峠より北方は次第に高度を増し

二、乗鞍嶽（三〇三六米）に達す、海拔九千九百八十六尺、御嶽に及ばざること少許、一萬尺に達せざること僅々十四尺、山頂附近の地勢複雑なること御嶽に勝る、されば登路至難、地理不明の爲め、屢凍死者を出せしことあり。信州安曇野の西南、梓川溪谷の奥に銀鞍白馬の奔騰せる如きもの即ち此乗鞍とす、登路は信州方面にありては大野川及野麥峠よりする二道あり、飛驒方面よりは平湯、及平金嶺山より登ることを得べし。乗鞍の北麓に

三、燒嶽（二四四五米）あり、標高七千尺に過ぎずと雖も、近年屢々盛んなる活動をなし、信飛の

各地に熱灰を降らせしを以て、頗る世人の注意を惹くに至れり、附近に信州より飛驒に越ゆる中尾峠あり、沿道梓川の溪谷を上高地と稱す、幽邃なる林地に温泉あり、實に一區の仙境たり、其の西方頭上を壓して聳立する者を

四、穂高岳（三一〇三米）と爲す、海拔九千三百六十二尺、峰頭鋸齒状をなし、其の嶺御嶽乗鞍と雖も及ばざること遠し、北方に連れる連脈遂に槍ヶ岳に達す、此連嶂は神秘の境殆んど人跡を絶ちしが、近年幾多其の縦走に成效せる者あり、上高地温泉より登路あり、穂高の北方にありては

五、槍ヶ岳（三一八〇米）を盟主とすべし、海拔一萬四百九十四尺、高瀬、梓二川の源流に立ち、附近の連嶺より巖然頭角を現はし、轟々たる奇峰天を衝き、一劔天に倚て寒し、脚下に重疊せる千山萬岳を靡ぎて、其の膝下に膜拜せしむ、其の傾度約四十五度、之れ二手類の登攀することを得る極度の傾斜とす、峰頭は石英班岩より成る、上高地温泉より即日其の頂上に達することを得べし。

槍ヶ岳の肩部より、直に蒲田温泉に下る事を得べし、猶ほ山稜に沿ふて北走すれば所謂鎌尾根の峻あり、樺澤岳雙六岳の隆起あり此附近より彼の笠ヶ岳に至る小支脈を出す。



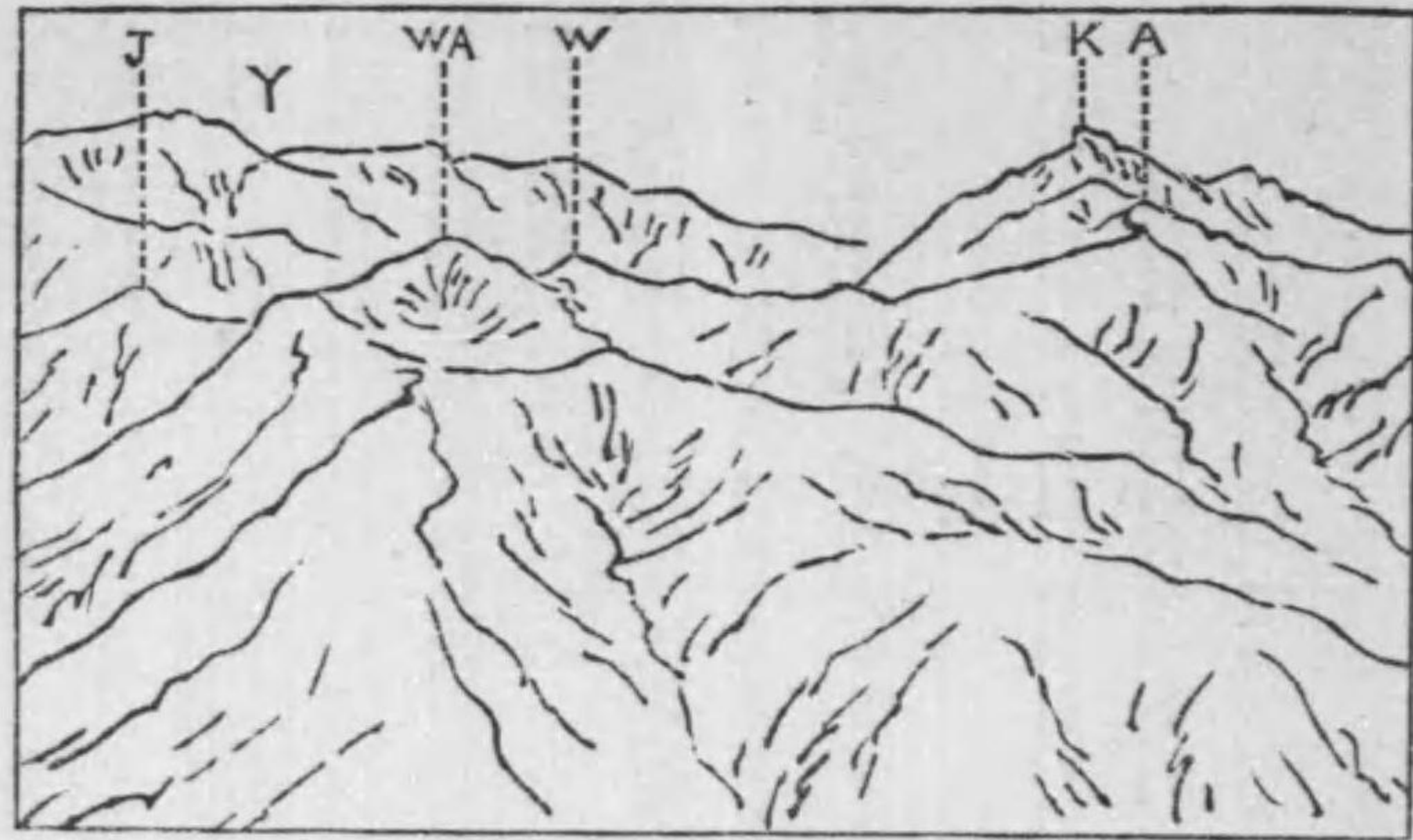
六、笠ヶ岳、(二八九七米)は山頂圓錐形、さながら陣笠の形を爲せり、之れ山名の由來せし所以なり、登路は山麓蒲田温泉より槍ヶ岳道を行くこと約一里、右股左股の合流點の少しく上方にて左折し、右股を渡りて長崎小舎附近を過ぎ、左股に沿ふて登ること十町、左股を渡りアナゲノ谷を登り、之れより幾多の危険を犯し、蒲田より約六時間半にして笠ヶ岳連脈の山稜に達し、猶は一時間にして頂上に達することを得べし、頂上の眺望は東方は槍、穂高等の連脈に遮られたれども、西北方は能登、越中より信越境上の連山悉く双眸の中に落つ、西南飛驒全國の山川を指點すべし。

雙六岳より北走すれば

七、蓮華嶽(二八四一米)あり、槍ヶ岳以北に於ては獨り此附近に適當なる野宿地あるのみ、蓮華岳より又左方に支脈あり即ち

八、西又岳(二五一九米)となり

九、黒部五那岳(二八四〇米)となる、余が始めて日本アルプスの縦走を試み、黒岳附近より此山を望みしとき、附近の諸峰に比して殘雪殊に多く、實に一種壯嚴なる感ありき、當時の印象は未だに忘るゝ能はず、殘雪の多量なるより推すときは、高山植物の繁殖盛んなるべし、次に



槍ヶ岳最高點 WA W 祖山 J Y 父山 WA W 黒部 K A

一〇、赤城岳となり上ノ岳となる

一一、上ノ岳(二六六一米)は、越中飛驒の國境に槍ヶ岳、藥師岳に連なる藥師峠より、頂上に達することを得べし、此地僻遠、登山する者殆んど稀なり、上ノ岳は一名鍋ヶ岳の名あり、上ノ岳より藥師岳に登ることを得べし。

一二、藥師岳(二九二六米)は、越中に於ては立山に次ぐの雄峰にして、上新川郡大山村字有峰より藥師峠を経て登ることを得べし、山勢雄峻なれども高山植物等の種類甚なし、有峰は上瀧より八里、立山温泉よりは真川の谷を溯りて到る事を得べし、飛驒國吉城郡大多和より三里の處にあり、戸數僅に十二、人口百餘、全く山海の一孤島たり。藥師、上ノ岳等に登らんとするものは、一度は此地に至らざる



べからず、薬師岳より北して

一三、越中澤岳（二五九一）

一四、大鷲山

一五、大鷲岳

等火山の噴起せるあり猶ほ北して

一六、立山（二九九八米）の一大火山となる、立山の五峰と稱し、南より順次浄土山、雄山、大汝、別山、劔ヶ岳（二九九八米）等の數峰を爲す、特に其の山上より黒部の谷を隔て、北日本アルプスの連嶺を一時の下に集むる雄大なる眺望に至りては、實に天下の偉觀と稱せらる、山麓芦峯寺（おしとせ）より一日にして頂上を極むることを得べし、立山の山勢西に向ひ、赤兀白兀瀧倉等の諸山となり遂に日本海に没す。

北日本アルプスの主脈、蓮華岳より北するとき

一七、鷲羽岳（二九四四米）あり、余が日本アルプスの縦走は、烏帽子岳より實に此山頂に達せるなり、其の頂上に近く噴火口あるを發見せり、其の北方に標高稍低き一峰あり、之れに小鷲の名を命じたり。鷲羽より北走して赤岳に至りて、左方に

一八、黒岳（二九七八米）の一支を分岐す、黒岳は此附近に於ける一峻峰にして、夏季残雪多く、頂上は二尖頭をなし鞍狀をなせり。黒岳より

一九、赤牛岳（二八六四）に至りて、黒部川の溪谷となる。赤岳より北方日本アルプスの主脈は、黒部川と高瀬川との両深谷の間を北走し、蜿蜒として長蛇の背の如く、數多山名ありと雖も、多くは之れ連脈中の一隆起に命名せる者、

二〇、眞砂岳（約二八〇〇米）

二一、野口五郎岳（二九二四米）

二二、烏帽子ヶ岳（約二八〇〇米）

二三、南澤岳

二四、不動岳

二五、舟窪岳

二六、東澤ノ頭

二七、不動堀澤岳

二八、七倉岳（二四五三米）



## 二九、蓮華岳（二七九九米）

を経て、主脈唯一の横断路たる、針木峠に達することを得べし、以上の山嶺は縦走することを得べしと雖も處々峻崖あり、或は馬背を渡るか如きところあり、利刃の刃上を歩するが如き處あり、幸に天候良好なる時に於ては、縦走を完ふすることを得べしと雖も、風雨の難あらは其の危険實に測られざる者あらん。

針木峠、（約二五〇〇米）は信州大町より越中に通ずる横断路にして信州の村落より越中の村落に達する殆んど廿里の間に唯立山温泉の孤屋あるのみにて山深く谷幽に實に塵寰を脱せる一大自然境たり大町より三日にして立山温泉に達することを得べし

針木峠の北に

三〇、針木岳（二八二一米）あり厩窪の頭と呼ばれる此連脈の高峰鹿島槍ヶ岳に次々の高峰たり附近頗る登降困難を極む針木岳の北方には

三一、小スバリ岳

三二、大スバリ岳

三三、赤澤岳

三四、鳴澤岳

三五、岩小屋澤岳

等を経て

三六、祖父ヶ岳（二六七〇米）に至る祖父ヶ岳は鹿島槍ヶ岳と共に此附近に於て嶮然として頭角を現はし山勢頗る雄峻信州大町より籠川の谷を上り扇澤を溯りて此山に登ることを得べし

祖父ヶ岳より北行すれば

三七、鹿島槍ヶ岳（二八九〇米）に達すべし、此山は此山脈中の最高峰にして、峰頭鞍状をな

し、信州方面より望むとき最も雄大なり、其の山嶺より北方五龍岳に達する間に、八峰ハチタカの難所あり、五龍岳より北方には

三八、大黒岳（約二八〇〇米）

三九、唐松岳（二六九六米）

の二峰あり、之れより白馬の連峰なる鍵ヶ岳に達する間に、不歸谷の難所あり。白馬連峰の南端を

四〇、鍵ヶ岳（二九〇三米）となす、白馬連峰中最南方にあり、高山植物の珍種に富む、白馬山



より杓子岳の裏面を経て、直に其の山頂に達することを得べし、又山麓細野より南股の溪流を溯り、温泉の湧出地を過ぎ、其の左肩に登り、山頂に達することを得、鉢ヶ岳の北に接して

四一、杓子岳（約二八五〇米）あり、杓子岳の北方大雪溪を隔て、

四二、白馬山（二九三三米）の雄峰あり、一名大蓮華と稱す、日本アルプス中高山植物の種類に富めること、此山の右に出ずる者なし、山麓細野より北股の溪流に沿ふて登ることを得べし、越後糸魚川、越中黒部川の溪谷より、其の裏山に登ることを得。

白馬山より北方、

四三、蓮華乗鞍

四四、鉢ヶ岳

四五、雪倉ヶ岳

四六、赤男岳

等の諸峰となり遂に日本海に没す。

信濃川の源流、梓の水は南流して上高地の南に至り東方に迂回し、又北流してU字形を爲す、常念山脈は此間に越り、花崗岩より成れる

四七、霞澤岳（二六四六米）より北方に進み、徳本峠トクモトノトとなり、蝶ヶ岳に連なる、

四八、蝶ヶ岳（二九六四米）は安曇野の西方に聳ゆる一高峰にして、晩春の候其の左肩の残雪蝴蝶の形を成すによりて其の名あり、其の北方に

四九、常念岳、（三一二四米）あり、附近の連山より著しく隆起し、山勢頗る雄大なり、常念の北方より山脈蜿蜒北走すれども、特に山嶺の特立する者なく

五〇、大天井山（二九二二米）

五一、屏風岳（約二六〇〇米）

五二、燕岳（二七六三米）

等は一部の隆起に向つて名づけたる者、全山花崗岩より成れるを以て、風光の鮮麗なる北日本アルプス中他に比すべきなし、屏風岳の東方中房の深谷を隔て、有明山（二二六八米）あり、之れ又花崗岩より成り、稍富士形を爲すを以て信濃富士の名あり。燕岳の北方に

五三、東澤岳（二六八三米）

五四、餓鬼岳（二六二七米）

五五、唐澤岳（二六三二米）あり、遂に高瀬の溪谷に終る。



## 六、北日本アルプスの特色、

## 一、萬年の雪

萬年の雪と高嶺の花とは、實に高山の標微なり。若し彼の高山より、皚々たる萬年の雪を融解し去らば其の景象は頗る平凡化すべし、千紫万紅絢爛たる御花畑の百花凋萎せば、其の眺望は頗る殺風景たるを免れざるべし、高山頂上に於ける日出の光景も亦雲海の偉觀も、脚下に萬年の雪なく、眼前に百花の開くなくんば、其の壯麗其の偉觀大半その價值を失すべし。萬年の雪とは果して如何なる者ぞ、所謂フィレンと呼ぶものにして、冬季下界に於ける者とは頗る趣を異にす、高山に於ける降雪は、鷲毛の舞ふが如き下界の雪と異り、頗る細微粉狀針狀の結晶にして六出の結晶を爲さず、此の粉狀の雪片風の爲めに翻弄せられて深く豁谷を埋め、夏季に至るも容易に融消せず、其の表面次第に融けて水湿内部に滲透し、凍結して粒狀の組織を有する堅氷となる、之れ即ちフィレン（萬年の雪）なり、日本アルプス地方に於ける冬季の卓越風は西北なるが故に、積雪は却て風下なる東南面に多し、故に萬年の雪も山脈の東南面たる信州方面に多量に之れを見る、越中方面より見たる北日本アルプスと、信州方面より見たる同山脈とは、殆んど同一の山脈

とは思はれぬ程壯美の觀を異にせり。

## 二、高嶺の花

高嶺の花は所謂寒帯性植物にして、個々に之れを觀察すれば、其の花色、形容、鮮麗優雅なる者多く、爛美塗るが如く艶麗燃ゆるが如き者なしと雖も日本の風韻に富み、最日本人の風尚に適せり、特に高山崇靈の地に産する者は、寒暑の激變と風雨霜雪の迫害とによりて、僅々數寸の高さにして既に數十年の星霜を経自然に幽趣あり、全體の形容風致は到底彼の人工的盆栽の比にあらず。

又高山植物美の眞價は、實に其の群衆美にあり、故に所謂御花畑の美に接せずんば、高山植物を語るべからず、一般に高山植物の生育は、夏季融雪後新雪を見るまで、僅々數旬に過ぎざるを以て、短時日の間に百花同時に開花す、發芽するや否や直に花蕾を抽出し開花し、花謝して始めて莖葉の繁茂を見る、故に開花の際は地上岩面一時に花を以て蔽はる、而して數里數十里に連亘せる日本アルプスの山稜は、一時に御花畑の美觀を呈す、余は高山に登る毎に、殘雪の壯觀と此御花畑の美觀とは、何人も一度之れを見るべき者なりと思はざることなし、萬年の雪はサブライム



にして、高嶺の花はビューチフルの極なり、而して高山植物の豊富は北日本アルプスの右に出づるなし。

### 三、山容の千態万状

北日本アルプスの基盤は、素より造山力の作用によれる褶曲より生せる者なるべしと雖も、松本平の方面に向つて一大断層をなし大陥落を爲せり、且つ各所火山の噴起によりて新火山岩の堆積多く、到處岩石の種類を異にし、水濕流水空気等の浸蝕に抵抗するの硬度異なるにより、山容従つて千態万状形容すべからず、或は劔戟を磨るか如き、槍ヶ岳、劔岳（立山）となり、或は圓錐富士型を爲せる御嶽、笠ヶ岳となり、白馬銀鞍を載せたる乗鞍は既に云へり、大天井、燕岳、野口五郎、有明山の如き花崗岩の山塊は、鮮麗眼醒むるばかり、玢岩よりなれる白馬は紅蓮の空際に開くに似て大蓮華の名あり、北日本アルプスに於ける岩石の多種多様なは、其の風景に特異の變化を生じ、北日本アルプス地方の旅行に一層の興味を加ふ。

### 四、裾野の發達

彼の火山の噴出せる熱灰、砂礫、或は泥流は、其の山麓に廣濶なる坦地を作る裾野之れなり、裾野の發達は必ず火山ならざるべからず、裾野の花に座して鹿の子斑の殘雪ある峰頭を仰ぎ、八千草匂ふ裾野の秋の逍遙、吾人をして詩中の人たらしめ、畫中の材たらしむ、落葉松二三三四疎立し、杜鵑一聲原頭に落つるのとき、神韻漂渺たり。

而して北日本アルプス各地、廣漠たる裾野の發達を見る、特に雲の平、彌陀ヶ原（立山）の高原に至りては、其の最奇抜なる者あり、彼の水成岩よりなれる褶曲山脈たる歐洲アルプスの如きは、全體平野に聳立せるが如き有様にて、平濶緩斜せる裾野を有せず、唯處々山中にテーブルランドと稱する臺地あるのみにて、特殊の風光ある裾野を有することなし。

### 七、南日本アルプス、

#### 附 木曾山系

彼の紀伊山脈の餘勢一度伊勢灣内に没すと雖も、再び三河國渥美半島に現はれ、東北東より北東の走路を取り、天龍川の峽谷に達するや、山勢高峻、峻遠甲峻の國境に沿ひ、釜無、天龍二川の間に連互し諏訪湖岸に没す、之れ赤石の連嶺にして南日本アルプスの主脈たり、天龍釜無の間漸



く北に盛まるを以て、地形上より赤石スフエノイドと名づく。

此主脈の東方に之れと並行せる一帯あり、即ち白峰山脈にして、高度却て主脈に勝れり、其の最高峰北嶽は三一九二米富士に次ぐの高山たり。

赤石及白峰は共に古生層、片麻岩及結晶剝岩より成れる褶曲山脈にして、北日本アルプスの如く火山岩より成れるにあらず。

北日本アルプス中にありて三千米以上の高峰は槍、穂高、乗鞍、御嶽等の數座に過ぎずと雖も、南日本アルプスにありては、北岳、間ノ岳、農鳥山（以上白峰）仙丈岳、荒川岳、赤石主峰（西河内）（以上赤石）等皆三千米以上の高度を有す。

以上赤石、白峰両山脈の外、南日本アルプス中に加ふべき者に甲斐駒ヶ岳の連嶺あり、駒ヶ岳、（白崩）鳳凰山、地藏岳、薬師岳等の諸峰を含む、此山塊は古生層を貫きて噴出せる雲閃花崗岩より成れり。

赤石山脈は、西は天龍川の水源より、其中流なる中部村屈曲點に至るまでの一線と、豊川溪谷とより成る分界線より、東は富士川、釜無川及び宮川を連ぬる一線間に、重疊攢列せる山嶽の總稱にして、其の山脈は略ぼ東北々より西南々に走り、甲信駿遠の諸州に連互せり、とは大日本地

誌の説明せるところなり、赤石山脈北端の雄峰は

五六、仙丈岳（三〇三三米）なり一名前岳（信州）と稱す頂上に美事なるサアカスあり仙丈岳より南するに従つて其の高度を減し

五七、荒倉岳（二五一七米）

五八、横川岳（二三一五米）

五九、安部荒倉（二六九三米）

六〇、伊那荒倉（二六九九米）

等、數座の高峰を起し、遂に

六一、荒川岳（三〇四七米）となる、一名汐見岳、間ノ岳の名あり、猶南走して

六二、小河内岳（二八〇二米）を起し

六三、西河内岳、となる西河内岳より東北に派出せる脈上には、魚無河内岳（三〇八三米）悪澤岳、千枚澤岳、等あり、西河内岳より南走するものは遂に主峰

六四、赤石山（三一二〇米）となる、標高實に一萬二百九十六尺を有すれども、官道より仰望せられざるにより人其の名を知らず、信州飯田より頂上まで約十五里と稱す、全山嶂巒景勝其の奇



を恣にす、登路は大鹿村釜の澤よりす、殆んど人跡を絶つ、高山植物は其の種類に乏し、赤石主  
峯より南走せる者は

六五、聖岳（二九七六米）

六六、上河内岳（二八〇三米）

六七、光岳（二五九一米）

を起す、光岳以南に於ては三派に分れ、漸次低山性の山脈に移行す。

白峯山脈は、赤石山岳の東方田代川の縦谷を隔て、北より南に走り、甲駿の國境を爲す、北  
方の高峯を

六八、北嶽（三一九二米）と爲す、秩父古生層より成る水成岩の峻峯にして、山側急斜し、磊々  
たる大塊を爲す、北日本アルプスの火成岩とは、全く其の基盤を異にせるを以て、日本山脈の研  
究に志ある者、必ず此水成岩の高峯に着目せざるべからず、北嶽より南して

六九、間ノ岳（三一八九米）あり、南走するに従つて高度を減すと雖も

七〇、農鳥山（三〇二六米）に至るも猶ほ三千米の高度あり、以上の三峻峰を白峯三山と呼ぶ、

農鳥山の南にありては

高野麗彦氏撮影



（上）頂の山石赤）ヌアルノ本口南



を恣にす、登路は大鹿村釜の澤よりす、殆んど人跡を絶つ、高山植物は其の種類に乏し、赤石主  
峯より南走せる者は

六五、聖岳（二九七六米）

六六、上河内岳（二八〇三米）

六七、光岳（二五九一米）

を起す、光岳以南に於ては三派に分れ、漸次低山性の山脈に移行す。

白峯山脈は、赤石山岳の東方田代川の縦谷を隔て、北より南に走り、甲駿の國境を爲す、北  
方の高峯を

六八、北嶽（三一九二米）と爲す、秩父古生層より成る水成岩の峻峯にして、山側急斜し、磊々  
たる大塊を爲す、北日本アルプスの火成岩とは、全く其の基盤を異にせるを以て、日本山脈の研  
究に志ある者、必ず此水成岩の高峯に着目せざるべからず、北嶽より南して

六九、間ノ岳（三一八九米）あり、南走するに従つて高度を減すと雖も

七〇、農鳥山（三〇二六米）に至るも猶ほ三千米の高度あり、以上の三峻峰を白峯三山と呼ぶ、

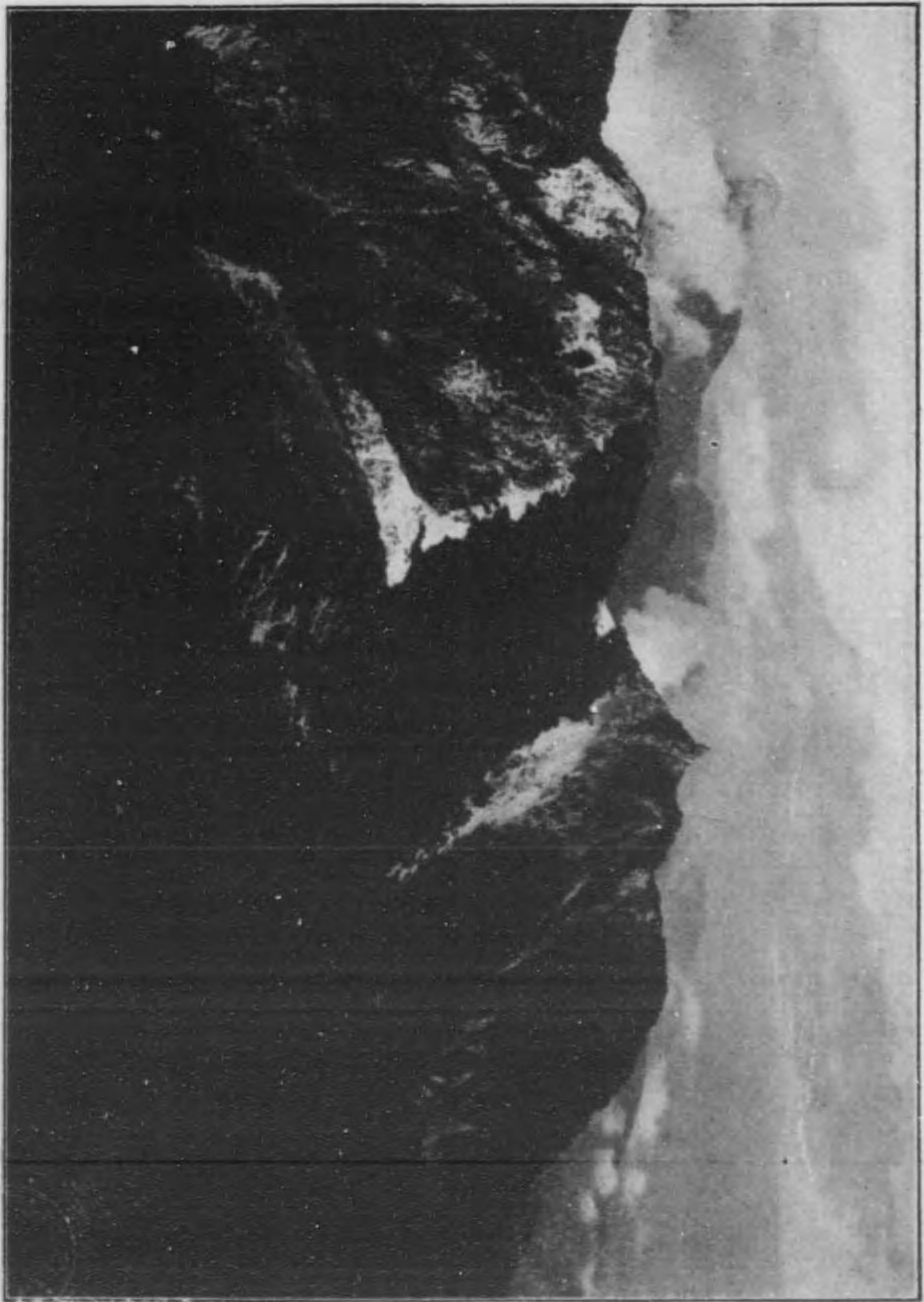
農鳥山の南にありては



高野原農鳥山撮影

（上）東の山行赤ノアルメ本口南





高頭式地攝影

山風嵐名の望りよ居藏地





七一、白河内岳

七二、廣河内岳（二七一八米）

七三、笹山（白剱山黒河内岳）（二二三七米）

等の諸山となり漸次低下せり

以上の外、南日本アルプスに加ふべき者に、甲斐駒ヶ岳の連嶺あり、甲州臺ヶ原の附近釜無川の沿岸より轟々摩天の高峰たり、之れ

七四、駒ヶ岳（二九六六米）にして全山花崗岩、南日本アルプス中赤石、白峯と山體の構成異なるが故に山容亦特色あり、花崗岩の風化壞崩せるより白崩山の別名あり、山嶺南して

七五、朝興岳（朝日岳二七九九米）となり一旦東に轉じて

七六、鳳凰山（二七七〇米）

七七、地藏岳（二八四一米）となる、鳳凰山頂の二尖柱を爲せる巨岩は、地藏佛と呼ばれるもの頗る奇觀を呈す。連嶺猶ほ東南走して

七八、觀音岳（二七七〇米）

七九、藥師岳



となる、之れより次第に低下して野呂川の溪谷に終る。

天龍、木曾二川の間を南北に走れる木曾山系は、北日本アルプス及南日本アルプスの中間にあるを以て、中部日本アルプスと呼ぶも可なりと雖も、飛騨山脈及赤石白峰等に比して、之れと對等の名稱を附するは、餘りに其の權衡を失するが故に、之れに倣はざるは前述せり、木曾山系は、美濃、三河、信濃の境上に於て漸く其の高度を増し、北走するに従つて二千米内外の高距を有し、駒ヶ岳に至りて二千九百五十六米に達し、本曾山系中の最高點たり。駒ヶ岳主峰の南には寶劔ヶ岳あり、奇岩轟々劍戟の如く、頗る偉觀を呈す、主脈の東方少許の所に農ヶ池あり、水色藍靛の如く花崗岩の白沙に映す。

山體悉く花崗岩なるを以て、峯巒嶙峋、景象の跌宕雄麗比ひ少なし、東麓伊那の平原には天龍の水透迤々々たり、西麓蒼鬱たる木曾大森林の間には、木曾川の急湍閃々銀蛇の走るが如し、北日本アルプス及南日本アルプスを前後に眺め、富士、淺間、立科、八ヶ岳を雲烟漂渺の際に望むことを得べし。

山勢北するに従つて次第に低く、遂に松本平に盡く。

## 八、南日本アルプスの特色

一、最高の水成岩。南日本アルプスは褶曲山脈にして、主として秩父古生層より成る、従つて北日本アルプスの如く多數多様な岩石を有せず、故に千態万狀の山容を有せずと雖も、木邦最高の水成岩として雄峻跌宕を極む。

二、草本帯の狭少。富士に次ぐの高山を有するも、北日本アルプスに比すれば緯度南方にあるを以て、北日本アルプスの如く高山植物帯の發達少なく、一帯に山頂に至るまで、樹木鬱蒼、彼の千紫万紅、鮮麗無比なる草本帯の美を見ること能はず、然れども北日本アルプスに於て珍種と稱せらるゝ、長之助草、裏白金梅の如き、里余に亘りて繁茂せる所あり、高山植物研究者の一度は足跡を印すべき高山たり。

三、眞の深山幽溪、地皮の褶曲によりて、南日本アルプス一萬尺の秀峰を生せり、壞崩し易き此水成岩は流水の浸蝕作用によりてこゝに深谷を生せり、故に南日本アルプスの地方は、到處山秀で谷深く、眞の深山幽溪をなし、北日本アルプスの如く廣潤なる裾野を有することなく、且つ赤石、白峰等皆前山を有するを以て、山麓平原地より其の山體を遠望すること能はず。



### 九、日本アルプスなる名稱に就きて

日本アルプスなる名稱の由來は前に述べたるが如し、其の意義頗る淺薄、特に日本アルプスなる名を聞くときは何人も必ず歐洲アルプスを聯想せざる者なからん、而して直覺的に歐洲大陸のアルプスに對して其の下風に立つ者なりとの感を懐かざるものなからん、然るに日本アルプスの連嶺は、歐洲アルプスと成因を異にし特色を異にし所産動物を異にし彼と我とは全く比較對照すべき者にあらず歐洲人が日本の山岳に對して日本アルプスなる名稱を用ふるは、歐洲アルプスを有する彼等としては頗る得意なるべしと雖も、本邦人が無意義に之れに倣ふは一考すべき事ならずや、日本の山岳を日本アルプスと呼ぶは日本海の英雄東郷大將を呼ぶに東洋のネルソンと云ふが如く感せられ痛く吾人が自尊の念を傷付くるが如く思はる、若し適當の名稱あらば何人も日本固有の文字を使用して之れを呼ばんことを希望せざる者なからん、然るに吾人は未だ日本最高最大の山岳を表出すべき雄大なる名稱を發見せず、日本アルプスなる名稱を用ふるの止むを得ざるは頗る遺憾とするところならずや、早晚適當なる名稱を發見して日本アルプスなる名稱に代へんことを希望して止まざるなり、日本アルプスなる名稱の下に飛驒山脈、木曾山系赤石山系を包括

すべしと述べたれども、將來世人は一般に飛驒山脈を呼ぶに日本アルプスなる名稱を用ひ飛驒山脈と云へば必ず日本アルプスを聯想するに至らん



## 日本高山登路案内略記

## 一、富士山

古往今來我等の胸中に一種崇高秀麗の氣象を移植せる者は富士の高根にあらさや、其の形容秀麗、本州第一の高峯しかも登路の設備亦他に勝り婦人少女と雖も其の頂を究むことを得べし、此山に登るに五道あり一、大宮口、二、東表口、(御殿場口)三、東口、(須走口)四、須山口、五、北口、(吉田口)之れなり。

第一、大宮口、一名表口と稱す東海道富士或は鈴川停車場より、駿河國富士郡大宮まで三里此間鐵道馬車あり、大宮より萬野山宮、カケスバタ、長坂等を経て富士の第一合目に至る、途中の名所には鈴川驛附近に田子ノ浦、天ノ香山あり、厚原より數町鷹岡村久澤に福泉寺あり、此地に曾我兄弟の墓及虎御前の草庵を結びし跡あり、入山瀬に富士製紙會社あり、大宮に淺間神社あり、大宮町カケスバタには富士登山株式會社あり登山者の爲めに諸般の便宜を計り、山中石室に於ける茶券、食券、宿泊券等を發賣せり、一合目は海拔既に二千百米にして石室あり、一合目より三合目に至るの間喬木帯にして森林鬱蒼たり、三合目以上毛無と稱し熔岩磊々たり、始めて山

嶺を仰ぐべし、七合目に至りて草木帶盡き、八合目以上登路頗る峻なり、頂上淺間神社奥宮の前に出づ、此路は海邊に近き鈴川より登るを以て道程遠しと雖も植物採集等を企つる者は必ず此登路によらざるべからず。

第二、東表口、(御殿場口)新道、中畑道等の名あり、東海道御殿場停車場より瀧川村を経て馬返シまで三里餘人力車を通ず、之れより太郎坊を経て一合目に達す、五合目に至れば箱根足柄等の諸山を脚下に俯瞰し左に寶永風を浴びつゝ登る、六合目より左折するときは寶永の爆裂火口を覗ふことを得べし、七合目の石室は朝日を觀るに最良と稱せらる、八合目よりは所謂胸突八丁の險なり、銀明水の附近を経て絶頂十合目の石室に至る、普通御殿場を發して即日頂上に達すれども、足弱き人は六合或は八合の石室に宿泊するを可とす。

第三、東口、須走口之れなり御殿場停車場より鐵道馬車にて須走に至る此間二里八丁あり、須走は海拔七百八十米突、町の突き當りに淺間神社あり、又二里にして馬返シに至る、之れより一里八丁其の間森林にて一合目となる、四合五勺より六合目に至るまで急峻なり、六合目以上熔岩の磊々たる間を進む、八合目に於て吉田口と合す、故に大行合と呼ばる、絶頂久須志神社に達す、八合の石室最廣し、此路は下山極めて容易且つ興味あるを以て、東表口より登り、此口に下



山する者多し、而して須走より鐵道馬車に乗じ籠坂峠を踰え右折すれば山中湖あり風致幽邃愛すべし。

第四、須山口、東海道佐野停車場より三里にして須山に達す、此間人力車の便あり、之れより二里餘の裾野を経て馬返シとなる、此間岐路多し、馬返シより一里にして一合目、二合目より爛砂の間を進む、四合目に於て東表口の登路に合す、御殿場口の開けざりし以前は頗る賑ひたれども一時廢絶に歸す、客年來大に改修を加へたり、佐野停車場附近に佐野原神社あり左近衛中將藤原爲冬を祀る、又富岡村桃園定輪寺には宗祇法師の墓あり、同村千福に佐野瀧あり、須山に淺間神社あり、登路は登降の客少なしと雖も富士と愛鷹の間を通じ兩者を南北に仰ぐべく、鬱蒼たる森林多く最も俗臭なし、自然の大觀を縱まゝにせんと欲する者はよろしく此登路によるべし。

第五、北口、一名吉田口と稱し富士の裏山口なり、中央東線大月停車場より鐵道馬車にて谷村を過ぎ吉田に至る此間約六里若し御殿場より鐵道馬車にて須走を過ぎ籠坂峠を越えて來るときは七里九丁あり、吉田にては舊神官の家多く皆客を宿泊せしむ、之れより山嶺まで七里と稱す、吉田より馬返シまで三里の間は裾野なり、裾野盡きて太郎坊となる、一合目より四合目迄草木あり、四合目以上爛砂焦石、五合目に於て濯木帯に入る、五六合目より信飛境より高山を望むべし。

し、八合目に於て須走口に合す、富士の登路中吉田口のみ甲斐に屬し他は盡く東海道方面駿河の地域たり、故に南よりする大宮口を表口とし北より登る吉田口を裏道と呼ぶ、彼の桂川の谷を下り猿橋驛に達せる熔岩流等を研究せんとせば此吉田口によらざるべからず。

沿道名所として猿橋驛附近に於て車窓より桂川に架せる猿橋の奇工を觀るべし、吉田附近富士嶽神社あり木華咲耶姫命を祀る、吉田より馬返シに至る間を鈴ヶ原と云ふ附近胎内窟あり、又吉田より一里御坂嶺の麓に河口湖、湖岸小光村に妙法寺、淺間神社あり、共に一遊の價値あり。

以上擧げたる五道の各五合目を通じて山腹を一週する御中道なり道程約十三里あり、即ち表口五合目より大澤迄三里、大澤より北口五合目まで五里、北口五合目より須走五合目まで二里、須走五合目より中畑口六合目まで二里、之より表口五合目まで一里とす、其の間岩石砂山等を通じて難易交々至り頗る興趣あり。

各登山路の里程は頂上まで須走より五里、御殿場より八里、大宮より八里、須山より七里、吉田より約七里あり。

登山者は必ず案内者（強力）を備ふべし、携帶品の多少により數名にて一人を備ふも可なり、賃錢は各登路によりて一様ならずと雖も一往復一圓五十錢内外を普通とす。



石室の宿料は

一泊、 五十錢、 太郎坊以上一合毎に一錢を増す、  
 半泊、 三十五錢、  
 晝食、 十五錢、

食料品其他の雜品は山麓時價の約二倍

富士に登るの道多しと雖、其最も植物に富みて明に分布の系區を表示するものは恐くは大宮口に若くものなる可し、而して之に次ぐを須走口とす、今先づ甲者を叙述し、次に乙者を説かんとす。

### 富士植物分布 (富士山植物目録抄録)

#### 大宮口に於ける植物分布の状態

##### (一) 山麓帯 海拔百三十米突なる大宮を基點とし 千二百米突なる八幡堂に至る

大宮町なる淺間神社の邊に於きては、榊、山茶、マサキ、クルミ、クサギ、トリモチ等の樹木あり、井ノモトサウ、クサノワウ、ハイドクサウ、チャヒキダサ、ヤブソテツの如き草木あり、

また池中にはキンギヨモ、ウメバチモの類あり、それより大宮新田を通過して、賽の河原に至る間に樹草多しと雖も、ヨメナ、アザミ、ノグシ、ヤハヅクサ、メドハギ、ハコベ、ミ、ナグサ等の草本、クヌギ、クリ、コナラ、イボタ、カヤ、イヌガヤ、カキ、ウツギ等の樹木にして別に記す可きものなし、それより凡三百米突なる粟倉に至る間にも樹草少からずと雖、皆前者と相似たるものにして、キツネノカミソリ、オキナグサ、ホタルブクロ、モミヂハグマ等をも見る。それより五百米突の村山に向へば、タマアデササ、イハタバコ、ハコネシダ、クシヤクシダ等と交へ、其村山なる淺間神社の境内に入れば、柯樹、サカキ、ヤブニクケイ、枹等の常緑闊葉樹とゴンズイ、カヘデ、コクサキ、エノキ、ホ、ノキ、ゴマギ等の落葉闊葉樹の存するを見、又地上にはトモエサウ、フシグロセンノウ、エゾスミレ等あり。村山より小屋坂を経て略七百米突なる札打に向へば途中所見頗多しと雖、今其數者を摘示すれば、シデシヤジン、クサフヂ、シホガマギク、コメダグサ(玄參科)、キツリフネ、クサレダマ、ウラジロイチゴ等の草本を見、又ナツグミ、シモツケ、クロモジ、タニウツギ、等を見る。札打に達すれば榊の大樹ありて、ヨロイゴケ、カブトゴケ、サルノヲガセ等の地衣の附着するあり、地上又ツノゴケ、バライチゴ、等を見る。札打より凡ソ一千米突なる天照敷に向ひて進めば、サンシウバラ、ミヤママタタビ、タカネ



イバラ、ヤマラダマキ、白花ヘビイチゴ等多く現はる。己に天照教に達すれば、四望廣潤、前面には近く山頂を仰ぎ、先づ一ト休みして道すがら採集せる品類を整理するの閑を偷むの値あり。この邊カウリンクワ、オタカラカウ、ミヤマスマメノヒエ等あり。又天照教より細紺野、龜芝等ヲ通過して八幡堂下に向へば、アブラツ、ジ、ヤマウグユスカグラ、現はれ、ヤマシヤクヤク、ヤマノコギリソウ、ウスユキムグラ等出づ。而して又ミヅナラ多し、次第に八幡堂下に近ければ、樹上并に地上に地衣蘚苔多く、草本類に至りても亦里間附近にて見得べからざるものを多く交ふるに至れり、即ち禾本科にてはイハタケサウ、イブキヌカボ、ホガヘリカヤの如きものあり、菊科にてはタテヤマギク、ミヤマカウモリサウの如きものあり、其他レイジンサウ、クマガヘサウ、シロバナノイナモリサウ、タケシマラン等あり、又樹木にはミヤマガマズミ、ヤマバウシ、ナツツバキ、トキハカヘデ、等あり、カブトゴケ、カラタチゴケ、及び *Parmeria*; *Sticta*; *Alecto-* *ma* 等の地衣に富み、蘚類亦多く著しく喬木陰草帯に接近するの徴を示せり。之を要するに、大宮より粟倉、村山、札打、天照教、細紺野等を経て八幡堂下に至るの間は、所謂富士の裾野にして、所生の植物も概ね里間附近のものに類すと雖、天照教を経て細紺野に至り更に八幡堂下に近ければ、草木は自ら深山的のものを交ふるに至れり。

## (二) 喬木陰草帯。

八幡堂より一合目に至るまでの區にして、八幡堂邊にては、イヌタラ、クマシデ、チドリノキ、ヤマモミヂ、オニモミヂ、ゴマギ、ブナ、ツノハシバミ、カツラ、ヤマデマリ、等の樹木あり、又ツクバネサウ、マヒヅルソウ、バイケイサウ、クハガタサウ、コフウロ、シロカネサウ、ハクサンヲミナヘシ、ミヤマノキシノブ、キツリフネ、等あり、又シラタチヅル等、樹上に懸り、地衣亦頗る多し、今其一二を擧ぐれば、*Stereocaulon nubilipinum*; *Patellaria tuberculosa*; *Lecanora pallescens*; *Pertusaria subvaginata*; 等にして又蘚類少からず。而して八幡堂の社前登山者の屢々休息するところには、尙ニハホコリ、ニラミグサ、イヌガラシ、ドシヤウツナギ、ヌカホ、タビラコ等生育し、又ヤブエンゴサク、ミヤマキケキン等あり。八幡堂より次第に上れば、フウリンウメモドキ、サラサドウダン、ハウチハカヘテ、コミネカヘデあり、イラモミ始めて自生し、ヒメトラノヲゴケ等の蘚、*Cladonia* の如き地衣多く、コイチヤウラン、イハセントウサウ、ハンシヤウツル等あり。又一千三四百米突に達すれば大久保シダありて両側の樅樹に蘚類と混生す、これより以上、樅、イラモミ、タウヒ、バラモミ等あり、又ナンタイシダ、シラネワラビ等追々現はれ、又バンダイノキノリ、及び *Lecanora caesiorbella* 等ノ地衣あり、それ



より一千五百米突に向ひて進めば、ヤマウツボあり、ツリバナ、マヒヅルサウ、ヅタヤクシユ、サラサドウダン等あり、ミヤマカウモリサウ多く、大久保シダ亦屢々現はる。面して各種の蘚苔及ビ *Cladonia gracilis*、及 *Crangiformis* 等の地衣多く地上岩石に附着す。それより一千六七百米突なる大縦に向ひて進めば、アカシヤウマ、多く、コタヌキラン、クルマバツクバネサウ、マルバイチヤクサウ、キソチドリ、クルマユリ、カニカウモリ等の諸種又現はれ、縦、シラビソ、等次第に多く、カラマツ、ツガ等を交へ鬱々密林を爲して白晝尙暗く、樹下、又陰草多く、*Humm*、及び *Polytricum*、等の蘚多く、實に好採收地たり。

大縦より一千八百米突に向ひて進めば、シラビソ最多く、カラマツ、トウヒ等の針葉樹林をなし、樹下、ハンクワイアザミ、オシダ、キンチドリ、カラマツサウ、グンナイフウロ、コシモツケ、ソバナ、イヌタウキ、ハナヅル等あり。それより樹相漸く疎となり、大に灌木及び草本の之に代はらんとするものあり。

二千米突に近づけば山勢頓に急峻を加へ、岩シモツケ、コヤウラクツ、ジ、ミヤマハンノキ等の灌木にイタドリ、ヤマブキシヤウマ、エゾスマラン等を加へ、比較的植物の疎なるは想ふに雪崩れの爲めに起因する地相の然らしむるところならむか。

それより一合目に至れば山勢愈々急となり、確かに喬木帯を經過し終れるの感あり。

之を要するに、八幡堂より二千米突なる一合目の直下に達する間は、富嶽、大宮口の喬木陰草帯に屬し、其前半はブナ、トキハカヘデ、クマシデ等の潤葉樹帯をなし、後半はカラマツ、シラビソ、モヨ等の諸種トウヒ、ツガの類なる針葉樹帯を示せり。

### (三) 灌木帯

一合目邊より  
四合目邊に至る

一合目直下より己に其相を呈して、ヤハズハンノキ、コケモ、イハシモツケ、スノキ、タカネイバラ、ミヤマナ、カマド等の灌木あり、又ミヤマカラマツ、ネバリノギラン、イハワウキ、ムラサキモメンヅル、ミヤマヲトコヨモギ、フジハタザホ、シラネニンジン、ハナイカリ等の草本あり、一合目には木を構へて室を造り以て登山者を宿せしむ。四合、六合、八合等或は其他の處にても宿に投し得へしと雖、他は皆石室にして内容も狭く且つ暴風雨に逢ふときは危険なれば成る可く此室に宿して天氣を下するを可とす。室の前にはカラマツ、ツガ、シラビソ、トウヒ等再び勢を逞くして頗る勇壯に且暴風雨の襲來を防ぐの用あり。一合目より上れば二千四百米突なる、三四合目に至るの間は悉くヤハズハンノキ、イハシモツケ、ミヤマハンノキ、ハナヒリノキ、ミヤマナ、カマド、コケモ、タケカンバ、シラカンバ、イハヤナギ等ノ灌木に、キンレ



イクラ、マヒヅルサウ、クルマバツクハネサウ、マルバイチヤクサウ、アヲヤギサウ、グンナイ  
フウロ、クルマユリ、ミヤマハンシヤウヅル、オンタデ、ミヤマヲトコヨモギ、イハニンジン、  
コタヌキラン、フジハタザホ、イハワウギ等ヲ交へ、其間、バンダイノキノリ、ハナゴケ、カン  
トゴケ等ノ地衣又頗ル多し、且ツカラマツ、ツガ、ウタヒ、シラビソ等ノ針葉樹を混するも皆頗  
る矮小なり。之を要するに、富嶽大宮口に於ける灌木帯は正しく其跡を相するに足れり。

#### (四) 草本帯

四合目邊より六合目を出るまでは此帯に屬す、その間、初めは矮生のカラマツ、タウヒ、ミヤ  
マナ、カマド、イハヤナギ、コケモ、等ありと雖、直に其跡を絶ち、普通に生ずる植物は、キヲ  
ン、イハワウギ、ミヤマハンシヤウヅル、ムラサキモメンヅル、白花ヘビイチゴ、イハツメク  
サ、コタヌキラン、ミヤマヲトコヨモギ、オンタデ等にして、コイハカマミ、チドリサウ、ヘ  
ビノシタ、イハヒダ、オニク等亦多し。オニクは通路より少しく左の谷に入るか、又は尙遠く  
西に廻れば、シラカンバ、ミヤマハンノキ等の樹根に寄生するものに似たり。

七合目に近けばイハツメクサ、ベニバナノイチヤクサウ、オンタデ、ミヤマヲトコヨモギ等  
あるのみにして、これより以上は普通の草木は最早盡きて跡なしと云ふも可なり。而してハナゴ

ケ、シラガゴケ等の地衣亦之を見る。

之を要するに富士山の草本帯は其發達の程度之を彼の御岳、駒ヶ岳等の、地上滿目深紫鮮緑相  
競ひ紅白黃褐相争ひ所謂御花園の稱あるものに比すれば、頗る讓るところありと雖、該帯の大略  
は已に之を具備せりと云ふ可し。

#### (五) 地衣帯

三千米突以上即七合目邊より以上は主として、エイランタイ、ハナゴケ、シラガゴケ、チツゴ  
ケ等ノ地衣類より成り、ま、Frullania等の苔あり、又シモフリゴケ等の蘚あり。三千五百米突  
にして尙 *Weissia viridula* の生ずるを見る。然れども他の草木を生ずること甚だ稀にして時にイ  
ハツメクサ、オンタデ等の點在するを見れども八合目以上に至れば絶えて之を見らざりし。

#### 須走口に於ける植物分布の概況

須走は海拔七百七十八拾米突の地にして、村内に淺間神社あり、社内幽邃老杉鬱乎泉水吐出して  
仙境の感あり。其邊タマアヂサ井、ミツバ、チダケサシ、ムカゴイラクサ等あり。それより八九  
百米突の原野を通過すれば、ナベナありカラマツあり、ヲトコヘシ、マツムシサウの類多く、



ネバリタデ、ズミ、ドクウツギ、マメザクラ、アブラシバ、ヤナギタンポ、レンゲツ、ジの類あり、短松時々現はれ、富士アザミ亦見ゆ。

一千米突前後より一千二三百米突の邊にては、コケモ、イハワウギ、ドウダンツ、ジ、モミヂ、ムシカリ、チドリノキ、ミヅキ、ズミ等現はれ、又クルマユリ、シラネニンジン、シホカマギク、テンニンクワ、マツアサ、イメドリ、ムラサキモメンヅル、ハナイカリ、ヤグルマサウ、ヤマラダマキ等あり、カラマツ、タウヒ、シラベ等前後相踵ぎオンタデまた現はる。

馬返シ(第一中食)は千三四百米突にして此處に達すれば、ミヤマコウモリサウ、ミヤマモジヅリ、イハセンダウサウ、ハナイカリ、ヤグルマサウ等あり、サハグルミ、コハウチハカヘデ、ムシカリ、ツノハシバミ、ヤブサンザシ等之あり、それより一千五百米突に向ひて進めば、ツバメオモト屢々現れ、エンレイサウ、サラシナシヤウマ、イヌヤマハクカ、ミウマヨメナ、カラマツサウ、キツリフネ等あり。又ヤハズハンノキ、タニウツギ、カラマツ、ツガ、サハシバ、ミヤマハンノキ、ミヅナラ、タカネイバラ、コシモツケ等あり。カラタチゴケ、イハノリ、カブトゴケの如き地衣少からず。

それより狩休(須走より九拾町と稱す)に向ひて進めば、コフタバラン、タニギキヤウ、ツマ

トリサウ、ヤハズヒゴタイ、コマメグサ(玄參科)、フジハタザホ、ベニバナイチヤクサウ、マルバイチヤクサウ、ネバリノギラン等あり。富士アザミ、コケモ、ミヤマナ、カマド、ヤマヤナギ、キンレイクワ等又屢々現はる。

狩休より雲切不動(一千七百米突)に向ひて進めば、更にイチエフチドリ、ヅタヤクシユあり。ツバメオモト、ヤグルマサウ、ヒラネワラビ、ナンタイシダ等亦屢々現はれ、カブトゴケ、ヨロヒゴケ、ヤマヒコノリ、Physcia, Pertusaria, イハノリ等の地衣頗多し。

雲切社より一千九百餘米突なる第二中食場に向ひて進めば、ムシカリ、ミヤマナ、カマド、ツマトリサウ等屢々現はれ、シラビソ、カラマツの類亦頗る多し。シホヤ、イト井、コオトギリ現はれ、ハウチハゴケ、ナシゴケ等の蘚及び地衣の類多く二千米突前後石南亦現はる。石南は少しく北に回れば殊に多し。

それより一合目に向へば、エゾスラン、ネバリノギラン、ムラサキモメンヅル等現はれ、コケモ、ツバメオモト、ハナイカリ、クルマユリ等又屢々現はれ、スギゴケ、ウチハチヤウチンゴケ、ヤマヒコノリ、Cladonia gracilis, 等の類亦之あり。

一合目より四合目邊までは所謂草本帯にして、矮生のカラマツ、ツガ、イハヤナギ、ミヤマハ



シノキ、ハナヒリノキ、コケモ、タカネイバラ、イハヤナギ、石南等の樹木と其間にオンタデ、シラネニンジン、イハガリヤス、ミヤマスマノヒエ、カラマツサウ、コタヌキラン、ホタルブエロ、フジハタザホ、イハツメクサ等の生ずるを見る、オニク亦屢々現はる、此ものは大宮口よりは採集し易し、而して富士アザミ亦草本帯に出現す。

五六合目の間はミヤマヲトコヨモギ、ホタルブクロ、オンタデ、イハツメクサ等散布するの外は僅に、ハナゴケ、シラガゴケ、エイランタイ等の地衣の岩上に着生するを見るも七合目以上は大宮口に於けると異なるとなし、只シラガゴケ、チヅゴケ等ノ外一二蕨苔類の生ずるを見るのみ。

## 二、白馬連峰、

日本アルプスの北端に盤踞する白馬の連峰は、南に嵯峨たる鍵ヶ岳あり其の北に杓子岳あり杓子岳の北なるは連峰の盟主白馬山とす、世に大蓮華と稱する者之れなり、曾て「朝日に映じては残雪白駒の蒼穹を奔騰するが如し故に信州の民呼んで白馬と云ひ、夕陽を受けては紅蓮の空際に開けるに似たり、されば越人名付けて大蓮華と稱す」と「拙著やま」に、記載せしことあり、實に

白馬レロバは信州方面山麓民の一般に呼ぶところ、越中越後の山麓民は常に大蓮華と稱せり。

大蓮華山なる名稱は古くより知られたれども、白馬山の名は世間之れを知るもの尠なかりしが、近年に至り其の名稱甚世人の注意を惹くに至りし者は、其の山容の雄大と大残雪の壯觀、高山植物の豊富等の點に於て日本アルプス中稀に見るの名山なればなり、特に登路の容易なるは登山者に便宜を與ふ事大なりと云ふべし、されば最勞働して本邦高山の特色を知らんと欲せば此山に登るを得策とす。今白馬連峰に就き登路の順序に従ひ其の梗概を案内せん。

### 第一 信州方面の登路

白馬山に登らんとせば信州方面の登路を以て最便なりとす、即ち北安曇郡北城村大字四谷區より登攀すべし。

四ッ谷は糸魚川街道に沿ふ部落なり、中央線明科驛より大町を経て十二里馬車人車の便あり、又長野市より鬼無里村を経て十一里、途中柳澤峠あり人車を通せず。

四ッ谷には旅舎山木屋（松澤貞逸）あるのみ、僻陬の地不便多けれども白馬登山者は皆此處に宿するを常とす。

四ッ谷より西方向に白馬の連峰を仰ぐべし、其の紫色の山貌燦たる残雪先づ登山者の胸を躍ら



しむ。

山木屋に於て食料、防寒具及案内人を周旋せしむべし。

### 第二 二股より喬木帯

白馬登山者は早朝四ツ谷を出發すべし、田邊の間を行くこと約十八町にして細野區に達すべし、白馬案内人は殆んど此地の産なり、細野區より十八町にして二股と稱するところあり、即ち白馬より來る北股の溪流と鍵ヶ岳より來る南股の溪流との合流點なり。

南股の溪流を渡り直に鍵ヶ岳に向ふ者は南股の溪流に沿ふて登るべきなり、直に白馬に向ふものは北股の溪流に沿ふて行くべし、日蔭淵の深潭附近を経て下の大平より左折し溪流に離れ喬木帯中を登る、上の大平を経て沼池に至る二股より一里と稱す。此附近より喬木帯特有の植物多し。

猿倉を經、熊の穴と稱するところにて北股の溪流に會す、奔瀉雪を噴き雲霧を吐く。

### 第三 白馬尻

二股より約三里、四時間内外にして白馬尻に達す、(海拔約千六百米)附近の植物既に灌木帯の者多し、爰に至れば北股澤は滿溪大殘雪を以て蔽はる、盛夏登山者が一度此地に達すれば其



白馬山山頂の



の景色氣候の一變せるに驚かざる者なからん、雪を涉りて對岸に達すれば白馬尻の小屋あり、二十名内外を宿せしむべしと雖も僅かに雨露を凌ぐに足るのみ。

#### 第四 大雪溪

二股より白馬尻までの登路は殆んど困難を感せずと雖も、白馬尻より葱平に至る廿町許の間は全く雪上を進まざるべからず、勾配急にして雪上の歩行に馴れざる者は登降稍艱じ、雪上を下降する際は登攀の時に比して危険多けれども、多くは葱平の下方に於て樹枝を切り橋を作り之れを人夫に曳かしめ廿町許りの雪溪を白雲迷ふ谷底目懸けて降るときは其快馳瞥ふるにもなし。

雪溪の兩岸草花の種類に富み好採集地たり。

白馬尻より葱平まで二時間を要す。

#### 第五 葱平

大雪溪を登り盡せば葱平に達す、地域既に草本帯に入り所謂高山御花畑にして、七月下旬より八月上旬まで約二旬の間は百花絢爛濃紅淡紫其の美觀云はん方なし、大雪溪に於て高嶺の雪の壯觀に接し、今又高山植物の美花を看れば、既に日本アルプスの二大特色に接せし者と云ふべし。此地には曩に宿泊すべき小屋の設けありしも積雪の爲めに破壊せられて今は其の跡をも止め



ず、薪とすべき樞松多く又水の便利あればテントの用意あるものは此地に露宿するも可なり。

#### 第六 氷河の遺跡

葱平より直上して將さに信越國境たる山稜に達せんとするとき右方凹地に一大殘雪あるを認むべし、其の兩岸を精査するときは硬砂岩より成れる岩塊の表面に氷河の擦痕と稱する者を見出す事を得べし、其の氷河の遺跡なる事を稱道せしは山崎理學士にして、山中所々に「カール」と認むべき地勢の所ある事、堤防狀の端堆石ある事、及び岩面の擦痕等によりて往古氷河の存在を證せられたるなり。

#### 第七 石室

白馬の連峰は信州方面に於ては古より西嶽と總稱し登山する者尠なく、若し登山するものあるときは必ず天候に異變ありと近來まで一般に迷信せり、登路は幸に自然の地形の然らしむる結果として頗る容易なれども宿泊すべき小屋の設備皆無なれば登山者の困難一方ならず、近年白馬尻に設けられたる小屋の如きも實に不完全極まれり、參謀本部測量員の設けし頂上附近の小屋は狹隘にして不完全なれども白馬登山者唯一の宿泊所たり、絶頂と氷河遺跡ある大殘雪附近との略中間にあり、周圍に石を疊み木板を以て屋根を作れり、僅かに七八名を宿せしむるに過ぎず携帶者

等少なきときは十名を容るべしと雖も殆んど横臥する餘地なかるべし、清水は小屋の少しく下方に湧出し旱天猶潤るゝ事なし、薪とすべきは附近の樞松なれども濫伐せしを以て多少遠距離に至らざるべからず、相當の防寒具を用意すとも夜間の寒氣堪え難ければ終夜火を焚くに非ざれば凌ぎ難し、故に登山者の此石室に宿せんとする者は人夫をして先づ充分なる燃料を採集せしむべし。

右に述べしが如く白馬山頂附近にありては身を容るゝは此石室あるのみ、石室も狹隘不完全にして何等の設備なき事を忘るべからず。

#### 第八 絶頂

石室より登ること七町許にして絶頂に達す參謀本部の三角點あり、曾て山頂の感想を記して曰

『山骨現はにして草短く鬱氣常に磅礴雲霧徂徠す、足は越中越後信濃の三國に跨がり、身は俗界を抜くこと一萬尺、今や人界と自然界との交關に立ち漂渺紫微に入るの想あり、此高遠雄大な宇宙の大觀に接しては口言ふ能はず筆紙も盡し難し、胸中一塵事なく愴然として涙の滂沱たるを覺えず』「やま」



頂上の偉観を説明せんとせば吾人の秃筆は其の萬一をだも記する能はず、  
千山萬岳の彼方より昇る朝暉日本海の彼方に没する夕暉の景に至つては何人も其の壯美に驚歎  
せざるものなからん。

第九 杓子岳

氷河遺跡附近の大残雪の上方山稜を西南に進むと三町許にして偃松の間に細徑の左折せるを見  
るべし、リンネサウ、ウルツプサウ等盛に繁殖せるを見る、猶ほ山稜を東南に進むときは左方は  
葱平の御花畑を下瞰す、將さに杓子ヶ岳の地域に達せんとするとき右方に立壁の小舎の所在地を  
下瞰すべし、杓子及鍵ヶ岳の頂上に向ふ者ほ猶ほ東南に進むべしと雖も、若し夫れ鍵ヶ岳の裏面  
を廻はりて其の左肩に出で直に温泉に至らんとする者は、杓子ヶ岳の裏面に向はずして鍵ヶ岳の  
背面に下るべし、細徑判然迷ふ事なかるべし。

杓子ヶ岳の絶頂は崢嶸奇抜なれども植物に乏しく又別に登路なきを以て多くは其の絶頂を究め  
ずして其の背面を横過し鍵ヶ岳に向ふを常とす。

第十 鍵ヶ岳

杓子岳の地域を脱して猶ほ鍵ヶ岳の頂上を極めんとせば、何處までも山稜を登攀すべし、左方

杓子ヶ岳



杓子ヶ岳



頂上の偉観を説明せんとせば吾人の禿筆は其の萬一をだも記する能はず、  
千山萬岳の彼方より昇る朝暾日本海の彼方に没する夕暉の景に至つては何人も其の壯美に驚歎  
せざるものなからん。

第九 杓子岳

氷河遺跡附近の大残雪の上方山稜を西南に進むと三町許にして假松の間に細徑の左折せるを見  
るべし、リンネサウ、ウルツプサウ等處に繁殖せるを見る、猶ほ山稜を東南に進むときは左方は  
葱平の御花畑を下瞰す、將さに杓子ヶ岳の地域に達せんとするとき右方に立壁の小舎の所在地を  
下瞰すべし、杓子及鍵ヶ岳の頂上に向ふ者ほ猶ほ東南に進むべしと雖も、若し夫れ鍵ヶ岳の裏面  
を廻はりて其の左肩に出で直に温泉に至らんとする者は、杓子ヶ岳の裏面に向はずして鍵ヶ岳の  
背面に下るべし、細徑判然迷ふ事なかるべし。

杓子ヶ岳の絶頂は嵯峨奇抜なれども植物に乏しく又別に登路なきを以て多くは其の絶頂を究め  
ずして其の背面を横過し鍵ヶ岳に向ふを常とす。

第十 鍵ヶ岳

杓子岳の地域を脱して猶ほ鍵ヶ岳の頂上を極めんとせば、何處までも山稜を登攀すべし、左方

杓子ヶ岳



杓子ヶ岳



前面は千仞の絶壁右方の裏面は傾斜稍緩なり、頂上に達すれば此處にも參謀本部の三角點あり、其の眺望の壯大なる白馬に譲らず。

南方直に大黒嶽の頂上を俯瞰し、後立山鹿島鏈等北部日本アルプスの連嶺蜿蜒起伏し何れを夫れと認めがたきも、遙かに一劍寒く天を刺すものは信飛境上の槍ヶ岳なり、西方黒部川の深谷を隔て、晴巒雨峰を壓して雲漠に聳ゆるもの之れ立山の五峰、残雪特に鮮なる劔ヶ岳森嚴なる相貌覺えず吾人をして崇拜せしむ、

西北方は洋々たる日本海富山灣の彼方能登半島を望むべく灣内白帆の點々たるを見るべし。

北方には杓子の嶙峋あり白馬の絶頂威風堂々あたりを拂ふ連峰中の盟主の權あり。

東南方には妙高、黒姫、戸隠、飯綱、淺間、八ヶ岳等を指點すべし、雲烟模糊の間窺然として頭角を現はすものは芙蓉峰なり萬嶽悉く長楫す。

絶頂より山稜を南に降ること十餘町にして稍平坦なる處に達すべし、こゝにて鏈裏より來る細徑に合す

第十一 鏈ヶ岳温泉

鏈ヶ岳左肩平地より岩石の壞崩せる斜面を東南に降れば直下に一雪溪あり、其の雪上を下ると



きは温泉附近に出づべしと雖も頗る急峻なるが故に注意せざる時は危険なり、此雪溪に達せざる上方に於て左方鍵ヶ岳前面を尋ぬるときは、又一小雪溪を見出すべく、此の雪溪も急峻なれども危険少なかるべし、其の中途より右方に下れば温泉の直上に出ずることを得べし、鍵ヶ岳左肩より温泉に至る間には殆んど人跡の認むべきなきを以て、経験なき者は必ず案内者を伴はざるべからず、然らざれば不測の災に罹る事なきを保する能はず。

鍵ヶ岳温泉は鍵ヶ岳の前面海拔七千尺許の處南股の水源にあり、全く無人の境湧出孔三個あり上方の者最大なり、幅二三尺許なる岩罅より滾々として熱湯湧出し岩壁を流下して一大湯瀑となる、岩下の凹處一方に岩を疊みて作れる浴槽あり深さ胸に達す、温泉は清澄透明槽底の砂をも數ふべし、溫度肌に適す、頭上に鍵ヶ岳の幘壁を仰ぐべく脚下には残雪の皚々たるを見る、交通不便の故を以て如斯良温泉も何人の顧るものなきは遺憾とすべきなり、時に破壊せる小屋の跡を見ることがあれども此所に於ては露宿を爲さざるべからず。

鍵ヶ岳左肩の平地より温泉迄は十七八町大抵一時間内外にて達することを得べし。

#### 第十二 入ノ二股

鍵ヶ岳温泉より雪上を下ること二町許にし右方大イタドリの叢中に細徑を求め入ノ二股に下る

べし、山籠の人々の温泉に往復せし者ありし時は人跡を見出すこと容易なれども、左なき時は此所も案内人なきに於ては下ること能はざるべし、少しく下りて喬木林中に入るときは細徑明にして迷ふ事あるなし、途中御殿場と稱するところあり露宿地に適せる小平地なり、御殿場より少しく下りて大澤下りと稱する急坂あり、直下して南股の溪流に下り岸に沿ふて下れば一溪右方より來りて合一するところあり、之れ入ノ二股にして温泉より一里半許の處にあり、こゝも亦露宿地に適す。

入ノ二股よりは南股の溪流に沿ふて其の河原を下るときは一里半許にして二股に達し白馬登山路と合す、入ノ二股以下は溪流の左右何れを下るも可なり、左方にはヒエバタケ袖ガラ澤前ガラ澤傳七等を経て二股まで細徑あり。

#### 第十三 越後方面の登路(根小舎大師、木地)

越後方面の登路は即ち白馬の裏山口と稱すべきもの、之れを信州方面の登路に比すれば山麓より頂上に達するの距離長くして一日に登攀すべからずと雖も、途中蓮華温泉あるを以て宿泊地に不便を感せず、北越街道糸魚川より姫川に沿ふて上ること三里にして西頸城郡根知村大字根小舎に達すべし、馬車の便あり、根小舎に山本屋と稱する旅舎あれども頗る僻陬の地なり。



根小舎より進むこと三里にして山ノ坊と稱する所あり旅舎あり、朝野屋と呼ぶ。

山の坊より少しく進みて大所川を渡り右方の支路に入り大所に向ふべし、爰までは糸魚川より信州松本に通ずる縣道なるを以て道路平坦なりしも、之れより細徑を辿り大所を経て木地向ふべし、山ノ坊より約一里と稱す、木地より蓮華温泉まで約三里其の間全く人烟を絶つ故に準備は山ノ坊までの間にて之れを整ひ、人夫は必ず木地或は大所にて雇はざるべからず、然れども木地と温泉との間は道單一にして殆んど迷ふべきところなし、木地より以上全く喬木帯にして登攀何等の苦なし。

#### 第十四 蓮華温泉

蓮華温泉は海拔約千七百メートルの所にあり、木造浴舎四棟あり檐低く室狭く何れも陋隘なり、屋後二町許の所に元湯あり、庭前より鉢ヶ岳、赤男、白高地等の雄峰殘雪皚々たるを望むべし、蓮華温泉より以上は道途頗る險なり、温泉より蓮華鑛山（現今探掘せず）瀬戸川飯場と稱するところまで約一里、瀬戸川飯場より第一飯場と稱するところまで約二里なり、曾てこゝには鑛山探掘に従事せる多數の人夫小舎を作りて宿泊し居りし事あり、此所より大殘雪に沿ふて登ること半里にして鑛山の舊坑孔に達すべし、此の附近以上は案内者なくんば殆んど登るべからず、坑

口附近より約一里にして池の平と稱する所に出づ、此所より左方遙に白馬の裏面を望むべし、地域殆んど草本帯に入るを以て高山植物の繁殖盛なり、池の平に一小池あり猶ほ頂上まで約一里殆んど路と稱すべきものなきを以て天候不良濃霧等あるときは馴れし案内人にあらざれば路を失し易きにより注意せざるべからず。

#### 第十五 白馬山越中方面の登路

越中方面よりの登路二あり、一は泊町より小川温泉を経る者他は愛本橋より黒部川の谷に沿ふて登り祖母谷温泉を経る者なり、何れも距離遠く道路險惡且つ植物の分布等平凡なるを以て通行する者少なく、良好なる案内者を要す。

#### 第十六 小川温泉よりの登路

越中泊町より三里にして小川温泉（明治四十五年浴舎流失）あり小川温泉より横山嶺を越え三里にして北又小舎あり小林區署にて作れるもの、宿泊に便なり、北又の小舎より又三里にして柳又小舎に達す、此小舎は九尺に二間許の大きにして木皮を以て作りたる原始的の者なれども宿泊に差支なし、柳又小舎より約一里喬木帯中を登れば灌木帯に出で之れより約六里許の間尾根傳へに登るべし、登路殆んど不明なれば注意せざるべからず、清水小舎に達すれば祖母谷温泉路と合



一し二里にして白馬頂上の小舎に達することを得べし。

#### 第十七 祖母谷よりの登路

北陸街道愛本橋より内山村に入り、約半里にして村里を離れ黒部川に沿ふて進む、林道なるを以て頗る平坦なり、内山村より一里の處にて黒部川を渡り進むこと又一里佛石茶屋に達す、之れより猶ほ進むこと約一里にして黒蘆温泉への岐路あり、こゝより祖母谷温泉まで約三里半道途もどより平坦ならずと雖も峻ならず。

祖母谷温泉は海拔約二千二百尺祖母谷川と祖父谷川との會流點にあり、四個の浴槽あり頗る幽邃の地なり。

祖母谷温泉より清水間は約四里、主として祖母谷川の溪間を登る、祖母谷温泉以上は案内者なくして上るべからず、清水平小舎以上は小川温泉方面よりの登路と合一す。

#### 第十八 白馬連峰の植物分布

##### 1. 喬木帯

白馬の山麓二股附近は海拔約九百メートル地域既に喬木帯に入る、大平沼池中山澤等を経て白馬尻に達する間は實に太古の儘なる森林にしてオホナラ、シヅナラ、ブナ、ハンノキ、カツラ、

トチ等の潤葉樹繁茂して晝猶ほ暗く、樹蔭にはトガクシショウマ、ヤグルマサウ、サンカエウ、キヌガサ、ウ、ウバユリ、ナツユキサウ、ヤマソナツ等の草木驚くべき生育をなし、其長大なるに一驚を喫せざるものなし、シラクチヅル、イハガラミ等の纏繞植物は樹梢にかゝり樹皮には蘇類地衣類等一面に着生して完膚なし。

特に白馬山信州方面の喬木帯に就きて一言すべきは、殆んど潤葉樹にして針葉樹に乏しき事之れなり、越後方面にありては海拔僅に五六百メートルの地より喬木帯に入る、大體信州方面に似たりと雖も針葉樹の多數を有するは著しき相違の點あり、而して此喬木帯は蓮華銀山附近に迄發達せり。

##### 2. 灌木帯

信州方面の喬木帯は海拔千六百メートルなる白馬尻附近に終り以上灌木帯に入る。

摩天の喬木全く其の跡を絶ち各種の樹木は吾人の身長にも達せざる灌木類にしてベニバナイチゴ、ミヤマハンノキ、ミヤマナ、カマド等を始めとして石南科の各種最多し、草本類はダイモンジサウ、クロクモサウ、フキユキノシタ、オホサク、ヲサウ、イハイラフ、カライトサウ、シモツケサウ、ウメバチサウ、ノウゴウイチゴ、オホバキスミレ等最多し、白馬尻より大残雪を登り



て葱平に達すれば草本帯の地域なり。

越後方面の灌木帯は蓮華銀山附近より池の平附近に達し所産の植物前者と大差あるなし。

### 3. 草本帯

海拔約二千六百メートルなる葱平に達すれば高山草本帯に入り美事なる御花畑を見る事を得べし、シロウマアサツキ、シロウマフウロ、シロウマワウギ、タイツリワウギ、タカネヨモギ、ハクサンイチゲ、ミヤマキンバウゲ、シナノキンバイ、タカネナデシコ、タカネミ、ナグサ、チシマキキヤウ、イハキキヤウ、シコタンハコベ、チンマアマナ、チングルマ、シロウマチドリ、テガタチドリ、ハクサンチドリ、キバナカハラマツバ、シマイケアケボノサウ、オノヘリンドウ、ハクサンイチゲ、ツクモグサ、ウルツブサウ、ヒメハナワラビ、ミヤマナヅナ、フジハタザホ、タカネオトギリ、リンネサウ、ヤマウイキョウ、ハクサンボウフウ、クロユリ、クルマユリ等一々枚舉に遑あらず、八月上旬此等各種の植物が一時に開花せる際は濃紅淡紫妍艶を競はし、其の美比すべきものなし、海拔約二千八百五十メートル參謀本部小舎のある附近までを草本帯の領域とす、葱平以上の地にありてはムカゴ、ユキノシタ、シコタンサウ、ヒメカラマツ、コマクサ、シロウマナヅナ、ミヤマムラサキ、カカネリンドウ、イハツメクサ、タカネツメクサ、ホソバナ

ツメクサ、ヒメカラマツ、キンダクマ、ナンキンコザクラ、ムシトリスミレ、ウラジロキンバイ等皆高山植物中主要なる者を産す。

越後方面にありても池の平以上頂上附近に達する迄は美事なる草本帯にして所産植物略相等し

### 4. 地衣帯

白馬の絶頂にありては約三千メートルに達するを以て草本帯にして岩石の表面一面に地衣類附着し地域既に地衣帯に屬するを知るべし。

## 三、日本アルプス横断 (針木越え)

富士の如き孤立の峰に登れば展望廣潤にして頗る愉快なれども然かも變化に乏し、之に反して日本アルプスの横断の如きは高山あり大澤あり、其の變化の甚だしき景象の多様なる殆んど應接に暇あらざるべし。日本アルプスの横断路は各所にあれども、信州北安曇郡大町より越中に出づる針木越えは最も有名なる者なり。

チエムバレン氏の日本アルプス横断記は此針木越を記せしもの、中に「針木峠は悪絶峻絶天下無比」の語あり、峠道の最高點は實に信越の國境海拔八千三百尺あり、關東平野に聳立せる筑波



山に比すれば殆んど三倍の高度を有す。

針木峠と稱するも今は殆んど道あるにあらず、明治八年信州北安曇郡平村野口なる飯島某此峠に新道を開き牛を使役して食鹽を運びし事ありしにより針木峠の名ありと雖も、此新道は崩雪洪水等の爲めに數年ならずして全く壊崩せり、爾來殆んど四十年全く道と稱すべきなし、信州大町より越中に到るの間僅に立山温泉の孤屋あるのみ、他は全く無人の境しかも信州より温泉迄の間約十五里三日間を費さざるべからず、真に深山幽溪と稱すべきなり。

針木越えを試みんとする人は先づ信州大町にて諸般の準備を爲すべし、而して案内人は必ず最近に此峠を越えたる經驗あるものならざるべからず。

大町より立山温泉まで二泊を要するにより之れに對して十分なる食料を携帶せざるべからず、立山温泉に達すれば人夫及食料等は容易に之れを得ることを得べし、早旦大町を出發し大原を過ぎ野口に出づべし、右方古寺領千石を有せし大澤寺の森を見る、鹿島川を渡り大町より約二里にして山路に入り猶ほ一里餘林道あり、籠川の流に沿ふて上る、全く人跡なきを以て草嶺をひらき溪流を徒渉し水邊の積を行くべし、海拔約千四百米突許の處に丸石の小舎あり、小舎と稱するも何等の屋舎あるにあらず、一大巨岩の溪邊に横はれるのみ、爰に宿せんとするときは木の枝

を伐り來りて石に寄せ掛け、桐油の類を以て之れを蔽ひ其の下に眠るなり、チエムバレン氏は第一夜を爰に宿せり、然れども吾人は第一日は出來得る限り前進して、可成的峠の下に達し野宿するを可とす、然らざれば翌日は頗る困難なるべし、特に黒部川の難所あり注意すべき事なり。

第二日は早旦より針木峠を登るべし、海拔約千七百米突内外の處に達すれば大残雪の下端に達す、雪上傾斜急峻にして、登るに約一時間半を要す、雪盡きて後は全く壊崩せる崖道を上らざるべからず、故に急雨等に遭遇するときは殆んど登攀困難なるべし、某外人が針木越えを決行せんとして果さざりしも此附近なるべし、峠の絶頂は信濃越中の國境にして之れより越中方面に降る路は信州方面の如く危険ならず、雜草の間に細徑を認むと雖も所々崩雪の爲めに壊崩せしどころあり、此所を横過する際は注意せざるべからず。

峠を下りて溪流の附近に至れば細徑全く絶ゆ實に此附近の通路は崩雪の爲めに年々破壊するを以て今年の路は昨年の路にあらず、一日降雨あれば溪流土砂を流し河床を變ずるによりて、今日の路は昨日の路と異なるなり、故に此近附の通路之れを描圖すること能はず、一定の案内記を草する能はず、旅客は適宜に最易なる所を撰びて溪流の附近を下るのみ、川田の小舎と稱するところあれども古昔小舎ありしと云へるのみ、露宿地としては此所より外に適當の場所なし。



次第に溪流を下るときは水量漸く多くして遂に徒渉すること能はざるに至るべし、よろしく流木の上を渡り轉石を飛び移りて右或は左に移るべし、實に深山幽溪全く俗臭なき靈域たり。

黒部川の流域に達すれば何人も其の水量の多さに意外の感あるべし、然れども平水の時は稍々上方にて徒渉することを得べし深さ腰を越ゆ、此所に又岩魚釣りの設けたる籠渡しあり、一條の鐵線によりて對岸に越ゆるもの頗る危険の感われども意外に安全なり、著者先年之れを渡る際、通ひ網切斷して非常に困厄せることありしも之れ稀有の事なるべし。

黒部川を渡れば小個の小舎あり雨露を防ぐことを得べし。

第二日の露宿地としては此黒部の小舎を措きて他に適當の個所なかるべし。

第三日此小舎を出で左方細徑を登れば温谷時に至るべし、温谷時は一名カリヤス平の名あり。

温谷時を前面に下れば雪溪に達し通路絶ゆ、雪溪を渡り適宜の場所より前面に登らば佐良く越えに登る細徑を見出すべし、雪溪に沿ふて此路を上るときは彼の佐々成政が越えしてふ佐良佐良の頂上に出づべし、盛夏處々に残雪あり高山植物満開す、八月猶櫻花の開くを見る實に塵外の境地なり。

佐良く越えを下るときは又溪流に出で細徑絶ゆべし、溪水に沿ひ其の右方を下るときは幽か

に人跡を認むべし、暫時にして左方に移り立山温泉路に出で、黒部の小舎より約七八時間にして立山温泉に達することを得べし。

立山温泉は夏季に有つては頗る繁昌し、時に二百人内外の浴客を見る。

立山温泉より直に越中上瀧かんせきに出で富山に達することを得べし、又彌陀ヶ原を経て立山の頂を究め富山方面に下るも可なり。

信州より備ひし人夫は立山温泉より歸らしめ、越中方面は立山温泉にて更らに備入るゝを可とす、食糧等も温泉に於て十分準備することを得るなり。

#### 四、越中立山

立山は富士、白山と共に日本の三山と稱せられ夏季登攀者非常に多し、殊に越中人は古より一度立山に登らざれば男子にあらずとさへ云ひ傳へたり、又頂上に於ける眺望は天上の偉觀と稱せらる、北日本アルプスの連嶺を遙かに眺むる壯觀は日本アルプスの一峰に登るときは却つて看ると能はざるなり。

淨土山、雄山、大汝、富士ノ折立、別山、劔嶽等皆立山の各峯に名付けし者、就中最高峰劔嶽



に至りては峰嶽殆んど攀づべからずせられしが、近年山嶽會員の其の絶巔を極めし者あり、立山に登攀せんする者は先づ富山を發し三里廿三丁にして上瀧に達し諸般の準備を爲すべし、立山中語（富士の強方に全し案内兼人夫なり）をも備入することを得べし。

上瀧町より常願寺川を渡り廿一町にして岩峰寺に達すべし。

岩峰寺には建久年間源頼朝の建立せしと云ふ前立社壇あり。

岩峰寺は曾て二十四の僧房ありしが明治の初年神佛混淆を禁せられしかば僧は皆髮を蓄へて神官となり、各房旅客を宿泊せしめて業を爲すに至れり、此地にも立山中語事務所あり、上瀧町にて中語を備ふ能はざりし者は此所に於て備入することを得べし、立山路は之より足趾漸く仰ぐ、横江村、千垣村等を経て行くこと二里廿一町立山々麓岩峰寺に達す。

岩峰寺は上瀧町なり三里五町海拔二千尺内外の地なり、こゝにも曾て二十四の僧房ありしも現今旅舎を營めること岩峰寺に異ならず、皆雄山神社の神官となり多く佐伯氏と稱す、祈願殿、大宮、若宮、開祖の祠等あり。

岩峰寺より全く村里なく帆立坂、馬止等を経て進めば山漸く盛まり路愈窄く遂に常願寺川の上流に出づ、稱名川の合するところに藤橋あり、岩峰寺より一里と稱す。

藤橋は稱名川に架せる釣橋なり、古は藤蔓を糾びて作れる釣橋にて之れを渡れば飄搖して股取り登山者の心膽を寒からしめしとか。

藤橋を渡れば黄金坂草生坂等の急坂あり、榛莽路を塞ぎ泥土滑かにして杖も用を爲さず、坂路を登り盡せば千手ヶ原に出づ眼界稍廣し。

材木坂（玄武岩の柱状節理を爲せるもの）熊王權現、鷲ヶ窟、美女坂、六部落し、斷載坂、禿杉、山毛榉坂、カリヤス坂、伏拜み等の名勝地名一々説くもくゞし。

伏拜みより遙か谷底に稱名瀧を望むべし、稱名の瀧は稱名川の上流早乙女嶽にかゝれる者、其の高さに於て殆んど比類なしと云ふ。

桑谷の前坂、後坂、鍋かぶり杉、夫婦杉、不動の茶屋等を経て彌陀ヶ原の高原に出づ、廣さ三里傳に曰く此の地も八百八谷ありして阿彌陀佛降臨して一日一夜に之れを埋めしと、一帶に火山噴出物の堆積せし高原なれば草短かく花瘦せたり。

茫漠たる草原の間弘法茶屋あり、水の如き冷泉あり渴せる登山者皆之れを汲む味甘露の如し。原中所々に瀝水あり禾本、莎草科等の繁殖せるあり餓鬼ノ田と呼べり。

岩峰寺より約四里追分に達す、之れ立山温泉に至る岐路あるが故に此名あり。



追分より二ノ谷、一ノ谷を過ぎて獅子鼻の奇岩あり、碁石坂、鏡石、大谷、音生原等の各所を経て進めば、室堂に達する途中左方に緑ヶ池、美久里ヶ池等の火山湖あり、地獄谷には今猶ほ火山活動の餘勢を存し熱湯の湧出せるあり、硫氣洞の大なる者あり、俗に八百三十六地獄あり死者に再會することを得べしと迷信せらるゝ所、登山者必ず立寄り一見の價值あり。

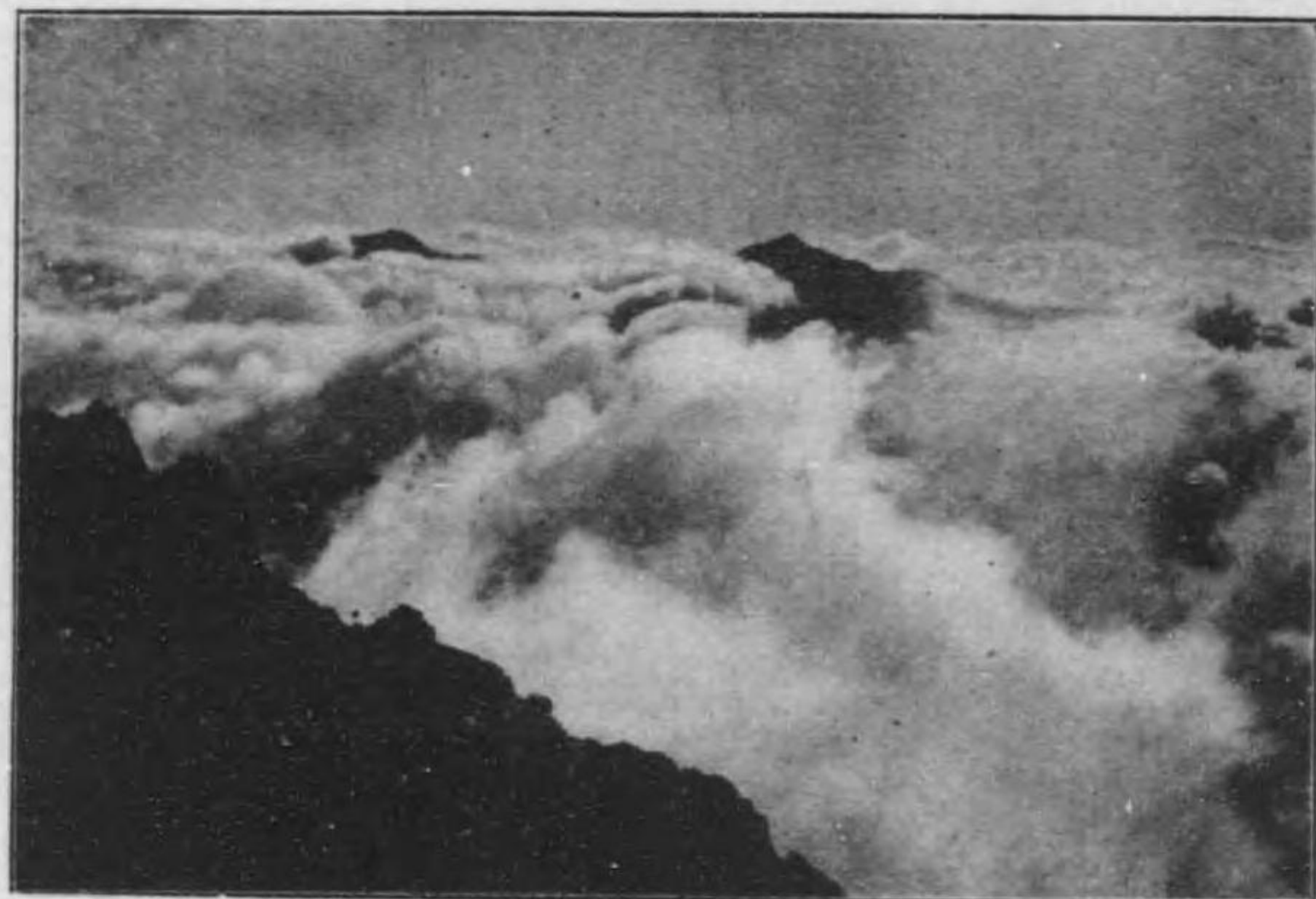
追分より三里にして室堂に達す。

立山の室堂は高山に於ける理想的の者にしてさすがは加賀侯百萬石の力に成りしもの、奥行十間間口五間六尺毎に尺角の柱を立てたり、一時に二百人を容るべし。

堂の一隅に社務所あり神官ありて登山者の郷貫姓名を録し、宿料(屋根代)拾五錢山錢四拾錢を納めしむ。

登山者は皆此室堂に一泊し翌早朝絶嶺に登るを普通とす。

神官は未明白衣玄冠を着け登山者の先登に立ちて之れを導く。早旦頂上に達し旭を拜し雄山神社に参拜し即日下山する者多し、特に越中の俗、一村より數名隊をなして登山するときは最も早く村に歸り村社に参拜するを名譽とし、途中疾病疲勞等の爲めに後るゝ者あれば、平素の罪業の因果となし顧みる者なしと云ふ、故に皆元氣の旺んなる他の山に於て見る事能はざるものあり。



(望東の山立) 海 の 雲

著者撮影



む望をスブルア本日北りよ山立中越

石崎光瑠氏撮影



追分より二ノ谷、一ノ谷を過ぎて獅子鼻の奇岩あり、碁石坂、鏡石、大谷、音生原等の各所を経て進めば、室堂に達する途中左方に緑ヶ池、美久里ヶ池等の火山湖あり、地獄谷には今猶ほ火山活動の餘勢を存し熱湯の湧出せるあり、硫氣洞の大なる者あり、俗に八百三十六地獄あり死者に再會することを得べしと迷信せらるゝ所、登山者必ず立寄り一見の價值あり。

追分より三里にして室堂に達す。

立山の室堂は高山に於ける理想的の者にしてさすがは加賀侯百萬石の力に成りしもの、奥行十間間口五間六尺毎に尺角の柱を立てたり、一時に二百人を容るべし。

堂の一隅に社務所あり神官ありて登山者の郷貫姓名を録し、宿料（屋根代）拾五錢山錢四拾錢を納めしむ。

登山者は皆此室堂に一泊し翌早朝絶巔に登るを普通とす。

神官は未明白衣玄冠を着け登山者の先登に立ちて之れを導く。早旦頂上に達し旭を拜し雄山神社に参拜し即日下山する者多し、特に越中の俗、一村より數名隊をなして登山するときは最も早く村に歸り村社に参拜するを名譽とし、途中疾病疲勞等の爲めに後るゝ者あれば、平素の罪業の因果となし顧みる者なしと云ふ、故に皆元氣の旺んる他の山に於て見る事能はざるものあり。



（望東の山立）海の雲

著者撮影



む望をスブルア本日北りよ山立中越

石崎光瑛氏撮影



頂上の大観の如き筆紙の盡すべきところにあらず、其の萬一をも形容せんと欲するが如きは愚の極なり。

雄山より大汝、富士の折立、別山に至り賽の磧に下り室堂に歸ることを得べし。

劔ヶ嶽の登攀の如きは十分山に馴れたるものにあらざれば之れを企つるは無謀と云はざるべからず。

下山の路は立山温泉に下り上瀧に出づるも可なり。

### 五、有明山、(信濃富士)

信州南北安曇兩郡に跨がり松本平より仰げる形状富士に似たるによりて一名信濃富士と稱す、然れども火山にはあらずるなり、全山花崗岩より成る山頂南北に狭長くさながら馬背の如し。

山頂には大己貴命外二神を祀れる小社あり奥社と稱す、里宮は山麓宮城にあり社殿壯麗なり、登山者は中央線明科驛より大町街道を進むこと約一里、左折して進み高瀬川及穂高川を渡り、行くこと二里宮城に達すれば有明神社を前に旅舎あり。

有明神社に賽し左方安曇電燈會社發電所の傍を過ぎ、中房川に沿ふて登ること少許右方に登山



路あり、里宮より頂上まで三里と稱す途中別に危険の個所なし。

頂上は前面安曇野を眼下に望み池田、大町等の市街指點すべし。

奥社附近巨岩の間に滴々湧出すに清水あり、再び前路に出でずして裏山路を下るときは中房温泉に出づることを得べし、路には一各目毎に木標或は石標あり、七合目附近地獄谷と呼ぶところあり路頗る急峻なり、五合目に於て小溪の底部僅に水を見る、中房温泉に近づくや喬木帯中に鞆たる飛瀑の音を聞くべし之れ樽澤ノ瀧なり、高さ十丈餘一ノ瀧二ノ瀧三ノ瀧の三段を爲す、之れより二三町にして中房温泉あり、喬木帯中蘭科植物多し。

裏山路も頂上より中房温泉まで三里と稱す、故に何れの路をとるも一目に登降すること容易なり、又十分注意するときは殆んど案内者を要せざるなり。

頂上の北に接して一峰あり北岳を呼ぶ、北岳より猶ほ尾根を行けば、西方摺鉢山、中台原岳に至ることを得べし。

## 六、燕 岳

中房温泉は高瀬川の支流なる中房川の溪谷にあり、安曇野の平地よりは宮城より中房川の溪谷

を進むこと約三里にして達することを得べし、又豊科東穂高方面より行くも字牧より直接に中房に通ずる栗尾道(牛を通ず)によらずして宮城に出で中房に至るを順路とす、宮城中房間は近來新道を通せしにより舊道の如く險悪ならず、中房温泉を根據として直に燕岳に登ることを得べし。

燕岳は海拔九千百十七尺ありと雖も孤立の峰にあらず、常念山脈北に走りて大天井岳となり屏風岳の連嶂となり猶ほ北走して一隆起を爲す之れ燕岳なり、故に此地方の者は單に燕岳と呼ぶ其の名の適切なるを感ず。

中房温泉よりは濁澤に登る他にカツセン澤の登路あれども不明且頗る急峻なるを以て前者に據るべし、ツガ、モミ等の繁茂せる喬木帯に登る、兩登路共に濁の頭あたまの三等三角點附近にて合一す、三角點附近より喬木帯を脱して灌木帯に入り偃松小舎の野宿地に出で山稜に達すれば、全山目覺むるはかりの花崗岩到處高山植物を點綴し美觀を呈す、爰より前面高瀬の深谷を隔て、見たる槍ヶ岳、鷲羽岳の如き壯麗比なし、後方を顧みれば中房川の谷の彼方摺鉢、有明に對し猶ほ安曇野の高原の一部を望むべし。

燕岳の頂上には二等三角點あり。



中房温泉より燕岳頂上まで約七時間にて達することを得べし。

頂上より尾根傳ひに北走すれば台原岳、東澤の頭と呼ばれる、所あり、猶ほ進んで中房乗越（日本アルプス縦走記参照）に達することを得べし、然れども途中偃松多く通過頗る困難なりとす。

中房温泉より此山に登る者は之れより大天井、常念岳等に登るべし。

### 七、屏風岳、

燕岳より南走する山稜は途中甚だしき高低なくして大天井の北側に至ることを得べし此間を屏風岳と云ふ、高瀬川と中房川との間なる花崗岩の障壁なり、テントの用意あるときは附近草本帯中に露宿することを得べし。

### 八、大天井岳、

大天井岳は屏風岳の南に接せる一隆起にして海拔二千九百二十二米突あり。

屏風岳より將さに大天井に移らんとするや、山勢全く一變し、其の傾斜の急なる實に驚くべきものあり、全山壊崩せる岩石の巨塊相重積し、數名にて登降するとき前後一直線を作すべきは岩

石墜落して危険なり。

此地方の人はオテンシヤウ又は中川のテンシヤウと呼ぶ、大天井岳等と云ふときは却て通せざる事あり、大天井の山頂は略ぼピラミット状をなし、北方の一稜は屏風岳に連なり、西方の一稜は東鎌尾根と稱する連嶺によりて槍ヶ岳に連なる之れ梓川及高瀬川の分水嶺なり、東南の一稜は大天井と呼ばれる、小隆起を経て二ノ股の小舎に至り横尾通りより常念岳に連なる。

早朝中房温泉を出づるときは燕岳に登り屏風岳、大天井岳を越へて二ノ股の小舎に達することを得べし。

二ノ股の小舎は今荒破せるによりてテントを用意せざれば露宿困難なるべし。

中房温泉より信濃坂に出で二ノ股に登る路ありと雖も道路不明且困難を極む。

### 九、常念岳、

東方松本平の方面より仰ぐとき最も高峻を極むる者は常念岳なり。

其の高度大天井に比して勝るとも劣ることなけれども、最高点に三角點なく前常念と稱する東方の一角に三等三角標（八千七百八十二尺）あるのみなれば精確なる高度を知るに由なし。



大天井方面より此山に登らんとせば、二ノ股の小舎より東南尾根傳ひに進むべし、横尾通りの斜面を通過し二ノ股より約二時間にて常念岳の北側常念の乗越と稱する凹地に達すべし、此地は常念澤（西）及鳥川（東）の分水嶺をなし乗越の小舎あり露宿の好適地なり。

乗越より常念の頂上までは頗る急峻なれども約一時間にて絶頂に達することを得べし。

乗越より常念澤を下り一ノ股との合點に達し猶ほ下ること少許一ノ股と二ノ股との分水嶺を越え二ノ股に出で流れに沿ふて下るときは梓川の澁り槍ヶ岳登山路に會すべし、然れども此附近全く路あるにあらねば案内者なくして通行すべからず。

常念岳の頂上より南方山稜を走るときは蝶ヶ岳に達することを得べし。

松本平より常念岳に登攀せんとする者は松本の次驛田澤停車場にて下車し馬車にて約一里を行き豊科に至り登山の準備を爲すべし。

豊科の北方約一里の所に東穂高あり、此所より宇牧の南方に出で鳥川橋の側より溪に沿ふて登り鳥川の支流常念の一ノ澤を上るときは常念の乗越に出づることを得べし、早朝豊科或は東穂高を發するときは即日猶ほ頂上に達し再びこゝに下り乗越小屋に宿することを得べし。

又鳥川を溯り常念の二ノ澤を上れば一ノ澤に比して登攀困難なれども前常念の頂に出で山稜を

登りて奥常念の頂上に達することを得べし。

他にも登路なきにあらざるも前記二〇路は比較的便利なる者なり。

案内者には山麓牧の者を備入るべし。

## 一〇、蝶ヶ岳

常念岳の南方に接して蝶ヶ岳あり、晩春松本平時に明科方面より其の左肩の残雪を望むときは全く巨蝶の形を現はす之れ山名の由て來るところなり、

蝶ヶ岳の登路案内は辻村氏の記文に詳細なり左に之れを録す（山岳七十三號）

一、常念岳頂上より南望すれば低く蝶ヶ岳の三角點が見える、この尾根を下りて唐檜の密林の間をくゞつて行く急な草原の上りになつて常念と蝶ヶ岳との間の高所に達する、更らに尾根をつたうて下つてまた登ると蝶ヶ岳のすぐ北の高峰に出る、その東南に低地があつて風を避けられる、餘り遅くない時期には雪がないから露營地に適して居る、此低地からはすぐ南に蝶ヶ岳の三角標が見えて時間にしても十數分を要するだけである、こゝの尾根から見る穂高山は實に雄大で正面に雪の多い横尾の谷を望み下に二ノ股の合流點や梓河原を見る。



常念の頂上からこゝまで約三時間であるが密林の間には切り開けがないから可なり困難を感ずる、そして無論常念から下る方が比較的容易なのは云ふまでもない、此間尾根の所々に小さな水溜りがあるが濁つた腐葉に埋れた池でハンザキやハコネサンショウノオ等が居て、已むを得ぬ場合の外は飲料に供することは出来ぬ。

二、鳥川橋畔から右岸に沿へる林道を上流へ向ふと岩原の山神の祠がある、その松林の間の一問巾の路を右の崖に鳥川を見ながら進むと左に小屋がある、橋から約一時間半で鳥川に渡した小橋を渡つて對岸(左岸)に移る、始めは一帶の花崗岩であるが此邊からは古生層となつて粘板岩を見る、林道には軌道があつて時に棧道の様になつて居る、彼の橋より進むこと一時間餘(此間に右方より落つる常念の二ノ澤を渡る)再び橋があつて路はまた川の右岸に移る、此橋の少し下流に於て南から「崩れ澤」が分流して路はその澤の左岸に沿ふて南へ向ふ、時々丸木橋によつて或は左岸または右岸に移る、分流點から登ること一時間で澤は二分する、其右から来るは「崩れの本澤」で左方の溪は「崩れの東澤」である、こゝには立派な小舎がある、「崩れの本澤」を溯れば蝶ヶ岳より南に位する「崩れの頭」に出づるから、それより尾根傳ひに右に登れば蝶ヶ岳頂上に達する。

豊科を朝出づれば小屋まで半日強で達せられるがこゝに泊つて翌日蝶ヶ岳に出づるがよいと思ふ。

三、「崩れの東澤」を登ると所々に小さな崖崩れの跡があるが、兎に角林道が出来て居て三ヶ所に小舎もある(内一ヶ所は全く荒廢せり)前記本澤と東澤との合流點から二時間ばかりで尾根に達する、そこから右に行くとも笹の間は三等三角點が立つて居る、これが鍋冠山の頂上である、こゝから尾根傳へに梅の密林と根曲り笹の間を分けて西に進めば、時々可なり急な登りがあつて遂に鍋冠り頂上から四時間ばかりで常念山脈の主脈と東に派出せる此鍋冠山脈との交叉點に出る、その少し南方の主脈に三等三角點がある、此交叉點には狭い低地があつて早い頃には雪解の水も溜つて居る、こゝからは左に梓川の溪谷を見ながら常に夫れを隔て、穂高山を仰ぐ北に向へば、數ヶ所の上り下りがあつて、或は偃松の間を或は尾根の石原を或は低い梅や唐檜の密林を分けて交叉點から三時間餘りで蝶ヶ岳頂上に着く、此間に三ヶ所許り野營に適するところがある。

此の途は鍋冠りまで林道があるがそれから先の密林は餘り樂でなく主脈の山稜に達するまでは殆んど眺望もない、只時々右に「崩れ澤」を越えて常念岳と蝶ヶ岳との尾根を仰ぐだけであるが、梅の大森林の景色は何とも云ひ様のない程立派である、こゝに注意しなくてはならぬのは納の



多いことで、防虫網を携帯しないと随分不愉快な目に遇ふ、尾根には飲料水がないから雪の消えた頃にはその注意をして途中で泊らない様に日取を定むる必要がある、少しは早くとも「崩れの東澤」の小舎に泊つて翌日蝶ヶ岳まで行く方が楽だ。

四、鳥川本澤を溯つて蝶澤に入る事数丁にして右に切れその短澤（梓川の短澤と對す故に便宜上東短澤と呼ぶ）を上つて蝶ヶ岳と常念の中間の凹所に出られる、そこから山稜を右すれば常念左に登れば蝶ヶ岳に行かれる、西短澤を下れば梓川原まで出て神河内に行かれる、鳥川牧附近から神河内に行く最近の通路であるが道は餘りよろしくない、東短澤には瀧があるけれども下流から向つて左に廻れば登攀せられる西短澤には別に瀧がない。

五、前記鳥川の本谷からその支流なる蝶澤を溯つても蝶ヶ岳に出られるそうである。

### 一一、槍ヶ岳、（神河内溪谷）

槍ヶ岳は北日本アルプス主脈の中央に位し其の形状の奇抜なるジャバニースマッターホルンの名空しからず、其の登攀路の途中に神河内（上高地）の幽溪あり其の一端に温泉あり、曾ては神河内の神苑とまで呼ばれし幽邃の境も、今は巨木を伐りは切り倒し幽趣ありし橋梁も殺風景なる

釣り橋と變じ、株式會社の浴場は俗塵多く人夫も悪ずれして唯錢を貪り甚だしく俗了せり。

去れど上高地は槍ヶ岳、穂高岳、焼岳、常念岳、蝶ヶ岳等へ登る者の根據地なるが故に、槍ヶ岳登路を説明する前に此地の概要を説くのである。

神河内（上高地）は海拔約五千七百餘尺の高地にして梓川の溪谷なり、槍ヶ岳、穂高岳の一帶其西北を限り、大天井、常念岳、蝶ヶ岳、徳本峠北より東に聳え、霞澤岳、焼岳南より西に繞ぐる、此一大凹地の中央には梓川の碧湍北より南す、曾ては鬱々たる喬木林天日を蔽ひ放牧せられたる黄牛白馬其の間に逍遙する様實に神苑の感ありき。

神河内に至るに二道あり一は松本より馬車にて西方五里南安曇部安曇村島々に達すべし、此間馬車にて三時間を要す。

島々には旅舎あり登山準備及人夫等の備入を爲すことを得べし。

島々郵便局前より右方に入り徳本澤に沿ふて登る、島々の村里を離るれば殆んど人家なし、行くこと約一時間半にして小林區署保護區官舎あり、猶ほ上流に進むこと一時間餘にして「岩魚止の小舎」に達す、此附近より登路著しく傾斜を加へ左折右曲次第に登り約二時間にして徳本峠の頂上に達することを得べし。



頂上より神河内の降路に向へは穂高の全容其の脚下梓河畔より鋸齒状を爲せる尖端まで喬木枝幹の間より隠見す、特に宮川池の水面の鬱々たる緑葉の間に輝ける有様得も云はれぬ風光たり。峠を下ること一時間餘にして神河内の溪に下り槍ヶ岳登山路に會すべし、即ち左折して行くこと一里弱にして上高地温泉に達することを得べし。

其の途中曾ては森林鬱々梓川の水邊に川柳の巨木白樺の老幹參差して幽邃を極めたれども今は大半濫伐せられて昔の面影を存せず、然れども此附近の樹林を伐採して製材すべき明科製材所は今春鳥有に歸して廢止せられたれば、此附近の自然の大景も當分殘賊せられずして餘命を保つことを得べし。

以上は徳本峠を経て直に神河内に達する順路なれども、外に白骨路あり、即ち島々より稻核（此間一里弱馬車あり）を経て梓町の溪谷に沿ひて進むときは稻核より一里半にして奈川の合流點奈川渡に達すべし、こゝにて野麥方面に至る高山街道に別れ梓の本流を進めば一里半にて大野川に達することを得べし、舊道は一旦大野川に至り白骨に出でたれども、今は新道梓川に沿ひて開けたれば大野川に至らずして直に白骨に達することを得べし。

早朝松本を發し稻核まで馬車の便により稻核より白骨まで徒行するとすれば實に一日の行程たり。

り。

白骨温泉は硫黄泉にして白濁せり、山中の温泉地としては設備稍備はれりと云ふべし、浴舎には湯本、柳屋、湯口、大石屋等あり。

白骨温泉より阿房峠を越え三里にして上高地温泉に達することを得べし。

猶ほ上高地温泉へは飛驒平湯よりも至ることを得べし。

又飛驒船津より中尾峠を越えて此地に入るの道路あり。

神河内附近にては四近の高山に登るの外、田代池、宮川池、中ノ湯、千丈瀧等遊覽の價値あるところあり、(カミカウチ)「カミグチとも云ふ」に神河内を宛てたれども地方にては上高地と記す温泉は上高地温泉と記し神河内温泉と記することなし)

槍ヶ岳登路は上高地温泉場より徳本峠路を戻り、牧場小舎附近より何處までも梓川に沿ひて上るときは約三時間半にして二ノ股の梓川に合するところに出づべし、途中上條嘉門治(獵師)の小舎、宮川池等に立ち寄る事を得。

二ノ股の合流點以上は雜草繁茂し根曲り笹等多くして通過稍困難なり、行くこと約一時間半にして赤澤の小舎に到る、大石の傍にテントを張り露宿することを得べし。



赤澤小舎より進むこと七八町梓川の河原に出づれば盛夏の候と雖も所々に残雪を認むべく高山植物の開花せる者多し。

赤澤小舎より約二時間にして満溪水雪を以て蔽はれたる所に達すべし、爰より稍急峻なる斜面を登る一時間餘にして坊主の小舎に達することを得べし。

坊主の小舎は巨岩の堆積せる間隙に宿泊するもの、八九名以上を宿泊せしむること困難なり。坊主の小舎の少しく上方に殺生の小舎あり、四五名を容るゝに足る。

上高地温泉を出發せる者は大抵こゝに來りて宿泊し翌早天絶頂を極め即日上高地温泉に歸るをよしとす。

坊主の小舎より槍ヶ岳の絶頂までは距離僅かなれども路と云ふ路なく全く壊崩せる岩石の上を上り、一旦信飛國境なる山稜に達し、こゝより頗る急峻なる絶壁を登ること約二百尺と稱せらる、其の尖頭に達すれば前面高瀬川の源流深谷の如き殆んど伏瞰すること能はず、眺望の雄大なる筆紙の能く盡すところにあらず。

再び前路を山稜に下り坊主の小舎に歸るべし、此山稜より飛騨蒲田温泉に降ることを得べく、又鎌尾根を渡りて日本アルプスの山稜縦走することを得べし。

又南方山稜を渡りて穂高岳に到ることを得べし。

## 一一、焼 岳

焼岳は一名硫黄岳と呼ぶ、標高二千四百四十五米突、四近の山岳に比すれば甚だ低しと雖も、近年屢々盛なる噴出を爲せるを以て有名なるに至れり、上高地温泉よりは南六十度西に位し距離約一里あり、其間何等障礙物なければ浴舎樓上より其の全容を望むべし。

其の山頂には陸地測量部二等三角點あり、截頂圓錐形をなし山巔に頗る大形なる舊噴火口あり、其の内に明治四十年以來の新噴火口あり絶えず噴煙せり、舊噴火口は東西直徑約二百米突南北約百五十米突あり、新噴火口は舊噴火口の東半にあり、其の西半部には大小無數の新噴火坑あり、此等の噴火口よりは常に水蒸汽、亞硫酸瓦斯、硫化水素等の瓦斯を噴出するにより、附近に於ては呼吸切迫して堪ゆる能はず。

此火山は口碑によれば天正十二年に大爆發あり、元文年間にも山崩れを起せしと云ふ、其の後近年に至りては明治二年に大なる山崩れを生じ、其後約二十年間大なる變化を爲さざりしも、明治四十年十二月八日噴煙し、次第に旺盛となり四十二年春に至り又活動し四十四年六月も稍盛ん



なる活動を爲せり、其の後噴煙絶ゆる事なし、本火山の活動は淺間と至大の關係を有し、淺間の活動せるときは焼岳靜穩に、焼岳活動せるときは淺間靜穩なり。

上高地温泉より此山に登るは最易なり、上高地温泉より梓川に沿ふて南に下り、白骨路と分れ峠澤を右に見て中尾峠に達すれば、左方直に頂上に登ることを得べし。

### 一三、穂高岳

神河内より仰げる穂高は其の脚底より絶巔まで何等遮る者なく實に崇高を極む、登路は上高地温泉より岳川の谷を登る者と、嘉門治小舎の附近より宮川谷を登る者とあり、其他横尾谷、横尾空澤等よりも登攀することを得べしと云ふ、特に其の絶巔より山稜を北走して槍ヶ岳に達する通路の如きは、跋涉不可能の事と思はれしが山岳會員鶴澤氏の一行は近年之れを決行せられたり、其の紀行によりて大要を叙せん。

上高地温泉より梓川に沿ふて槍ヶ岳道を辿り嘉門治小舎に到り、それより梓川の右手ウバニレ、川柳、モミ、ツガ等の下を潜り五六丁行きて左に曲り水無き澤を登る、途中幾多の小溪あれども右へ右へと登る時は路を誤る事なかるべし、海拔約二千米突なる上宮川原に出で斜に右方に

進み、漸くにして鞍部に出づれば瓢箪形の小池あり、左折して山側を東北に廻はり十町許りにて又四郎谷の急溪谷に出で一直線に急坂を登る、約二千六百米突の處に残雪あり、其の雪の上端にて峽谷四岐す左方より第二番目の澤を登り海拔約二千八百米突の山背に達す。

こゝに来るときは展望廣闊、脚下に上高地温泉場、瑠璃色の田代池、焼岳、霞岳も手に取るごとく、東南數町の所に前穂高あり、之れより右折して登れば傾斜稍緩く登攀比較的容易なり。

上高地温泉より約七時間にして南穂高岳（又四郎岳）の絶巔に達すべし、海拔約三千米突、三角點の東下方に石小舎ありテントなければ露宿すること能はず、之れより北方峻崖を下ること八九丁にして南穂高と奥穂高と連ねたる山稜の最低所に達すべし。

之れより鋸齒状の山稜を進む、五六の隆起を越ゆれば穂高岳の最高點奥穂高に達すべし、南穂高より約半里海拔三千百十米突。

絶頂より東北へ峰傳ひに下る、行くこと八丁許にして右方に小舎の跡あり、猶ほ北に登ること四丁許北穂高の三角點に達す、海拔約三千七十米突、三角點より東方數十丈の峻崖を下らざるべからず、頗る難所なり、少しく下れば空澤の石窟あり露宿地に適す、上高地温泉より此附近迄約一日の行程なり。



空澤の石室より山稜に登り、北走二三の隆起を越ゆれば海拔三千十四米突東穂高の頂に達す。東穂高岳の頂上より約四十度内外の傾斜面を下り低き山稜に出で、猶ほ北進すれば頗る峻険を極む。

空澤の石窟より約四時間にして穂高岳と槍ヶ岳との交點海拔約二千七百米突の所に出づべし、穂高、槍を連ぬる山稜中の最低所たり、此所より横尾の空澤を下りて上高地路に出づることを得べし。

之れより北方は又頗る峻絶巖絶を極め、巨岩の間山稜の左右を行く一定の通路なし、海拔二千九百四十米突の南岳に達すれば、之れより以北は比較的容易にして中ノ岳大嶺岳等を経て槍ヶ岳に達し其の南方山稜に出づべし。

空澤の岩窟より此所に至るまで約十時間を要す。

以上の通路固より案内者なくして通過すべからず。

#### 一四、笠ヶ岳

日本アルプスの部に詳なり参照すべし、

#### 一五、鷲羽岳

日本アルプス縦走記及日本アルプスの部参照、

#### 一六、黒岳

#### 一七、野口五郎岳

日本アルプス縦走記及日本アルプスの部にあり、

#### 一八、薬師岳

日本アルプスの部参照、

#### 一九、乗鞍岳

乗鞍行の部を参照すべし、

#### 二〇、木曾御嶽

#### 二一、木曾駒ヶ嶽

木曾御嶽及駒ヶ嶽の部参照、



### 二二、淺間山

近年屢々噴火活動せるによつて世人の注意を惹ける淺間山は本邦有数の活火山にして、信濃上野兩國に跨がり其の山體の構造頗る複雑なり、二個の外輪山及一個の火口丘を有す。

第一次の火口壁を爲せる外輪山は、殆んど破崩して僅かに牙山、及寶圓坊を殘存せるのみなり。第一次の火口内東方に偏して噴出せる第二次の火口壁も大方破崩して前掛山を存するのみ、其の内壁は絶崖にして柱狀節理を有する熔岩の露出せるあり。

外側は西方に面し約三十度の急斜を爲し燒石磊々全く草木を見ず、信州方面より山頂の如く見ゆるは此頂點なり、中腹以下漸次緩にして七八度の傾斜を爲すのみ、遂に寶圓坊、牙山を會して其の間に火口原を爲す、此火口原は新月狀を爲し其の一端を湯ノ平と稱す。

前掛山の南壁一低所を銚子口と云ふ、追分及御代田方面よりの登路はこゝに於て相會す。銚子口の東南に無間谷の深谷あり。

前掛山の東方に火口丘あり、即ち本火山の絶嶺中央に一大火口あり直徑約三百五十米突、常に噴烟を見る。

現今は熔炭、灰、砂を以て火口の大部分を埋め、噴烟は火口壁と其の間より噴出せる状態なれば蒸汽の噴出を妨ぐ、故に屢々爆發して登山者に危害を與へしこと一再ならず。

山の外側は全く浮石を以て被はれ輻射狀の裂溝多し、淺間火山を構成する岩石は、主として富士岩に屬し橄欖石を含むもの多く又往々鱗石英を有す。

天明三年に噴出せる熔岩は鬼押出しと呼び北麓に流出凝固せる有様、黒色の瀑布の懸れるが如し。

東方山腹の小淺間は寄生火山の一なり。

淺間に登るに數道あり。

一、小諸驛より湯の平を経て山頂に達するもの、湯の平に氣象觀測所及火山館あり、路稍遠きも峻峻なるところなし。

二、御代田驛より鹽野に至り安樂寺に一泊し、夜半登山して頂上にて日出を見、正午頃までに下山することを得、御代田安樂寺間約一里。

三、追分驛より淺間神社の後を過ぎ赤瀑を経て頂上に達するもの、路最近しと雖も峻峻なり。

四、輕井澤より杓掛驛（停車場あり）に出で北行一里半小淺間の麓に達し、こゝより登山する



もの路最遠し。

### 一三三、八ヶ岳

八ヶ岳は信州及甲州の國境に聳え、甲府盆地を隔て、富士山と相對す、八ヶ岳の名は一大舊火口壁破壊して數ヶの峰頭に分れたるによりて名付けられたるもの、必ずしも八ヶの峰頭あるにあらず、最高峰を赤岳と稱す、八ヶ岳群峰の北に接して硫黄岳あり一大爆裂火口を有す、中腹に本澤温泉あり、海拔七千尺の地にあり登山者の宿泊に便なり、本澤温泉より赤岳の頂上まで一日に往復すること容易なり、北方立科山に連なれる外三方孤立すと雖も、高山植物の種類に富めること彼の白馬に次げり。

八ヶ岳に登るに數道あり。

一、信越線方面よりの登路は御代田驛に下車し、岩村田、野澤、白田を経て甲州街道馬流驛に至る、此間馬車の便あり道程七里、

馬流より猶ほ甲州街道を南走すること一里、右折して村里に入り松原湖の附近を過ぎて八ヶ岳の裾野に登る、温泉まで馬の便あり、馬流、温泉間約四里と稱す。

二、中央東線方面よりの登路は諏訪郡茅野驛にて下車し、槻木を経夏澤峠を越えて本澤温泉に至るものなり、馬を通ずるの登路なれば途中嶮道なし、然れども槻木より全く人家なきを以て、裾野に於て路に迷ひ易ければ注意せざる可からず、茅野本澤間約六里。

此登路の外、諏訪方面よりは阿彌陀ヶ岳に登りて赤岳に至るものと、柳川の溪谷に登りて赤岳及横岳間の凹所に出づる者とあれども、何れも途中露宿の用意を爲さるべからず。

三、甲州方面よりの登路にも數道あり。

1、板橋方面よりの登路。2、日野春の大泉村を経て登るもの。3、小淵澤より小荒間を経て登るもの。

以上三道の中最後の者最も距離近しと云ふ、即ち中央東線小淵澤驛に下車し小泉村小荒間（旅舎なし）に達し、之れより裾野に登ること約一時間半、フルソマ川の谷に沿ふて登り、屏風岩の附近を過ぎて傾斜急峻なる左方の斜面に登り中ノ三ツ頭附近に出で、權現岳を越えて赤岳に達すべし、小荒間より權現岳まで約五時間、權現岳より赤岳まで約二時間を要す、されど此登路も露宿の用意を爲さるべからず。

本澤温泉より赤岳に至らんとせば、諏訪よりの登路を戻りて一旦夏澤峠に達し、こゝより左方



の支路を登れば少許にして偃松帯に出で四望廣濶。猶ほ登れば硫黄岳の火口壁の上に出づべく、此邊高山植物の盛に開花せるあり、展望一層雄大なり、火口壁を迂回して横岳に移れば、奇岩怪石路を擁し頗る危険の個所あり、右方の絶壁には高山植物の種類に富み清水の湧出するところあり。

横岳を越えて一旦赤岳に達すれば、急坂面前に起り登攀稍艱む、頂上に於ける展望は頗る雄大なり、植物分布は頗る單純にして其の種類横岳に及ばず。

#### 二四、立科山

信越線にて淺間の高原を疾走する車窓より南方遙かに八ヶ岳を望めば、八ヶ岳群峰の北に當り形狀稍々富士に似たる雄峯を望むべし、之れ立科山なり。

登路は南佐久郡畑よりする者と、北佐久郡蘆田よりするものとの二道は、山の北方より登るものなり。諏訪方面よりの登路比較的便利なりと云ふ、即ち諏訪郡茅野驛に下車し、三里にして北山村湯川に至り、之れより約一里瀧ノ湯温泉を経て頂上に達するものなり、湯川より頂上まで約三時間を要す。

立科山の頂上は岩石磊々たる岩原にて中央に窪所あり、其の直徑約百三十米突。  
蓼科神社を祠れる小社あり。

#### 二五、飯綱山

長野市の北方三里の所にあり、一座の火山なれども噴火口等今は之れを認むること能はず、長野市より坂路を行くこと二里餘にして山麓飯綱原の高原に達し、直に登ることを得べく登路明なれども山麓原野には細徑縦横せるを以て案内者を要す。

頂上飯綱神社の社堂あれども頗る破壊せり、其の南東及東方靈仙寺、天狗岳の二峰に連なる。飯綱山より北方戸隠中社に下る路あり。

#### 二六、戸隠山

飯綱原頭に戸隠一ノ鳥居あり、こゝより大久保(茶屋あり)を経て五十三町戸隠中社に達す、神官の宿坊は皆旅人を泊せしむ。

中社より一里弱奥社に達す、奥社より表山の頂上八方睨まで約三時間にして達することを得べ



し、其の間に百間長屋、蟻の戸渡り等の難所あり、表山の峰を渡り行くこと約三時間、一不動と稱するところに至る、こゝより裏山の領域たり、一峯毎に十三佛を祠る、吾地藏に小屋あり十餘名を容る。

吾地藏より頂上高妻まで約三時間を要す、無間の谷に高山植物多し。

中社より直に裏山に登らんとせば、中社の原を横ぎり大洞澤より一不動に登るべし。

### 二七、黒姫山

飯綱、戸隠、黒姫の三山は殆んど鼎足の形を爲せり、此山に登らんとせば信越線松原驛より頂上まで約三里、登路に難所なしと雖も登攀する者稀なるにより案内者なくして登るべからず。

山頂に小湖水あり之れ火口原湖にして、其の北方に小黒姫と稱する中央火口丘あり。

山頂より戸隠方面へ下ることを得べし。

### 二八、妙高山

飯綱、黒姫、妙高の三火山は南北一線を爲し、妙高山は黒姫山と關川の谷を隔て、相對せり。

美事なる二重式火山にして其の外輪山の東方は一部缺損せりと雖も、北西南の三方今尙ほ原形を存す、特に其の西部は完全にして廓岳くわくたけと呼ぶ、廓岳より北方に連れる外輪山は火口丘の北方に於て大藏岳となり、猶ほ東に廻はりて神名山となり大田切の火口湖に急斜す、外輪山の一部東方にありて大田切、小田切の火口湖に挟まれる者を前山と云ふ。

妙高山の主峰は此外輪山内西南に偏し急峻なる圓錐狀を爲す、所謂マメロンなり、但し本火山に於ては火口丘と外輪山との間に火口原と稱すべきものなし。

頂上附近は角閃富士岩より成れり、登路頗る峻なり、笈摺貝摺等の難所あり。

此山に登る者は信越線田口驛にて下車し、一里半にして赤倉温泉に達すべし此間車馬を通ず、赤倉温泉より登路明なり、一日にて往復すること易し。

### 二九、鳳凰山及地藏岳

鳳凰山に登るに三道あり、芦倉口、青木湯口、柳澤口之れなり、芦倉及青木湯路は御室に於て合一す、御室よりするものは途中地藏岳を越ゆる者なり。

臺ヶ原より青木湯に達し、之れより約二時間にして御室に至ることを得べし、左方芦倉路と合



一す、御室の小舎は今破壊して宿すべからず、芦倉方面より来る者は此地に露宿の用意を爲さるべからず。

御室より西北山背を登れば、約一時間にして開潤なる山背に出づべし、

之れより巖稜々たる山背を上下して進めば、約一時間にして

地藏岳の頂上に達することを得べし、地藏岳の頂上より約一時間半にして

鳳凰山の頂上に達すべし、頂上には地藏佛と稱する奇岩あり、高さ約十間尖頭二分す。

柳澤口より直に鳳凰山に登らんとせば中央東線日野春驛に下車し、一里強にして柳澤に達すべし。

柳澤よりサネ木、三本木等を経て精進瀑に達すれば之れより先は殆んど登路と稱すべきものなく、北御室附近にて露宿せざるべからず。

北御室より頂上まで約二時間にて達することを得べし。

### 三〇、甲州駒ヶ岳

甲州駒ヶ岳は一名白崩の名あり、山麓臺ヶ原より登山することを得べし。

臺ヶ原より竹生の寒村を過ぎて駒ヶ岳神社々務所に至り、これより尾白川を渡り、四十八曲の山道、黒戸山等を経、臺ヶ原より約七時間内外にして屏風岩の小舎に達し、こゝに野宿して明朝山頂を究め下山するをよしとす。

屏風岩の小舎以上は頗る峻峻にして所々に鐵鎖あり。

駒ヶ岳は花崗岩より成れるにより風光頗る明媚なり。

信州高遠よりも登ることを得べしと雖も、難所に甲州方面の如き設備なし。

### 三一、白峯山

白峰の連峰は山深く路遠くして容易に人の登らざる山なれば、もとより明なる登路あるにあらず、十分土地に通せる案内人を得ざれば登攀せんこと難し。

先づ甲府にて旅装を整へ猷澤に至り、之れより西山温泉に達す、夫れより野呂川の溪を上り、

支流白河内を溯り、白河内岳の南方山稜に達し、山稜を北進して農鳥山、間ノ岳、北岳に達すべしと雖も、十分なる野宿の準備と食糧等を用意せざるべからず。



## 三三、赤石岳

信州飯田地方には赤石登山會の設けありて登山するものあれども、他地方より此山に登るは頗る不便なるが故に年々登山する者尠し、特に植物分布の如きは頗る單純なるもの、如し。

飯田及高遠方面より登ることを得べし、此登路は小澁川の沿岸大河原に於て合一し、上藏、釜澤、小澁鑛泉を經、小澁川の溪流を溯りて頂上に至る、溪流を徒渉すること數十回なるを以て、豪雨等の際には到底昇降すること能はず。

## 三三、加賀白山

白山は加賀飛騨の國境に崛起し一大火山彙を爲す、有史以來屢々噴火せり、延應元年、天文廿三年、天正七年の活動の如き最著し、本火山は侏羅系より成れる地盤を貫通して噴出せる者主として角閃富士岩より成れり。

峰頭數峰に分れ所謂白山の五峰と呼ぶ、即ち大汝(奥之院) 劔ヶ岳、御前岳(二千六百八十一米突) 別山、三ノ峯之れなり。

大汝は最北にあり山稜東南に延びて劔ヶ岳となる、其の西南に御前岳あり、略環狀を爲し中央に噴火口の趾あり、紺屋地獄、血ノ池、油ノ池、五色池等の小池は皆其の凹所に生ぜし瀦水なり、又大汝の東側新火口に瀦水して翠池をなせり、以上三峰の山脈南に延び別山及三ノ峯となる、別山神社の鎮座せるところ最高し。

登路五條あり、

一、東路、尾添より廣野、追分、長峯、美女坂、瓶割坂を經て御前に登るもの、道程九里と稱す。

二、南路、白峯村市ノ瀬(金澤市より十三里卅一丁)より禮阪、一ノ宮、指尾、豊阪、女郎阪、別當阪、黒節、彌陀ヶ原、室平を經て登る者、之れは白山の正路とす。

三、市瀬より尾太郎橋、三石、檜木阪、檜阪、畜生谷、樺木阪、榎阪を經て別山に達する者、路甚だ峻なり。

四、飛騨國平瀬村より御前に登るもの。

五、越前國石徹白村より別山を經て御前に登るもの。

此等の諸道あれども白山に登る者は越前勝山方面より來る者も、金澤小松方面より來る者も、



皆白峯村市瀬に集まる、故に市瀬温泉の如き夏時登山者の爲めに雑沓を極む、市瀬より登攀すること三里にして室堂に達す、室堂以上は草本帯にして焦石の磊々たるを見るのみ。

室堂より八町にして大御前の絶頂に達す、眺望最雄大なり、頂上稍平夷白山比叡神社の奥宮を安置す、室堂より別山迄又三里と稱す、途中六兵衛室と稱する休泊所あり、別山は小白山の別名あり、頂上に大山祇命を祀れる小祠あり。

別山より市ノ瀬温泉に下るには絶頂より下方十町許にして別山室堂に至るべし、こゝにて越前石徹白路に分れ、右方三ノ峰を左にして下れば二里餘にして市瀬に達することを得べし。

### 上毛の三山

#### 三四、妙義山、

妙義は白雲、金洞、(中ノ岳)金鶏の三峰より成る、三峰中最も高く登路峻にして頂上の展望廣潤なる者を白雲とす、麓に妙義神社あり亭々たる老杉の間金碧朱檀人工の奥妙を極む、日本武尊を祭神とす。

妙義神社の傍らに鳥居あり奥ノ院頂上への登路なり、少しく登れば霧ノ瀧、日暮しの瀧、菅ノ清水と云ふあり、獅子岩、船岩其の他奇岩怪石一々枚擧すべからず、猶峻坂を登れば「大の字」に達す、こゝより登ること僅かにして奥ノ院に達することを得べし、奥ノ院は岩窟の内にあり、奥ノ院より旭胸と呼ぶ峻しき岩を鎖をたよりて登れば一小平地に出づ、四望廣潤特に秋季紅葉の期節に於ては頗る美觀を呈す、こゝより又奇岩怪石を越へて鼓ヶ岳の頂上に達すれば幾千尺の懸崖實に壯觀を極む、これより一步一趣變幻窮りなく奇態百出遂に白雲山の南端なり相馬岳に達することを得べし。

妙義町より南方行くこと十四五町にして小澤葡萄園に達す、こゝより坂路を登りて一本杉の茶屋に至れば、左方に天燭岩(筆頭岩)の一大奇岩あり。

こゝより僅かにして右方支路に入れば、毅然たる一大石門の眼前に聳立せるを見る、之れより前後左右奇岩峙ち怪石横はり、神鏡、鬼斧の痕實に天工の妙を極む、第四石門の南端眺望頗る佳なり、漸く絶巔に登れば全山の風光一眸の下に集まり、「天下又斯の如き山あるかと」呼ばざる者なからん。

再び第一石門に戻り、中ノ岳神社に至れば社後に旭日岳と稱する巨岩あり、鐵鎖鐵梯によりて



頂上に達することを得べし。

金鷄山は三峰中最も低しと雖も亦奇觀に富む、觀るべき者に天燭岩、子持岩、干瀧等あり、頂上の眺望は白雲に讓らず、然れども道途峻にして遊覽者の到る者少なく案内者なくして行くべからず。

妙義は山小なれども奇岩怪石多く奇景に富むこと殆んど他に比なし、如斯景趣を生せし所以の者は全く其の岩石の性質によるなり、即ち板狀及柱狀節理を有する集塊熔岩が風水の剝蝕浸蝕によりて其の天工の妙を極めたるによるなり。

此山に登る者は信越線磯部驛（妙義町まで二里八丁）或は松井田驛（一里十町）に下車し、人車或は徒歩にて妙義町に至り直に登山すべし、夜行列車を利用するときは東京より一日にて往復することを得べし、但し妙義の三峰中中ノ岳を一巡すれば他の二峯は登らざるも可なり。

### 三五、榛名山、

妙義、赤城と共に上毛の三山と稱せらるゝ榛名山は、關東平野の上に聳ゆるを以て、裾野遠く四方に廣がり、切截圓錐形を爲し山容頗る雄大なり、標高千四百五十七米突、特に伊香保温泉を

来た  
大  
山

有するを以て有名なり、此山は標式的二重式消火山なり。

榛名富士は中央火口丘にして美事なる圓錐形を爲す、頂上には馬蹄形の火口あり、其の東南火口原には榛名牧場あり、火口原の瀧水榛名湖を爲す之れ火口原湖なり、烏帽子岳、鬢櫛、硯岩、掃部ヶ岳、氷室山、摺碓岩等は皆外輪山を爲せり。

烏帽子岳は榛名湖の南岸より望むとき、其の形の似たるによりて此名あり、柱狀節理を呈する富士岩より成れり烏帽子岳の西に接して

鬢櫛山あり、安山集塊岩より組成せらるゝ、又形によりて名付けらるゝ、此山の西々南に當り硯を立てたるが如きは

硯岩と呼ばれ、柱狀節理を有する富士岩より成れり、硯岩の西南に

掃部ヶ岳あり、海拔千四百二十九米突、

摺碓岩は外輪山の南東にある一石門に名付けたる者、高さ十五米突、集塊熔岩より成れり。

榛名湖の水は火口瀧沼尾川に注ぐ、沼尾川に三瀑あり辨天ノ瀧殊に壯絶なり、此川の下流は吾妻川に入る。

榛名富士の東に相馬岳あり、英閃輝富士岩より成れる乳房山なり、南西南及北東西とは爆裂作



用によりて壊崩せる爲め攀つべからずと雖も、東側よりは鐵鎖によりて登ることを得べく、西側火口原内よりも登路あり、相馬岳の北に

二ツ岳あり、峰頭三分し東西の二峰に男岳及女岳の名あり、最小なる一峰に孫嶽の名あり。

高崎市より室田村(五里)を経て登山するを順路とす、途中一ノ華表二ノ華表あり、榛名村の人家を過ぎ石階を登り、随神門、御萩橋、三重塔、袖摺岩、神橋等を経て石磴を登れば双龍門の傍に出づ、鉾ヶ岳の巨岩あり、此附近より奇岩怪石奇態百出名状すべからず、榛名神社は社殿宏壯ならざれども彫鏤稍見るべし、尙ほ登ること數町葛籠岩あり、忽然榛名湖畔に出づ、伊香保富士、烏帽子岳、鬢櫛山、硯岩等影を清波に涵し風光明媚を極む、二ツ岳の麓をめぐり行くこと二里にして伊香保温泉あり、こゝより前橋及高崎へ電車の便あり。

### 三六、赤城山

上毛の三山中妙義及榛名を記せり次に赤城を説かん、赤城山は利根、勢多の二郡に跨り、南方は關東平野をめぐらし其の裾野最發達し、北方は日光火山に連なり、東は足尾山塊に接し、西方榛名と相呼應す。

赤城は一の標式的二重火山なり、舊火口の中央より東南に偏して地蔵山の中央火口丘あり、海拔千八百四十米突、外輪山は楕圓形をなし黒檜山、駒ヶ岳、五輪峠、野坂峠、荒山皆其の一部なり、火口原には火口原たる赤城湖あり、略々曲玉状を爲し大沼と呼ばれる、湖の東岸に近く小鳥ヶ島あり、島上に小祠あり、湖水は西南隅に沼尾川の火口瀬となり、野坂峠の西に於て外輪山を破りて排水す。

赤城神社は湖畔にあり。

大沼の外に一小湖あり小沼と呼ぶ、地蔵山の東南にあり、之れ亦一の火口湖にして奇生的に噴出せる火口に滲水せし者なり。

外輪山に屬する黒檜山、荒山、中央火口丘地蔵及鍋割、鈴ヶ峰を赤城の五岳と呼ぶ。

此山に登る者は前橋市より山麓小暮(二里餘人車を通ず)に至り之れより頂上まで四里大概坂路なり、小暮より二里にして左に硯石山右に鍋割を望む、猶ほ一里にして右方に小沼を望む、之れより二十餘町大沼の岸に出づべし。

こゝより追貝、根利の諸村を経て沼田地方に下ることを得べし。

以上上毛の三山を説きたればこれより以下日光其他の諸山に及ぶべし。



## 三七、日光及白根山、

單に日光山と呼ぶときは男體山のことなれども、吾人は常に男體、白根、袈裟丸、赤薙、女貌大真名子、小真名子、月山、太郎、温泉等九座の火山を總稱して日光火山彙と稱す。

日光は結構の美を以て天下に鳴る、而して白根の掛峰男體の峻巒、群山を抜いて天空に聳ゆ。

男體山は黒髪山二荒山(日光山)の名あり、完全なる圓錐形をなし、海拔二千四百八十三米突、頂上には直徑四百米突の舊噴火口あり、榎輝石、富士岩、橄欖岩、玻璃質富士岩等山體を構成す。

此山に登る者は日光町より三里にして中宮祠に達し、直に男體山に登ることを得べし、これを表口となす登頂まで約三里と稱す。

中宮祠より三里にして湯本あり、途中植物産地として有名なる赤沼原(千丈ヶ原)あり、太郎山に登る者は此原よりす、山上に御花畑あり。

植物採集の目的より云ふときは、日光町より直に男體山の裏山道と稱する峻道を辿りて大真名子山、男體山の峽間なる志津の小舎に達し、此處を根據地として男體、太郎山等に登山すべし、若し然らずんば太郎山の如きは中宮祠よりするも湯本よりするも一日に往復せんこと難し。

白根山は男體山の北七十五度西に聳え山相頗る峻峻、峰頭二分す、舊火口壁の東方高所を前白根と稱し、火口原に五色沼の火口原湖あり、西方に突元として聳ゆる者は火口丘にして、奥白根と呼ぶる、海拔二千五百米突、前白根は流紋岩より成り、奥白根は榎輝石富士岩よりなる、高地性植物多し、上信の境なる草津白根と混同を避くる爲め日光白根と呼ぶ。

此山に登るには山麓湯本よりす、登路約三里と稱し一日に往復すること容易なり、喬木帯中を登り一旦外輪山の頂に達し、左方を迂回して奥白根の頂を究むべし、登路明かなり。

## 三八、那須山、

那須火山は本州北部中央を縦走せる那須火山脈中の雄峯にして現今盛に活動せり、其の區域下野岩代磐城の三國に蟠屈せり。

本火山は茶臼山、南月山、三本槍の三火山に分る、三本槍最も高くして海拔千九百四十米突あり、普通那須岳と呼ぶは現時火山力の活動せる茶臼岳を意味す。

茶臼岳は海拔千九百十二米突、其の南東に那須大爆裂火口と稱する大火口あり、明礬澤、高雄股澤等の溪流と明礬平、八幡平、ツムシガ平の三平原は此火口内にあり、所々に硫氣孔あり、那



須八湯中の七湯は實に此内に存す。

茶臼山も二重式火山にして峰頭は即ち中央火口丘にして北方峭壁との間に火口原あり、頂上の南に偏して高湯爆裂火口あり、西方無間の谷の上部にも爆裂火口あり此二者最大なり、其他小爆裂火口多し現今盛んに活動せる者は北西より南東に走れる裂溝中より噴出するものなり、常に噴煙を望むべし。

此山に登らんとせば奥羽線黒磯驛に下車し四里にして湯本に達す、此間人車及馬車を通ず、湯本より二里餘にして頂上に達することを得べし。

又西那須停車場より板室、三斗小屋を経て裏面より登ることをも得。

### 三九、飯豊山

飯豊山は羽、越、岩代の三國々境に蟠屈せる高山にして海拔千八百八十米突、高山植物の種類に富めるによりて有名なり、先づ岩代方面の登山路より説明すべし、岩越線喜多方驛に下車し、相川村を経て一ノ木に至る此間約三里、一ノ木に飯豊山神社一ノ鳥居あり、一ノ木より二里半川入村の寒村に達す二ノ鳥居あり、これより半里にして御澤と稱する地名あり、これより以上次第

に急坂となり笹平、横峯、妙見等を経て地蔵に至る御澤より約一里、之れより高山植物次第に現はる、地蔵より劔ヶ峯、箸王子、七森、種蒔を経て、米澤よりの登山路に合すこゝをキリアハセと呼ぶ、地蔵より約一里、種蒔以上残雪多し、草履塚、御前坂、一王子、二王子を経て三王子に達す、キリアハセより又約一里なり、御前坂に石室あり宿することを得べし、三王子に御本社あり稍廣き石室あり、三王子より少しく登れば五王子に達す之れ本山の絶頂たり、絶頂より峰傳ひに大日岳に至ることも得べし約二里あり。

越後方面よりの登山路は北蒲原郡赤谷村赤谷より登る者、瀧谷温泉（浴舎なし）附近に露宿せざるべからず、赤谷より五里と稱す、瀧谷以上飯豊川原始的峡谷は實に幽邃を極む、瀧谷より頂上まで又五里と稱すれども路悪絶一日に達し難しと云ふ、十分なる案内者なくんば登るべからず。

米澤方面よりの登山路は即ち東北口にして、南置賜郡中津村大字岩倉より登るもの里程約七里強あり、又西置賜郡小國驛より小玉川温泉を経て登るものあれども頗る嶮惡なり、一般に米澤口は残雪多くして登降甚だ危険なる所多し。

### 四〇、磐梯山



磐梯山は岩代國耶麻郡猪苗代湖の北方に聳ゆる活火山なり、明治廿一年大爆發を爲せしより有名なる山となれり、略圓錐狀を爲し、西南方面より之れを望むときは形狀富士山の如し、故に一に會津富士の名あり、山頂は大磐梯、赤埴山、楯ヶ峯、湯桁山等の諸峰より成れり、赤埴及大磐梯は南方に聳え楯ヶ峰、小磐梯（破壊して大部を存せず）は北方に聳ゆ、此等諸峰の間にある沼ノ平は舊火口なり。

大磐梯は最高く海拔千八百四十米突あり、東北面は懸崖絶壁をなして沼ノ平に臨み、こゝに熔岩層の好露出を見る、南方は斜面緩にして遠く裾野に連れり。

楯ヶ峰は大磐梯山の東北に聳ゆ高さ千六百二十二米突、其の西側は斷崖を爲して爆裂火口に臨めり。

湯桁山は、大磐梯の北方にあり頗る峻峻を極む。

小磐梯は大磐梯の東北に聳えたりしが、明治廿一年大爆發の際山體の大部を破壊せり。

磐梯山は層狀火山にして、山體の構成より觀察するときは、沼ノ平は最大舊火口たりしを知ることを得べし。

磐梯山に登山せんとせば岩越線翁島停車場に下車し、約半里にして押立温泉に至り、之れより

山路にかゝり、小儀式、大儀式、草湯を過ぎて上ノ湯に出づるを順路とす、押立より約一里半と稱す、大磐梯山の頂上を究め且つ噴火口沼ノ平を精査せんとせば、上ノ湯、中ノ湯或は川上温泉に一泊するを要す。

又猪苗代町より一日にして周覽せんとせば、前述の登路を登り上ノ湯に至り、こゝより爆裂火口内に下り川上に出で、長瀬川に沿ふて南下し猪苗代町に歸るべし。總里程約八里なり、即ち猪苗代押立間一里半、押立上の湯間一里半、上ノ湯川上間二里、川上猪苗代間三里なり。

磐梯山の巡檢を爲さんとせば上ノ湯、中ノ湯或は川上を根據とすべし。

#### 四一、岩手山

岩手山は巖鷲山の別名あり、盛岡の西北に聳ゆる二重式火山の一種倚肩火山と稱せらるゝ者なり、海拔二千七十米突、其の形式富士に似たるにより、南部富士岩手富士等の名あり、其の頂上は東西に並列せる二個の火山圓錐より成れり、西方にある舊岩手火山の東部に新岩手火山噴出被覆して最高點を爲せり、新岩手火山の頂上には一大噴火口あり、其の側に妙高ヶ嶽と稱する中央火口丘を存せり、外輪山の最高點を藥師ヶ岳と呼ぶ、山頂附近草木頗る少なく、高山植物たるイ



ハブクロ、オコマダサ等非常に多し。

新岩手火山の東腹に享保四年正月噴出せる焼け走りの熔岩流あり、其の表面は岩塊磊々皺紋波状を爲し全く草木を生せず、一大奇觀を呈す。

舊岩手火山は山體頗る廣大、舊火口壁の大部を存すれども東部は全く新岩手火山の爲めに被はれたり。舊火口壁の南方を鬼ヶ城と呼ぶ、舊火口には水を湛へ御釜と呼ぶ、火口原湖は御苗代の名あり。

岩手火山は二重式火山として其の構造整然たるにより、地質學者等の登攀すべき山、又植物の種類にも富み東北地方に於ける好採集地たり。

登路四あり、

一、盛岡御神坂、盛岡市より奥州街道を進むこと二里巢子と稱するところより左方支路に入り、瀧澤村柳澤に至る此間盛岡より四里半、柳澤より頂上まで約五時間を要す、山麓及頂上(約九合目)に宿泊すべき小舎あり。

二、雫石御神坂、盛岡市より雫石を経て登山するもの、九合目石室附近にて前者と合す。

三、平笠御神坂、東北山麓田ノ頭より平笠を経て登山する者なり。

四、西南麓大釋網張温泉を経て登る者、間道にして路頗る峻悪なり。

#### 四二、早池峯

北上山系の主峰を早池峰とす、海拔千九百九十六米突下部古生層、上部蛇紋岩より成れる高山にして、高山植物の種類に富めるを以て有名なり。

登路は、

一、盛岡より宮古街道を進むこと十二里門馬に至る此間馬車人車の便あり、門馬より山頂まで三里、途中險路なく至つて容易なり、山頂に小舎あり宿することを得べし。

二、花巻停車場より東方十二里にして遠野に達し、更に六里にして薬師出麓大出に至る、花巻遠野間馬車の便あり、遠野より大出まで馬を通ず、大出より頂上まで五里と稱す。

#### 四三、八甲田山

八甲田山は一大火山群にして田茂泡岳、赤倉岳、井戸岳、前岳、酢ヶ湯岳、小岳、高田大岳、石倉嶽等の諸峰より成る。一に甲田八峰と稱す、津輕北上の兩郡に跨がり山容頗る雄大なり、各



峰は決して一大火山の残峰にあらず、何れも個々獨立せる消火山なり、

1、酢ヶ湯岳は群峰中の最高峰にして一に大嶽と呼ぶ、北は赤倉岳に接し南方石倉岳に對す、山頂鈍圓其の形によりて釜伏岳とも呼ばる、其の東方に偏して火口あり徑百四十米突、西南方少しく下れるところに小湖あり、其の西南酢ヶ湯附近には硫質噴氣孔を有す、本山は群峰中最後の活動を爲せる者最も温泉に富めり。

2、田茂范岳は山頂扁平舊外輪山の一部殘存せる者なり、舊火口は他火山の噴出によりて全く不明となれり。

3、赤倉岳は中央火口丘にして高度酢ヶ湯岳に及ばずと雖も群峰中の雄たり、井戸岳は其の寄生火山たり、火口は空澤の火口瀨によりて破壊せられたり。

4、井戸岳は赤倉岳の南側を破りて噴出せる寄生火山なり、山頂に圓筒狀の火口あり。

5、前岳は田茂范岳の北方にあり、其の高度兩者相似たり、舊外輪山の西北側に噴出せる寄生火山なり、秀美なる圓錐狀を爲す。

6、高田大岳は東方にあり高度酢ヶ湯岳に次ぐ、一の層狀火山なり、火口は著しく破壊せられて北方に開けり、一般に急峻にして登攀最も困難なり。

7、田代岳は高田大岳の東北側に噴出せる寄生火山なり。

8、石倉岳は酢ヶ湯岳の南方にあり、其の高さ著しからず、全山火山噴出物及泥流によりて被覆せらる。

登路は青森市より山腹酢ヶ湯温泉まで道程八里、此間車馬を通ず、酢ヶ湯温泉を根據として登攀すべし。

酢ヶ湯より最高點酢ヶ湯岳に登るには、硫黄採取場の舊趾を経て峻嶮なる山路に登り、種蒔苗代と稱する湖邊を過ぎ、猶は崎嶇たる阪路を登り始めて頂上に達することを得べし。

#### 四四、岩木山、

岩木山は津輕平原に聳立せる休火山して、山容秀麗富士に酷似せり津輕富士、奥の富士等と呼ばる。山頂三峰をなし、文人畫の富士を見るが如し、中央を岩木山、南方を烏海山北方を巖木山と呼ぶ、二重式層狀火山を爲せども其の構造頗る簡單なり、全山殆んど喬木なきを以て頗る平凡なるを感ず、頂上附近高山植物を産すれども種類多からず、登攀頗る容易山麓より半日にして登降することを得べし。



登山せんとする者は弘前より北行四里岩木村百澤<sup>ひらき</sup>に達し、こゝより登路あり頂上まで三里と稱すれども頗る近し、殆んど案内者を要せざるなり。

裏山路は急峻なれども北麓原始的なる原野に下り、高杉に出で弘前市に歸ることを得べし、道程前路と大差なし。

#### 四五、鳥海山、

鳥海山は鳥海火山脈の主峰、奥羽の一名山にして夏季登攀する者非常に多し。略圓錐形を爲し廣漠たる裾野を有す、山頂附近高山植物の珍種多し、其の頂上に於ける眺望は實に雄大なり、奥羽地方の千山萬岳其の脚下に集まり、西方脚下に近く日本海の渺々たるを見る、男鹿半島、飛島、粟生島等一々指點すべし。

鳥海山の頂上を新山と稱し中央火口丘なり、其の西南を擁して七五山の外輪山あり、この外輪山と新山との間を千ヶ谷と呼ぶ、七五山の内側は絶壁をなし明かに熔岩層を認むることを得べし、新山に豊宇氣毘賣神を祀れる小祠あり、傍らに登山者を宿せしむる小舎あり。

新山は享和年間の噴出によりて成れ者なれば享和嶽の名あり海拔二千二百二十三米突あり。

新山の西に接して荒神岳あり、有史以前の噴出にかゝれる中央火口丘たり、山體の一部新山によりて被覆せられたれば新山と明らかに其の地形を區別すべからず。

鳥海山の西半部は東半部に比して著しく低しと雖も、舊時の一大火山にして二重式を爲せり、筈ヶ岳及月山森は外輪山にして鍋ヶ森は中央火口丘に當り、鳥ノ海は爆裂火口に水を湛えたるものなり。

鳥ノ海神社は此火口壁の北側に立てり。

鳥海山の登路に三道あり、

一、蔵岡口、酒田方面よりの登路にして表口なり、即ち酒田より北方四里半にして蔵岡に至る、爰に鳥海山に里宮あり、蔵岡より頂上まで約七里と稱す、途中所々に夏季臨時的の小舎あれども宿泊に堪えず、所々多少險路あれども左程困難を感ずるところなし。

二、吹浦口、吹浦より登る事六里にして鳥ノ海神社に達し、更に一里餘にして頂上に達することを得べし、鳥ノ海附近高山植物の珍種多し。

三、矢島口、奥羽線院内驛より八里にして矢島町に達し、矢島より約二里木境薬師に至れば喬木帯に入る、頂上までの途中秋川に小舎あり秋川以上路頗る險なり。



點ノ名稱	標高		國	郡	村
	米	尺			
劍ヶ峯	3778	12467	駿河		
富士山	3753	12385	同		
白根山	3192	10534	甲斐	中巨摩	芦安
鎗ヶ嶽	3180	10494	信濃	北伊那	大鹿
赤石山	3120	10296	同	下伊那	
奥穂高	3103	10240	飛騨	吉城	
穂高嶽	3090		信濃		
御嶽	3063	10108	同		
鹽見山	3047	10055	同	西筑摩	三嶽里
前嶽	3033	10009	同	上伊那	伊那
乘鞍嶽	3026	9986	同	南安曇	同
農鳥山	3026	9986	甲斐	南巨摩	西山
劍山	2998	9893	越中		
立山	2992	9874	同		
甲州駒	2966	9788	甲斐	北巨摩	駒ヶ城
信州駒	2956	9755	信濃	西筑摩	駒ヶ根
白馬山	2933	9679	同	北安曇	北城山
薬師嶽	2926	9656	越中	上新川	大南牧
赤嶽	2899	9567	信濃	南佐久	
蓮華嶽	2739	9237	同	北安曇	平
鳳凰山	2799	9237	甲斐		
小蓮華	2769	9138	信濃		
白山	2702	8917	加賀	能美	白峯
鋸嶽	2607	8603	信濃	上伊那	美和
乘鞍嶽	2437	8042	同	北安曇	南小谷
鳥海山	2230	7359	羽後		
御嶽	2962		飛騨	益田	小坂町

日本高山標高表

千山萬岳 終

植物採集等の目的にて登山する者は矢島口及吹浦口を登降すべし。



本日高山標高表

點ノ名稱	標高		國	郡	村
	米	尺			
廣河内	2718		甲斐	南巨摩	西山里
馬ノ背	2716		信濃	上伊那	美那
伊那荒倉	2698		同	同	伊那
安倍荒倉	2693		同	同	同
唐松谷	2696		同	北安曇	北立城
五越嶺	2681		越中	中新川	立同
牛小屋澤	2678		同	同	同
祖父嶽	2670		同	同	同
黒川	2658		信濃	下伊那	大鹿
茶白山	2653		同	西筑摩	豐平
東嶽	2646		同	諏安	井立
白峰澤	2632		駿河	中新巨摩	川都大
西嶽	2630		越中	南西筑	城小井
筑ヶ嶽	2629		甲斐	西頭	倍摩川
越白	2613		信濃	西安	中巨新
六兵衛	2611		越後	河斐	中
飛瀨	2598		駿甲	越中	濃斐
金峰	2595		同	同	同
大祖母	2592		同	同	同
清水	2590		同	同	同
光嶽	2591		信濃	下伊那	那澤村
辻	2585		甲斐	中巨摩	芦視川
大布引	2584		同	南巨佐	久根
國師嶽	2592		信濃	南利	根片
白根山	2578		上野	濃河	濃
峰ノ松目	2567		信濃	同	同
奥嶽	2564		同	同	同

點ノ名稱	標高		國	郡	村
	米	尺			
聖ノ嶽	2978		駿河	安倍	井川
荒川嶽	3033		信濃	下伊那	大鹿
須山八合	3307		同	同	同
驚本流上	3221		同	同	同
須走六合	3026		同	同	同
鹿島入	2890		同	同	同
前嶽	2883		同	同	同
上千枚	2880		同	同	同
吉田七合	2867		同	同	同
中侯	2864		同	同	同
繼子嶽	2859		同	同	同
三ノ澤	2846		同	同	同
觀音嶽	2841		同	同	同
西小岩	2827		同	同	同
大澤嶽	2819		同	同	同
野川入	2820		同	同	同
平川	2817		同	同	同
祖母谷	2812		同	同	同
上河内嶽	2803		同	同	同
小河内	2802		同	同	同
小兎嶽	2799		同	同	同
高嶺	2779		同	同	同
大箕冠	2767		同	同	同
箕冠山	2742		同	同	同
小太郎山	2725		同	同	同
梯子嶽	2728		同	同	同
麥草頭	2721		同	同	同



表高標山高本日

點ノ名稱	標高		國	郡	村			
	米	突尺						
折立澤	2112		駿	河	安	倍	井	川
將監	2003		武	藏	秩	父	大	瀧
唐松尾	2109		甲	斐	東	山	梨	金
合地山	2104		遠	江	榛	原	上	川
燒滑	2083		飛	驛	大	野	白	川
水無峠	2076		甲	斐	南	巨	硯	島
黒法師嶽	2067		遠	江	橋	原	上	根
比龍	2069		甲	斐	北	都	丹	波
三方崩山	2059		飛	驛	大	野	白	川
釋迦嶽	2053		加	賀	能	美	白	峯
大菩薩	2057		甲	斐	北	都	丹	波
尾島	2047		加	能	南	佐	久	川
十文字	2072		信	濃	東	筑	入	山
美ヶ嶽	2034		同	驛	大	野	白	川
寒倉	2037		飛	河	能	美	尾	口
尾添湯谷	2024		駿	藏	秩	父	大	瀧
白石	2016		武	斐	西	多	摩	川
雲取山	2018		同	斐	北	都	留	侯
雨澤	2014		甲	河	安	倍	梅	ヶ
山伏峠	2014		駿	斐	北	都	留	丹
大常木	2012		甲	斐	北	都	留	丹
淺間山	2493		信	濃	後	中	頭	城
妙高山	2446		越	後	中	頭	城	城
寶永山	2702		駿	後	中	頭	城	城
燧ヶ嶽	2462		越	後	中	頭	城	城
燒ヶ嶽	2400		同	濃	中	頭	城	城
高妻山	2353		信	濃	上	水	内	内

點ノ名稱	標高		國	郡	村				
	米	突尺							
大古森	2555		甲	斐	南	巨	摩	都	川
黒檜山	2540		信	濃	上	伊	那	伊	那
生木割	2539		甲	斐	南	巨	摩	都	川
蓼科山	2530		信	濃	北	佐	久	芦	田
編笠山	2524		同	賀	美	諏	訪	境	口
龍ヶ馬場	2519		加	河	安	美	能	尾	川
仁田嶽	2524		駿	斐	片	マ	倍	井	安
荒倉山	2517		甲	濃	上	伊	那	伊	里
小日影山	2505		信	濃	下	伊	那	大	鹿
千枚	2503		駿	河	安	能	倍	大	川
別山	2399		加	賀	北	安	美	白	峯
乘鞍嶽	2437		信	濃	江	安	曇	南	小
十濃俣	2376		遠	江	榛	原	原	上	川
信濃山	2332		駿	河	安	倍	原	上	川
大無間山	2329		遠	江	秩	同	父	大	瀧
不破坂	2318		武	藏	秩	同	父	大	瀧
雁坂	2289		同	江	同	周	智	奥	山
中尾根山	2296		遠	賀	周	能	美	白	川
山馬谷	2244		加	江	同	能	原	上	川
大根澤山	2239		遠	江	同	能	原	上	川
不動ヶ嶽	2171		同	驛	大	野	白	井	川
大無間山	2169		飛	河	安	佐	久	野	川
小無間山	2150		駿	濃	南	大	野	白	川
五郎	2132		信	驛	南	大	野	白	川
上間名古	2124		飛	江	周	野	智	奥	山
黒澤山	2123		遠	江	東	山	梨	三	富
釜川村	2112		甲	斐	東	山	梨	三	富



點ノ名稱	標高		國	郡	村
	米	尺			
石槌山	1981		伊豫	周	桑
劔山	1955		阿波	海	部
戸隠山	1885		信濃	上水	内
那須嶽	1919		下野	那	須
磐梯山	1819		磐城	耶	麻
月山	1979		羽	前	那
久佳山	1788		豐	後	猪
九重山	1764		同	直	苗
大船山	1787		同	同	住
大祖母山	1758		同	同	久
大阿蘇山	1713		同	大	同
霧島山	1592		肥前	西	野
伊吹山	1574		薩	阿	伯
大伊吹山	1377		近	北	蘇
大御嶽	1253		相	南	縣
開山	1133		薩	中	井
開山	924		同	揖	宿

本表ハ柴崎芳太郎氏(陸地測量部技手)ヨリ寄セラレタル山嶽高度表ニシテ思フニ測量部ニテ作リシモノナラン標高ハ四十二年迄迄成果ナリトス

日本山嶽會

	信濃	甲斐	越中	駿河	飛彈	越後	上野	下野	加賀	遠江	武藏	岩代	羽前	羽後	美濃
三以上	9	4		4											
二千三百	63	19	24	23	11	21									
二千五百	123	42	31	38	29	18	23	18	6	8	85	5	3	1	1

大正二年九月五日印刷  
大正二年九月十日發行

千山萬岳  
定價金壹圓八十錢



著者 志村 烏嶺  
發行所 東京市神田區錦町三丁目三番地 小林 慶  
右同所 嵩山房  
印刷所 東京市日本橋區三代町二十二番地 明昇 舍

賣捌 全國各書肆



志村烏嶺先生著書

や

ま

全一冊 定價 金壹圓五拾錢  
郵税金 拾貳錢

東京朝日新聞評 高山植物の研究家たる志村烏嶺氏及前田曙山氏の合著にして日本アルプスの稱ある信越連山の奇勝を探り珍草を求め更らに富岳の絶頂に高山趣味をアサリ盡したる紀行十數篇を蒐めて公にせり就中白馬探險の如きは人跡未だ多く到らざる所を研めて屢々山靈を驚かし世に知られざる珍草を求めて學界を殷はしたる一大登山記なり云々

高山植物採集及培養法

全一冊 定價 金壹圓廿錢  
郵税金 八錢

時事新報評 高山研究に深遠なる趣味を有し東北地方の高山大澤を跋渉して殆んど天壇の秘録を披き前人未到の山河を窮めたる著者が其實験より得たる蘊蓄を披瀝したるものなり(中略)本書挿入の著者撮映の白馬嶽絶頂同葱平より杓子岳を望む自然状態のチングルマ等の寫真も又獲易からざる乾版として珍重するに足るべし

大下藤次郎畫伯著

水彩寫生旅行

全一冊

菊判頗る美觀。天金付函入紙數約四百頁。精巧無比原色版二十九葉。色刷木版寫眞版拾數葉挿入。外に本文挿畫澤山定價二圓五十錢。小包料十二錢

△旅行趣味を解する人  
△天然の美を愛する人  
△繪畫に興味ある人

は是非一本を備ふるの要あり

本文略目録(挿畫目録裏面にあり)

十和田湖  
裏見 越 (日光遊難記の一節)  
尾瀬沼  
磐梯周遊記  
奥州見物 (嚴美中尊寺・松島)  
白峰の麓 (甲州湯島温泉記)  
紀念寫生 (行徳)  
さつきの旅 (富士山麓)

秋のたより (多摩川上流)  
榛名の湖  
旅かたり (木曾駒ヶ嶽の麓)  
山中の湖  
寄居行  
北越所見  
甲山信水 (木崎湖一日野暮)  
湖のほとり (猪苗代湖沿岸)

赤城の秋  
穂高山の麓  
ちよぶ日記  
小倉川  
湯ヶ島  
青梅  
小天地